平成6年1月20日発行 第1巻第1号
●コミック花いちもんめ1月号増刊●

パソパラチャット

PP CHAT

ドキドキ美少女ノベル専門誌

パソコンパラダイス

創刊号

680YEN

読んで興奮、
見て満足!
快感120%

1
JANUARY

PpCHAT

1 JANUARY 1994


COVER ILLUSTRATION:HARUHIKO MIKIMOTO

目次

パソパラCHAT創刊!

イラストギャラリー

当イラストギャラリーは、ソフト作品をCGでなくイラストやセル画で見せようというもの。栄えある第一回目は、美しいCGで大人気のD.O.さんから期待の新シリーズ『クリスタルリナール』から。どうぞゆっくりご観賞ください!

「クリスタルリナール」序章

ガルアストムール界の魔術の歴史は、クリスタルの魔術を模索する歴史に他ならない。

魔術理論が示す至高の魔術は一千年の間、地上の何者の手にも渡る事はなかった。

世界を満たす魔気と呼ばれる力が実体化する際の特性は、6つの色に分類される。

そして、それらを統合しつつ新たな力を宿す7番目の実体化がクリスタルの魔術である。

物質の存在を許さないはずの異空に、カム・ルトラを構築し国々の行き来の旅から距離の概念を取り払ったその力こそが、クリスタルの魔術だった。

地上でただ独りその力を宿した、魔術師ファジルの業である。

ファジルの従える6人の使徒は、物質化した魔気の色になぞらえて呼ばれていた。

白念の魔術師リムロはファジルに言った。

「あのような男を野放しにすれば、良くない事がおきるわ」

リムロの言葉にファジルは顔を上げ苦笑した。

「ゼトもずいぶんな言われようね…。共に魔術を探求する仲間なのに…」

リムロは、身を乗りだし声を潜めた。

「白念の魔術は、精神に作用する魔術…。根拠のない予感ではないわ。あの男…。ゼトの青炎魔術は、このカム・ルトラの中では特に強大だし…」

「だからと言って彼が何をするって言うの?」

「何でも出来るわよ。この魔気に満ちた空間では、魔術師は強大な力を手にするわ…。恐ろしい事が起きるかも知れない」

昨夜はゆっくり眠ったし食欲もあった。熱がある感じじゃない。

不安感のような物がわけもなく、胸に居座っている感じだ。

俺の顔色を見た担任が保険室で休んで来いと言ったので、言葉に甘える事にした。

「くそ…! 吐きそーだな…」

保険室の扉を開ける頃には、その場にへたりこみたい程の脱力感に襲われた。

養護の広田は美人だが化粧っけが少なく、まだ十代と言っても通用するあどけない顔をしてそこに居た。

胸元の白い石の首飾りだけが少し大人を感じさせる。

「どこも悪くないわ、精神的な物よ…。きっと軽いノイローゼだわ」

ろくに症状も聞かずに広田が言った。

「いいかげんだなぁ」

言葉ではそう言ったが、この不安感が体調を狂わせているのだと言うのは、多分事実だろう。

「……。一時的なものよ…。すぐ直るわ。何かの予感に押し潰されそうになるような感覚…」

広田は、まるで見透かしているような口ぶりだ。

「なんで、そうだと思うんです?」

「さあ?でもそれは、きっとすばらしい予感よ」

―― 二つの、異なる世界の予感が重なる。――

イラスト/D.O.(クリスタルリナールより)



巻頭特集

美少女の下着

CG美少女のインナーウエア考察

ブルセラショップが流行し、下着に対する関心もいまさらのように高まっている。本誌も、女性の下着がパソコンゲームの中でいかように表現されているかを考えてみた。



久遠寺綾　きゃんきゃんバニー・エクストラ（カクテル・ソフト）より

どうも、こんにちは。雑誌を買ってくださってありがとうございます。より楽しく！　より明るく！　そして、よりHに！　を合言葉に、なんとか面白い雑誌にしていきたいと思います。

ところで今、下着って、高級なものから、かわいいけど安いものまで各種なんでもあって、すごいと驚いてます。

ブルセラショップでの使用済み下着販売が有名になって、最近にわかに人気が出てきたのかなと思ってたんですけれど、女の子の間で下着におしゃれしだしたのはかなり昔からみたいなんです。木綿かメリヤスの白しかない時代ではないということですね。

人によって違うけど①純白木綿パンツの時代　②プリント木綿パンツの時代　③色つきパンティーの時代　④絹・レースなど高級素材下着の時代という風に進んでいくみたいです。もちろん、同時に何種類の下着を目的別、気分別に使い分ける人は多くなってきました。だいたい③のカラーものを身につける時期は、幼女から少女へと進む頃にあたるので、このあたりからパソコンゲームに出てくるようになります。ちょうどブラと合わせて買うようになる時期ですもんね。逆にかわいいプリント下着をみせることで少女性（まだ幼い）を出すという演出も可能になります。

純白のエチュード　－乙女の基本－



最初にきゃんきゃんバニー・プルミエールをやった時、感動したのはその質感。とくに布の質感に感銘を受けた記憶があります。もしかしたら、それ以前に発売されたソフトでもすばらしいCG表現をされていたのかもしれませんが。

このきゃんバニ4(プルミエールのこと)で、特に江藤莉奈の木もれ陽のなかで脱がす下着の強烈な印象はちょっとしたものがありました。行動的で元気のいいバイク乗りの莉奈ちゃんが清楚な下着だったのでちょっとびっくり。実は素朴でかわいい女の子なんだなと再認識させられたものです。

同級生の舞ちゃんはお嬢さん育ち。同じ白でも絹の質感をだすその技術には感動さえ覚えます。これも印象の強い場面ですね。

江藤莉奈　きゃんきゃんバニー・プルミエール（カクテル・ソフト）より

白色は純潔を現わし、昔から処女の代名詞としてとらえられていました。清純なキャラクターには白が一番ふさわしいといえましょう。同じ白でも絹の光沢は高級イメージ。お嬢さまの証です。

桜木舞　同級生（エルフ）より



脱がせのテクニック
下着は脱がせる為に存在するのか？

パソコンゲームでは女の子がどんどん服を脱いでいくように作られている。よく見ればわかりますが、このエクストラでは少しづつCGが違っています。そういう意味ではそうとう進化したゲームCGなんですよ。ゲーム目的からいうと下着はモンスターと同じ、邪魔な障害物なんだけど…。





青山美紗生　きゃんきゃんバニー・エクストラ（カクテル・ソフト）より

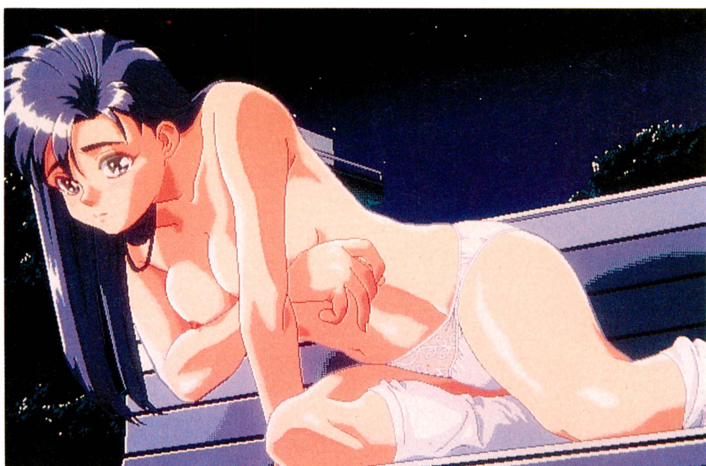
下着CGの生みの親

聞いたところによると、原画を描く人の多くは裸の絵と服を着た絵しか描いてくれないらしい。

では、下着は誰が描くのか？

そう、下着はドッターと呼ばれるCG担当の人の苦労のたまものなのだ。もちろん原画段階から下着を描く人もいるけどね。

最近は下着に凝る人も多いので、美しいもの下着の需要がドンドン増えている。全国のドッターさんに励ましのエールを送ろう。



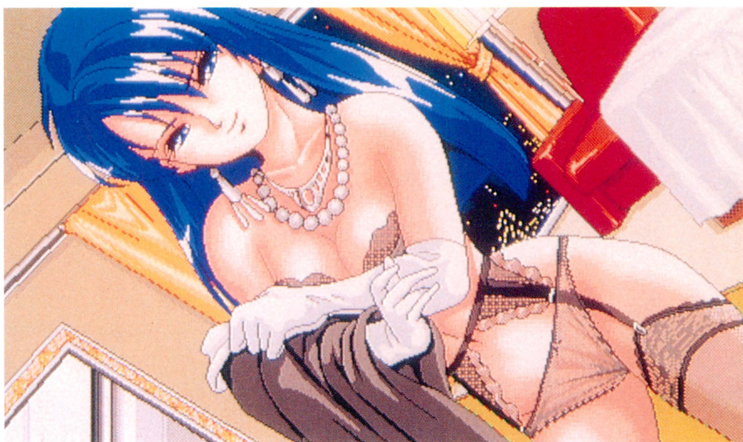
ガーターベルトのテンプテーション

― 大人の女の魅力 ―

下着表現に多彩な顔を与えたのはガーターベルトの存在が大きいと言えます。

現在、日本人女性に圧倒的に売れてるのはパンティーストッキングで、ガーターのいるストッキングは高級品、または商売女風であるという風潮はまだあります。そういえば、最近は薄まったとはいえ、紫や黒などの濃い色の下着をはく女は、まだまだプロだと考えられています。

同じガーター&ストッキングでも、深雪さんとステラ王女は全然印象が違いますね。



氷室深雪　きゃんきゃんバニー・プルミエール（カクテル・ソフト）より



ステラ王女　CATS' PART-1（Cat's Pro）より

大人の女の魅力は何か？　とたずねられれば、娼婦のような下着やしぐさといのも答えのひとつといえるでしょう。ガーターはその筆頭格なのです。

シースルーのインパルス

―表現のさらなる深化―

最近の下着の傾向で、もっとも衝撃が大きいのはシースルー表現だと思います。シースルー表現とは、絹などの薄ものを透かして下のものが見えるという技術です。これでスケスケネグリジェもレースの下着もなんでも来いっ、てな感じです。ちょっと古くてマイナーですが、ビニ本でヴェール1枚のといって、ヴェールもを通して大事なアソコを見せるという裏技なんですが、それさえもやろうと思えばできてしまいます。だけどソフ倫には通らないでしょうね。

松本理恵子　シャングリラ2（エルフ）より



SPECIAL

UNDERWEAR

少女たちは今日も下着を身につけ古い殻を捨てるように脱ぎ捨てる

内藤緑　シャングリラ2（エルフ）より

シースルーと同じく表現上の発展を促進したのはSM的な下着。

ボンデージファッションとSMとは、本来違うものらしいんですが、わたしたちにとって、なんとなく一緒にしてしまいます。革製品の光沢やちょっと特殊なデザインは裸にアクセントをつけてくれます。一種のフェチシズムを満たしてくれるわけなんでしょうね。

フェチシズムといえば、パソコンソフトの中で、ガーターベルトをしている女の子は最後までいってもガーターをしたままでいてくれます。このあたりもソフトハウスさんたちの粋なはからいといえましょう。

ボディースーツやコルセットも、裸を見せるまえのちょっとしたアクセントというわけで使われ始めています。

前のページのシャングリラ2の理恵子ちゃんは、美しいシースルーの下着で、最近のCG技術の高さを魅せてくれます。

上の、同じくシャングリラ2の緑さんはパソコンゲームではほとんどみかけないパンティーストッキングです。たしかにガーター&ストッキングに比べると派手さではおとりますが、逆に現実感がぐっと増して、ドキドキゾクゾクします。

目的のためには邪魔になる下着ですが、その過程があってこそ目的達成の満足感が得られるのではないでしょうか。（編集部）



超格闘伝説連載スタート

レディ・サンダー

LADY・THUNDER

Illustrator
魔夜義寿
Mayagisu

Author
松井 淳
Jun Matsui

ようこそ!女子プロレスの世界へ!!

めぐみの熱き闘いの記録は30ページより

弱小興業団体「東洋女子プロレス」所属のレスラー流藤めぐみは、軽量ながらその類希な素質から、わずか1年でIWC認定ジュニアヘビー級チャンピオンとなる。しかし、その後めぐみの元には、ファイトマネーからのリベート要求やマッチメイクから試合の結果までも強要するIWCの黒い罠が待ち受けていた。

弱小団体を潰し世界制覇をもくろむIWC、そして想像を絶する血塗られた陰謀の数々。渦中のめぐみはどう悩み、どう成長してゆくのか。そして現れた謎の覆面レスラー…。彼女の名はサンダー。レディサンダー。

ビューティ由起子

プロレス解説者。元IWC世界ヘビー級ランカー。

流藤めぐみ

主人公。抜群のセンスとテクニックを持つ実力派で、プロレスに対する情熱は誰にも負けない熱血プロレスラー。

ステラ・ノートン

ＩＷＣ世界ヘビー級６位のパワーレスラー。実はＩＷＣよりめぐみに対して送り込まれた刺客。



服部明朗

ＴＶＡ所属の武闘派アナウンサー。

出た！流藤めぐみの必殺技 ダブルニールキィーック!!

AUTHOR
早乙女巽彦(VANITY)
ILLUSTRATOR
メガ男

読み切り美少女ソフト・ノベライズ
TNESS
ヴァーストニス

鬼才シナリオライター
VANITYが描く
官能美少女世界への招待

VAS

セルワーク／スタジオCAT

学園の始め方教えます

ザヴェール家の血



セルワーク／スタジオCAT

私立聖エレノア学園理事長室。そこは赤い絨毯が敷き詰められ、豪華な調度品で飾られていた。その部屋に夕日が射しこみ、その全てをさらに紅く染めあげる頃。

理事長、石嶺沢豪は執務机に両肘を置き、その初老の顔を隠すように両の手を組み、額に当てて、深く暗い表情で考え込んでいた。

「理事長」

「おぉ、お前か……」

不意にかけられた声に驚き顔を上げると、そこには娘の淑子の姿があった。

すでに十九才となり、学園は卒業してしまったものの、真っ白な肌と若さにあふれた美貌は部屋に飾られたどんな花よりも優っていた。

そして朱のドレスが肌の白さを一層際立たせていた。

「どうなさったのですか、理事長？　私が入って来たのも気つかれないなんて」

「うむ。最近、身体の調子が悪くてな……」

淑子は豪の椅子の後ろに回り込み、その細い腕を肩にかけた。

「はやり……血、ですか？」

「早く、最後の家系の血を得なければ、我が高貴なるザヴェール家一族は持ちこたえられない」

「ご安心を。すでに血液鑑定によって、最後の家系の血を持つ者を見つけだしました」

「そうか、でかしたぞ淑子。よし、一刻も早く、



コラム

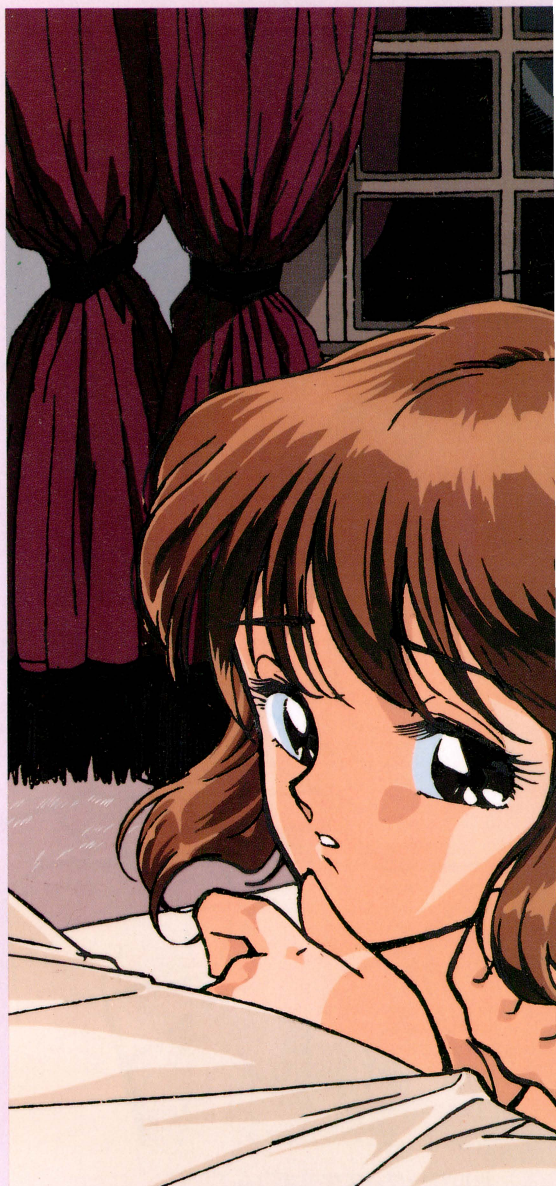
今回ノベライズしたヴァーストニスはパソコンパラダイス・オリジナルソフト。シナリオ1を忠実に小節化したので、だいたいの雰囲気はつかめたと思う。発売はPC9801シリーズ、HOLYWOOD。価格は7,800円。TOWNSへの移植も決定したので続報を待っていてくれ。プレゼント→128頁参照



◀シナリオ2「診察室には秘密がいっぱい」は美人の女医さんがいる白石クリニックが舞台のコミカルストーリー。主人公は17歳の男で、インポの治療に立ち寄ったのが白石クリニック。女医さんの白石恵さんと看護婦の水野安美ちゃんがとってもあぶなく、とってもHに迫ってくるぞ



▶シナリオ3「プラトニック・サディスト」はひとりの女性・野村(旧姓飯野)絹江の「性」遍歴を思い出語るというもの。いじめられっ子だった小学生の頃の突然の性の目覚めに始まり、変態行為に溺れていく女の子の心理を詳細に描いている。どのシナリオもサクサク進むディスクノベル形式



統率者として育て、わしらに命を運ばせるのじゃ」

淑子の話を聞いて豪は安楽椅子に深く身を沈めた。

「かしこまりました。お父様」

淑子は軽く微笑んで部屋を後にした。

私立聖エレノア学園。それは完全一貫教育制度を取りながら、比較的自由な校風を持つ、生徒、親共に非常に人気のある女学園だ。

幼稚舎から高等部まで、全生徒数千六百。同じ敷地内にある寮で共同生活をするのは、高等部からだが。寮で生活できる者は、成績優秀、品行方正、そして理事長に選ばれた一部の者だけだった。

木原亜佐美もその一人だった。それほど美人というわけではないが、整った顔つき、そして均整のとれた滑らかな曲線を持つ身体が華をもたせていた。

その日の晩、消灯時間もすでに過ぎた頃。亜佐美の部屋の戸を叩く者がいた。

亜佐美はその夜の来訪者を待ち焦がれていたように部屋に招き入れた。

それは理事長の娘、淑子であった。

「石嶺沢先輩……来てくれたんですね……」

亜佐美は寝巻姿のまま、淑子に抱きついた。

「あたりまえじゃない。私が亜佐美ちゃんとの約束を破るはずないでしょ」

淑子は優しく亜佐美の肩を抱いた。そして亜佐美にそれと気つかれないよう、後ろ手に鍵をかけたのを確認した。

「さっ、石嶺沢先輩。狭いところですが……」

亜佐美の左手が差す室内は、十畳ほどの部屋に二組のベッドと勉強机、そしてタンスがあるだけの部屋だった。



セルワーク／スタジオCAT

「ほんと、私が使っていた頃と変わらないのね」
「あっ……すいません……」
「ねっ、今日同室の娘は？」
淑子はしょぼくれた亜佐美を元気づけるように明るく声をかけた。
そして奇麗にメイクされたベッドに腰を降ろし、右手で亜佐美にもベッドに座るよううながした。
「あっ、美代子は実家に帰ってるんです。なんでも叔母さんが亡くなったとかで」
亜佐美は戸惑いながら答えた。
「そう、じゃ気落ちして帰ってくるかもね。亜佐美ちゃん、しっかり元気づけてあげるのよ」
「はい」
亜佐美は明るく微笑みながら、淑子の招きにしたがい、ベッドへ腰を降ろした。
「亜佐美ちゃん、よく聞いて。私ね、好きになった人にはこういう事をしたくなっちゃうの」
「石嶺沢……せ、せんぱ……」
淑子は亜佐美のまだルージュの味も覚えていない唇に自分の唇を重ねた。
「女の子同士、愛しあっちゃいけないなんて事はないのよ」
「せ、先輩……」
抵抗の意志は亜佐美にはなかった。
「亜佐美ちゃん、これから私のことは、お姉様と呼んでちょうだい。いい、お姉様よ」
「お……お姉様……」
亜佐美は頬を紅く染め、うつむき加減に言った。
「いい娘ね、亜佐美ちゃん。そうだ！ 今から私がもう一度、キスを教えてあげるわ」
「えっ？！ あっ、でも……」
「キスにもいろいろあるのよ。いい？」
「あっ」
淑子は亜佐美の返事を待たずに、軽い口づけをした。
「これがフレンチキス」
「フレン……」
そして次に、深く、そして長く唇を重ねた。
「んんっ……ん……んんっ……」
「これが、ディープキス」
二人の唇が離れると、その唇と唇の間には、細くきらめく一本の粘液の糸が引いた。
「お、お姉様……今の……もう、一回」
亜佐美は潤んだ瞳で強請った。
「よくってよ」
淑子の瞳は優しく微笑んだ。
「んっ……んんっ……ん……」(すっごい。お姉様の舌が、まるで別の生き物みたいに、私の舌にからまる。気持ちいい)
三度目のキスは、亜佐美を恍惚とさせた。
「いいこと亜佐美。キスは愛情表現の大切な第一歩。上手なキスはそれだけで相手を虜にしてしまうわ」
「お姉様のキスみたいに……？」
「そうね、でも、もっと気持ちいいキスもあるのよ。こんなふうに……」
淑子は亜佐美の首筋に唇を這わせた。
「あっ……ぅ」
亜佐美の熱い吐息が洩れる。
「どう？ 首筋って、結構気持ちいいでしょ。もっともっと、気持ちよくしてあげるわ、亜佐美」
「お姉様……もっと……して」
亜佐美の肩に手をかけ、ゆっくりとベッドへ押し倒した。
「じゃ、まず邪魔な物をとっちゃいましょうね。

VASTNESS

こんなきついブラなんかしてたらダメよ。ほら、ホックを外しただけで、こんなに元気に弾けるじゃない」

ブラのホックを外すと、亜佐美のバストは勢いよくその存在を誇張した。

「亜佐美ちゃんのおっぱいって、いいわ。軟らかくって、暖かくって。私の掌を吸いつけるみたい」

淑子の手が、右に左に、上に下に、亜佐美の胸を揉みしだく。

「あっ、くっ……」

「この先っちょの、〝乳首〟にキスされると、気持ちいいのよ」

「くっ……あん」

淑子の思いがけない口付けに、亜佐美は声を押し殺した。

「我慢しちゃダメよ。気持ちいいときは自然に声が出るものなの。無理しないで、気持ちよかったら素直に声をお出しなさい」

「はっ、はい。んっ……あぁぁん、んあっ」

亜佐美は言われるがまま、吐く息にあわせて声を出した。

「ここへのキスはね。吸ってあげたりするのもあるのよ」

「あっ」

「そう、気持ちいいのね。もっと吸ってあげるわ」

「んっ、あっ……んっ、うぅん」

亜佐美は淑子に翻弄されていた。

「あらあら、私の手がお留守になってるわね。こういうお手々は、亜佐美ちゃんのココにあてがってあげましょう」

「そ、そこは……」

亜佐美の心に反した静止は、淑子の手を止める事はできなかった。

「ここに手をあてがわれると、安心感があるでしょ」

淑子の手は、亜佐美の女性自身を撫でるように覆った。

「慌てなくていいのよ。私がちゃんとリードしてあげるから」

「はっ、はい……」

「亜佐美ちゃんのって、とても形がいいのね。ショーツの上から触っただけでもわかるわ」

四本の指を動かし、亜佐美のものを形取る手に、力がこもる。

「まだまだつぼみだけど、私が華開かせてあげるわ」

「お姉様……んっ、あっ、あん」

淑子がショーツの上から割れ目に添って撫で上げると、しっとりとした、亜佐美の感情の液体がしみだして来た。

「あらあら、ショーツがぐっしょり。おもらししたみたいよ」

「だ、だって。お姉様の……とっても……気持ちいいんだもの」

亜佐美の言葉は、吐息で途切れ途切れになってゆく。

「亜佐美、かわいいわ。とってもかわいいわよ。胸も、腰も、アソコも、すごく綺麗。

全部私の物にしちゃいたい」

「こんな、私でよろしかったら……お姉様に、……うぅん、全部、さしあ……あげます」

「ありがとう、亜佐美。遠慮無く頂戴するわ」

亜佐美は淑子の口が自分の股間に近付くのを、恥毛にかかる熱い息で感じた。

そして指とは違う、ザラッとした感覚が身体を貫いた。

「まだここへキスされた事はないみたいね。どう？女の子が一番感じるキスのお味は？」

「んっ……あぁぁ…あぅん、お、お姉様ぁ……そ、そんな、口でなんて……き、汚いわ」

亜佐美は恥ずかしさから、その行為を否定した。

「亜佐美ちゃんの、薄くピンク色になってて、綺麗よ。もっと綺麗にしてあげる……」

亜佐美は体内に入って来る淑子の舌を、拒む事はできなかった。

「あっ、あぁぁぁ……あっく、くぅっ……おっおねぇ……お姉様ぁ、あぁっ……わ、私、もう……っつ、へ、変なの」

亜佐美は自分の指では味わえない快感に翻弄され、息を荒立たせた。

「全然変じゃないわ、亜佐美ちゃん。あなたの声、とっても素敵よ。かわいい声、もっと、もっと、悦びの声をあげてちょうだい」

「おっ、あぁぁぁ……お姉様ぁぁっ……あっあさ、亜佐美……お姉様に……喜んでもらえるなら……あっ……うっ……な、何でも……しますぅ、うぅん」

淑子の舌の動きにあわせて、亜佐美の声が途切れ途切れになる。

「いい娘ね、亜佐美。私の可愛い亜佐美」

十分濡れている事を確認した淑子は、亜佐美のショーツのわきから、その指を滑り込ませた。

「いい？ 亜佐美。私の指、気持ちいい？」

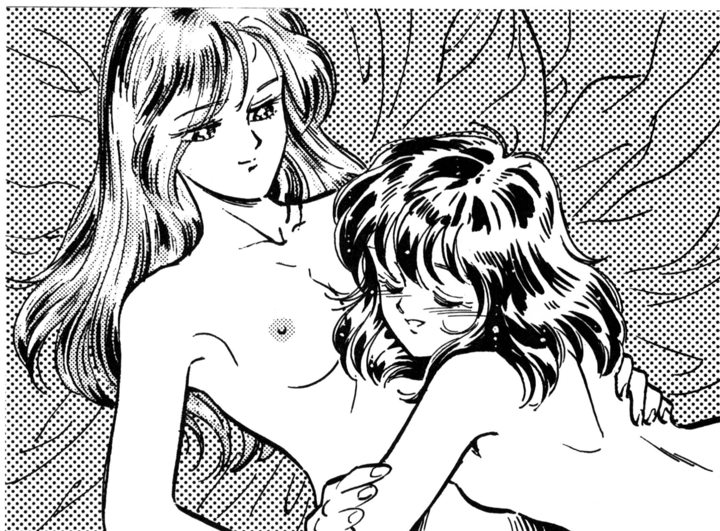
「いっ、いいっ……はぁっ、あぁぁ……」

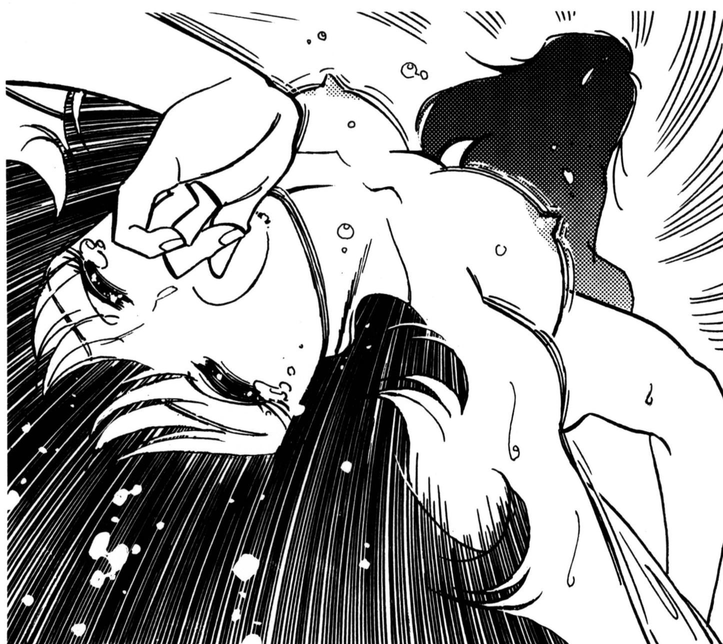
亜佐美は返事すらできなかった。

「もう一本、入れてあげるわ」

淑子は二本目の指を、先に入れた指に添って挿入した。

「はぁぁぁっ、んつっ……うあぁぁっ……」
反射的に亜佐美の上半身が起き上がるが、淑子は口付けでまた押し倒した。
「とっても綺麗よ、亜佐美。いま、いかせてあげるわ」
淑子は二本の指を亜佐美の中で開き、そして一旦指先まで抜き、また深く挿入した。
「そんなに、つ、強く……しな、あぁぁ、しないで……亜佐美っ、変……変になっちゃうお姉様……あっ……くぅっ、っう……あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ……」
亜佐美が果てるのを確認すると、淑子はさっきまで亜佐美の中で踊っていた指を引抜き、舌でねぶった。
「亜佐美……イッってしまったようね。んふっ、かわいい娘。あなたは今日から私のペット、そして……」
時は経ち、朝日のまばゆい光が、レースのカーテン越しに暖かく二人を包みこんだ。
「目が覚めて？　亜佐美ちゃん」
「はい……」
二人は一枚の毛布にくるまり、ベッドの端に座った。
朝日にきらめく淑子の姿は美しく、美の女神アフロディーテのように輝きを放っていた。
「いきなりこんな事しちゃって、ショックだったかしら？」
「そっ、そんな事ないです」
亜佐美は思いっきりかぶりを振った。
「ありがとう、亜佐美ちゃん」
淑子は亜佐美の顔を、自分の豊満な胸へ押し当てた。
「もし、今こうして、お姉様といっしょにいられるのが夢だったら。私、ずーっと、ずーっと、夢から醒めなければいいなぁ……」
亜佐美は淑子の温もりを肌で感じながら、微睡の中で呟いた。
「どーして？」
「だって…お姉様は、私の憧れの人だったんですもの。その憧れの人と……あ、ああ、あんな事……恥ずかしい」
亜佐美は淑子の胸へ、深く顔を埋めた。
「まだ身体が火照っているようね。かわいいお顔がまっ赤よ」
「そ、そんな……」
「亜佐美……私のかわいい亜佐美……」
「お姉様……」
「亜佐美ちゃん、女の子が女の子を好きになるのって変だと思う？」
亜佐美の髪をいとおしそうに撫でながら、淑子が聴いた。
「いいえ、とても素敵な事だと思います」
「ありがとう、わたしもそう思っているわ。でもね、たまに不安になるのよ。私が好きな人が、私と同じ考えじゃなかったらどうしようって……」
「私、私、お姉様についていきます、ずっと、ずっと……絶対お姉様を不安になんてさせません」
亜佐美は胸から顔を離すと、淑子の顔に向き直って言った。
「夢みたいに思っているのは、私の方。こんなにあっさり亜佐美ちゃんが、私の事を受け入れてくれたんですもの。あんなに激しく」
淑子は必死にすがる亜佐美に、浅い口付をした。
その日、再び太陽が沈み闇がその全てを覆う頃、理事長室で親子の密会が行われていた。
「理事長。第一段階は成功です」
「そうか。で、首尾はどうだ？」
「四週間下さい。そうすれば、完璧なる私の下僕にしてみせます」
淑子の口元が微かに上向きになり、微笑んだ事を見届けると、理事長の豪は椅子を回し、部屋に背を向け、窓の外に見える校舎を眺めた。
夜の校舎。それはまるで不気味にたたずむ墓標のように、月明かりに照らされていた。
「お前が卒業してから、この学園はコントロールしにくくなった、統制が乱れておる。一刻も早く、次の統率者が現れんと、大変な事になる」
「必要なのは学園の統率者だけなのですか？」





豪は首だけを軽く振り向き、月明かりに一瞬微笑みを照らし出した。
「ふっ。それだけでは済まさんがな。我がザヴェール家の為に、充分働いてもらう。とにかく急げ。我々にはあまり時間がない」
「わかっています。あの娘は風紀委員として、既に学園の約半分を味方に付けています。後は、私が少し教育するだけで……」
「学園の全てが、いや、学園の全ての女生徒が再びわしらのものになる。しかし淑子、昨夜もお前が寮に出入りした事を知る者はいないな?この事は絶対に他人に知れぬよう、公の場に出ぬように進めるのだぞ」
「わかってますわ、お父様」
口調を強めて返事をする淑子の口元に、微笑みは消え去っていた。
「我が高貴なるザヴェール家の為に」
「高貴なるザヴェール家の為に……」
その頃、聖エレノア学園の寮では、亜佐美と美代子が寮内の見回りを終え、自室に帰ってきた時だった。
「まったく、今年の一年ときたら」
「まぁまぁ、美代子。いいじゃないの。まだ寮の生活に馴染んでないんだもの。しばらくは修学旅行気分よ、私達もそうだったでしょ」
下級生の浮かれた態度に腹を立てた美代子を亜佐美がなだめた。
「亜佐美、ダメよ、甘やかしちゃ。こういうのは最初が肝心なんだから。ガツンと言ってあげなきゃ」
美代子はタンスの中の鏡に向かい、髪を解かしながら亜佐美に言葉をぶつけた。
「でも……」
「あなたの言う事なら一年生は何でも聞くわよ」
「なんで?」
「知らないの?」
美代子がブラシを置き、振り向いて亜佐美に詰め寄った。
「亜佐美、この学園の中じゃ結構人気有るのよ。この学園の伝統みたいなもんなんだけど。後輩が先輩にラブレター出したりするの。あんた、もらった事あるんじゃないの? 前の生徒会長みたいに」
「なによぉ。まるで私が石嶺沢先輩みたいだって言うの?」
亜佐美がふくれて見せると、手に持ったブラシで亜佐美の髪を解かしながら、美代子は言葉を続けた。
「そーゆーコト。まぁ、元生徒会長で、品行方正で、学力優秀で、そのうえ美人な、石嶺沢先輩はもっともっと、もーーーーっと人気あったけどね。就寝前の見回りなんかしようもんなら、下級生がキャーキャー黄色い声あげてよろこんじゃってさ。全然見回りにならないの」
「知ってるわよ、私も一緒に見回りしてたもん」
美代子からブラシを取り上げると、亜佐美は自分で髪を解かし始めた。
「いいわよねぇ、亜佐美は。去年、石嶺沢先輩に可愛がられてたからねぇ」
「ほんと、今は美代子と二人で見回りだもんねぇ」
「なによ、そのとってもイヤそうな顔は」
「なんでもない」
「なんでもなくない! 待てっ、こら、亜佐美」
ベッドへ逃げる亜佐美を追って、美代子も覆い被さるようにベッドへ倒れた。
「やだぁ、あははは、美代子ったらマジになってるぅ」
「そりゃ……だって……私だって、亜佐美のコト好きなんだもん。好きな人に、どんな風に思われてるか、気になるじゃない……」
亜佐美の両肩に手を置き、押さえつけるように視線を送る美代子の目には、うっすらと涙が浮かんで来た。
「大丈夫よ。私、美代子のこと好きよ。とっても。さぁ、もう寝ましょう」
「お願い、亜佐美。私を、嫌いにならないで」
起き上がろうとする亜佐美を押さえつけると、美代子の瞳から涙がこぼれ落ち、亜佐美の頬を濡

らした。
「美代子……」
「こんな気持ち、初めてよ。女の子を好きになるなんて。でも、どうしようもないの、この気持ち」
「わかる、わかるわ、美代子の気持ち。大丈夫、ちゃんとわかるから」
　亜佐美は美代子の体を払おうとしたが、美代子の頭が胸に押し当てられ、抵抗できなくなっていた。
「お願い、亜佐美、私を受けとめて」
　二人の間に数瞬の沈黙が流れた。
「いいわ、美代子。私が、体で受けとめてあげる」
「ありがとう、亜佐美」
　美代子の腕から力がぬけた時、亜佐美は美代子を組み敷くように、その立場を入れ替わった。
「美代子、キスは初めてじゃないのね。でも、こんなキスは初めてでしょ」
「んっ……んんっ、んーっ、んっ……あぁっ」
　美代子はいきなり挿入された亜佐美の舌に驚いたが、すぐにその快感の虜となってしまった。
「どう？　ディープキスの味は？」
「こ、これが……ディープキス？」
「もう一回してあげる……」
「んっ……………んあぁっ」
　亜佐美は昨夜、淑子に教わったとおり、舌を美代子の口の中で絡ませた。
「とっても素敵。気持ちいいわ」
　美代子が二人の舌が絡んだ証を拭い、瞬きをした瞬間、亜佐美はまだ発育しきっていない胸へ口を移した。
「じゃ、ここへのキスはどう？」
「あん。亜佐美、もっと、もっと吸って」
「美代子の、先っちょのがピンと立ってるわ。気持ちいいのね」
　亜佐美は美代子の乳首をつまみ上げ、その硬さを確認した。
「もっと……ねぇ、亜佐美、もっとぉ」
「美代子ったら、Hなんだぁ。もしかしたら、もう濡れているのかなぁ？」
「あっ……ちょっと……まだ……いやぁん、ダメよぉ」
　美代子の静止の声も届かず、亜佐美の手は淡いピンクのショーツに覆われた処へ伸びた。
「なぁに？　何がダメなの？　こんなに濡れちゃってるくせに、上のお口は嘘つきね」
　亜佐美が悪戯っぽい微笑みを浮かべ、美代子の愛液で濡れた指を舐めた。
　そしてその愛液を口に含んだまま、美代子の口へと移した。
「んんー……んーぁあっ…あぁ、亜佐美……」
「上と下、両方のお口をいっぺんに責められると、たまらなく気持ちいいでしょ」
「亜佐美……もっと……下のお口を責めて……もっと」
　美代子は亜佐美の体に手を回し、強請った。
「美代子ったら、下のお口だって。卑猥なんだぁ。そんな卑猥な人には、もう何もしてあげません」
「あっ、イヤっ……お願い、やめないで……亜佐美、お願い……亜佐美ぃ」
　亜佐美の顔を両手で押さえると、強引に口付をし、さらに求めた。
「美代子、私のこと、好きになってくれる？　今以上、もっと好きになって欲しいの。約束してくれる？」
「する、約束するわ。私、亜佐美が好き、大好きよ」
　美代子は急きながら言葉を返した。
「美代子、これから私がする事、全部に協力してね、お願い」
「何でも言って、私、亜佐美の役に立つなら、何でもするわ」
「ありがとう、美代子、好きよ」
　亜佐美の指が陰唇を割って、さらに奥の蕾をまさぐると、美代子の花びらから止めど無く液があふれてきた。
「あっ、あぁぁっ……うぅん……亜佐美ぃ…」
「もうグッショリ、これだけ濡れてれば、大丈夫ね」
　美代子の濡れ具合を確認した亜佐美は、美代子の口を広げた谷間に人差し指を挿入した。
「うっ……っつ、んっ……あぁぁぁぁぁ……」
「どう？　私の人さし指、気持ちいい？」
「いっ……いのっ……あぁっ、あさ、亜佐美っ……あぁ、ぁぅうん」
「ふふっ、いいのよ美代子、もっと気持ちよくなっていいのよ」
　亜佐美の指は内壁にその存在感を伝え、外では敏感な蕾を刺激し続けた。
「かっ、かきまわして……な、中で……動かして……」
「いいわ、美代子。感じて、私を感じて」
　亜佐美が指を回転させ、その律動を激しくすると、美代子が両の手でシーツを強くつかみ、全身をしならせ、小刻みに痙攣し、亜佐美の指に強い圧迫感を与えて果てた。
「イッちゃったの？　美代子？あらあら、私の指までこんなに濡らしちゃって。いけない娘」
　亜佐美はなおも涙を流し続けるそこに指をあて掬うと、その指を舌で拭った。

VASTNESS

そして美代子を抱きしめながら、深い眠りへと落ちて行った。

　そして、二週間の月日が流れた。

「私の知らない間にそんな事してたのね」

　その週末は、淑子が亜佐美の部屋を訪れていた。二人はいつものようにベッドの上で会話をしていた。

「だって、あれは美代子が……」

「だめよぉ、亜佐美ちゃん。そんなにルームメイトをいじめちゃ」

　淑子は人差し指で亜佐美の鼻をツンとつついた。

「だって、お姉様……私、寂しかったんだもん。お姉様に会えるのも、よくて週に一回。それも美代子が週末の帰宅日に帰る日だけ。先週と先々週なんかお姉様の都合もつかなくて、一回も会えなかったのよ。もっと、お姉様に会いたい。毎日でも」

「寂しがりやさんね、亜佐美ちゃんは。いいわ、今日は朝まで一緒にいてあげる」

「お姉様～ぁ」

　亜佐美が淑子に抱きつき、子供のように甘えた。

「亜佐美ちゃん」

　淑子は亜佐美の身体を受け止めると同時に、ショーツの中に手を滑り込ませた。

「っうっ、あん」

「亜佐美ちゃん、もう準備できてるみたいね。ほら、私の指がこんなにビッショリになってるわよ」

　淑子は亜佐美の愛液で濡れたその指、耳元前に持ってゆき、その濡れ具合を音で確かめた。

「そっ、そんな……」

「なんで、亜佐美ちゃんはこんなにすぐ濡れちゃうのかしらねぇ?」

　淑子はその指を、耳の裏から首筋へと、亜佐美自身の液をなすりつけた。

「だって、お姉様に抱かれているんですもの」

「どんどんHな体になってゆくのね」

「いやだぁ、そんな言い方しないで下さいよ」

「お黙りなさい！」

　淑子の右手が亜佐美の頬目掛けて飛んだ。

「なにをするのお姉様」

　すぐに打たれた頬を押さえ、縋るように淑子を見つめた。

「口答えは許しません！」

　今度は反対側の頬を打った。

「あぁっ、痛い」

「いい事、亜佐美。今日からやり方を変えます。ちょっと痛い思いをするかも知れないけど、それもまた、いいものよ」



「お姉様……」

　亜佐美は両の頬を赤く腫らし、後退りした。

「亜佐美、お前にはユニフォームを作ってきてぁげたわ。もっと綺麗に見えるユニフォームよ。もちろん私とお揃いのよ」

「えっ、ユニフォームって?」

「さぁ、着替えましょうね」

　淑子は、抵抗する亜佐美を一～二度戒めながら、犬のような首輪と、ハイソックスだけの姿にした。

「とってもお似合いよ。亜佐美」

「こっ、こんなのヤです」

　眼を潤ませながら、亜佐美は訴えたが、淑子の答えは左手を振り上げた処で出ていた。

「口答えは許しませんと言ったでしょ」
「すっ、すいません」
　とっさに頭を抱えて、打たれまいと体が反応した。
「いい事？　亜佐美。そのユニフォームは私が外すまでは、自分で取ったりしてはダメよ」
「………」
　淑子は亜佐美の顎を杓って、背けた顔を強制的に自分に向かせた。
「お返事は？」
「わかりました……お姉様」
「よろしい。亜佐美、今日から私の事をお姉様と呼ぶ事は許しません。ご主人様とお呼びなさい。さぁ、お返事は？」
「は、はい。わかりました。ご、ご主人様」
　亜佐美はその場に泣き崩れた。
「それでいいのよ、亜佐美。今からあなたは私の奴隷。私の言う事に逆らったりしたらダメよ。何でも言う事を聞くのよ」
「私、今までだって、お姉様の言うとおりにしてきました」
　亜佐美がしゃくりなが答えると、淑子は足の指で亜佐美の谷間を刺激した。
「あっ、あぁぁっ、くっ、うぅ」
「何度言ったらわかるのかしら？　口答えは許さないと、先ほど言ったはずよ。あまり物覚えが悪い娘にはお仕置きをしますよ。こんな風に」
　淑子は足の親指を立てて、亜佐美に深く突き立てた。
「あぐっ、んぁっ。そ、そんなに、強くしないでください。も、もう口答えはいたしません。ご主人様」
「そう、それでいいの。素直にしていれば気持ちよくなれるわ。ベッドに横になって目をつぶりなさい亜佐美」
「はい」
　亜佐美はまだしゃくり続けているが、淑子は気にも止めない素振りで、真っ黒な目隠しを亜佐美の頭に巻いた。
「いいこと、この目隠しは、あなたを天国へ連れて行ってくれる、大切なお道具なの。これも取ったりしてはダメよ」
「わかりました、ご主人様」
　亜佐美は見えないという恐怖に、全身を震わせながら応えた。
「いいお返事ね。ご褒美をあげるわ。このバイブレーターをね」
　淑子は亜佐美の濡れそぼった谷間の奥に、バイブレーターをいっきに根元まで挿入した。
「うっ、なっ、なに……うっ……つっ、くっ……うぅぅん……すご、いいっ、いいっ！」
　あまりのバイブレーターの太さに、始めは抵抗感しか感じなかったが、見えないと言う状態が、快感を倍増させ、次第にあえぎへと変えていった。
「バイブは初めてね、亜佐美。これは殿方の替わりを務めてくれるの。とても気持ちいいわよ。ほら」
　亜佐美の奥をえぐるようにバイブレーターを操る淑子は、薄笑いを浮かべていた。
「あっ……ぐっ……んはっ、はぁぁん……」
　身体からバイブレーターが引き抜かれる度に、亜佐美の割れ目は愛液を吐き出した。
　そして同時に口からは、喜びに咽ぶ声が洩れた。
「ほーら、もうシーツまでビショビショになっちゃった。とっても感じやすいのね、亜佐美」
「んあっ……はぁっ、あぁん……っく」
　淑子は手の動きを止めたが、亜佐美自身の腰が動き、快感を得続けた。
「お返事もできないくらい感じてるの？　でも、そういう態度は許しませんよ」
　一人でよがっている亜佐美を見て、淑子はバイブレーターを完全に引き抜いた。
「あっ、やめないで……お願い、ご主人様……やめないで下さい」
「亜佐美……もっとして欲しい？」
　さっきまで亜佐美の中で快感を与えていたバイブレーターで、身体中をねぶるように撫で回した。バイブレーターの振動が、亜佐美の胸の敏感な突起に当たると、小さな声で答えた。
「はい、もっと、してください」
　焦らされ、腰を振りながら答える亜佐美に、淑子は容赦無く攻めの言葉を続けた。
「何をして欲しいの？　言いなさい、亜佐美」
「そ、そんな……」
「言えないの？　そぉ、私の言う事が聞けないってことなの？」
　淑子の手に持ったバイブレーターが、亜佐美の頬を軽く打った。
「ち、違います」
　バイブレーターの規則的な回転を頬で感じながら、亜佐美は軽くかぶりを振った。
「じゃ言いなさい。何をして欲しいの？」
「わ、私の……あっ、あっ、あそこ、に……入れて下さい」
「あらぁ、それだけじゃ、何をしていいのか、私わからないわ」
　どうしても亜佐美に言わせようと、淑子は自分の太股を亜佐美の谷間に擦り寄せた。
「私のアソコに、ご主人様の持っているバイブを



入れてください」

目隠しの目尻の辺りに、微かに涙の染みを見せ、亜佐美は腰を突き出した。

「そんな、涙を流す程欲しいの。いいわ亜佐美、入れてあげる」

「んっ、あぁっ、くっ……んはっ、はぁぁん」

淑子にバイブレーターを挿入されると、その機械音がくぐもった。そして再び自ら腰を動かし始めた。

「さっ、お礼を言いなさい。ありがとうございます。って」

「あっ……あり、ありがとう……ぅぅっ……ございます……んっ、あぁぁ…ご主人さまぁ、あぁぁぁぁぁぁ」

亜佐美はよがりながら、必死に言葉をつなげた。

「そう、それでこそ私の亜佐美よ。いいわぁ。とってもかわいいわ」

「んはっ、はぁっ……いいっ、いいん」

「はーい亜佐美ちゃん、そのままこのショーツを履きましょうねぇ」

バイブレーターを押し込まれるように、無理矢理ショーツを穿かされ。亜佐美は足に力を込め、爪先で突き上げた腰をささえながら、シーツを握った。

「はぁっ、つぐ……お、奥まで……入って……あっ、く、くるぅ…あぁぁぁっ、あっ、あっ」

「奥までバイブが入って、とても気持ちいいでしょ。んふふ……じゃ、そのまま立ち上がるのよ。ホラッ、立つのよ」

淑子に強引に手を引かれると、亜佐美の上半身がベッドから起きた。

「うっ……あぁっ、力が……あぁぁぁ、入らな……入らない」

そしてそれは、バイブレーターに自分の全体重をかける格好になった。

「私が手を貸してあげるから、ほら、立ち上がるのよ」

「んっ、ううぅっ……あぁっ……ぐっ、んっ、くっ……あぁぁぁ」

ベッドの端から、床に足を降ろされた亜佐美は、辛うじて淑子により掛かりながら、中腰の格好で立ち上がった。

「ちゃんと立てたわね。はい、じゃそのままお部屋の中をお散歩しましょうね」

「そ、そんな……あぅっ……で、できま……っく、んあっ……せん」

「いいから歩くのよ!」

「あああぁぁぁぁぁぁぁっ!」

右足を前に出すと肉襞がよれて、バイブレーターが奥の敏感な入り口を撫でる。

そして襞の奥に隠された蕾を、擦るように振動が刺激する。

「どう？ 足を動かすと、バイブも一緒に動いて、気持ちいいでしょ。もっとしっかり歩くのよ。1、2、1、2」

「はっ、あっ……はっ、うっ……はぁっ、うっ…ダ、ダメ……んぁっ…中で…よじれちゃう」

淑子の取るテンポに合わせて、亜佐美は左右の足を交互に出す。その度に快感に崩れ落ちそうになるのを必死に堪えた。『も、もうダメ……我慢できない……』

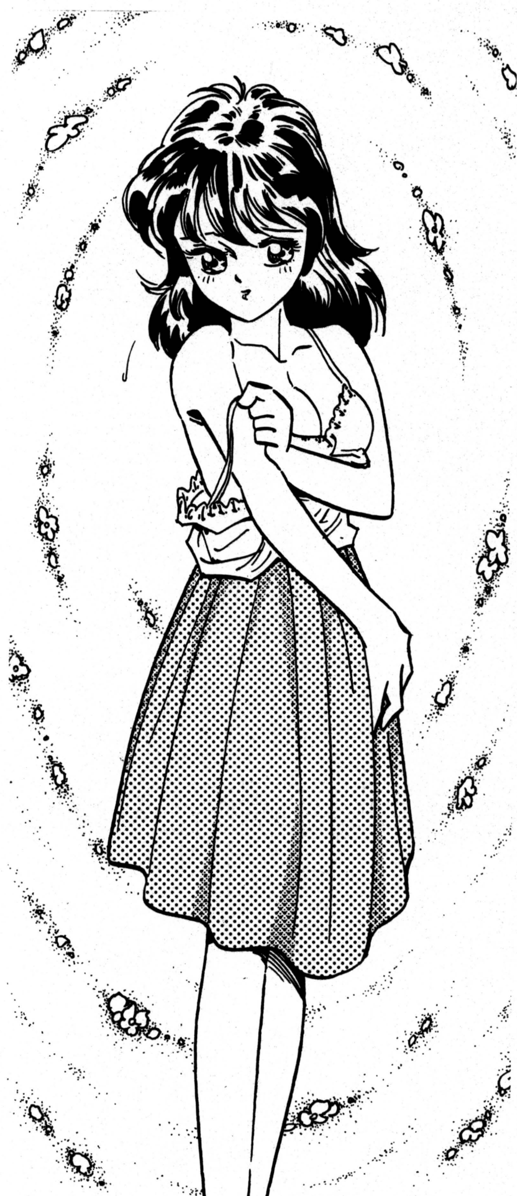
そしてついにその場にしゃがみ込んでしまった。

「あらあら、亜佐美ちゃんは歩く事もできないほ

ど、赤ちゃんなのねぇ」
「んっ、くっ……はぁぁっ……あぁぁん……んうぅん……んあっ、あぁぁん」
しゃがんでもなお身体の中で快感を与え続けているバイブレーターは、絨毯に染みを作るまで、亜佐美に愛液を流させた。
「赤ちゃんのくせに、よがっちゃって、いけない娘だわ」
「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」
亜佐美の中で何かが壊れた。そしてしゃがみ込んだまま、失禁してしまった。
それはさらに大きな染みを絨毯に残し、辺りに異臭を放った。
「おもらしまでしちゃうなんて。ほんと、赤ちゃんなのね。こんなお行儀の悪い娘には、とっておきのお仕置きをしてあげるわ」
「そんなっ……んはっ……んぁあぁん」
失禁してしまう程感じさせてもなお、愛液以外のものでグッショリ濡れながら、バイブレーターは機械として亜佐美の内側でうねり続けた。
「亜佐美ちゃん、まだお尻の方は未経験だったわね。ショーツをこんなに汚しちゃって。赤ちゃんねぇ。でも、これだけ濡れてれば、そんなに痛くはないわよ」
淑子もバイブレーター同様、同情の余地もなく、亜差美に新たな快感を産み付けようとした。
その右手の人差し指を唾液で濡らし、亜佐美の菊門に添えると、一気に押し込んだ。
「いやっ、あっ……やぁっ、んっ……くる、苦しい……いいぃ、痛っ」
「あら、爪があたっちゃったわね。ごめんなさい」
淑子の表情は益々笑みをたたえ、深く差し込んだ指を鍵の字に曲げ、亜佐美の反応を楽しんだ。
「だ…だめっ……お、お腹が……くる…しい……へ、変っ……いやぁっ、っあぁぁっ」
「私の指に、バイブレーターの振動が伝わってくるわ。んっ、私も、変な気持ちになりそうよ。その苦痛に耐える表情、あぁ、綺麗よ亜佐美」
亜佐美のお尻で淫靡な音を立てながら、淑子の指が出入りする。
「ご、ご主人様…お願い…しますっ……指を、ぬ……抜いて……ください……おね、お願いしますぅ……」
淑子の指が差し込まれる度に、亜佐美のお尻は通常無いはずの挿入感にさいなまれ、引き抜かれる度に排泄感を促され、それを堪える。
「ダメよ、亜佐美。イクまで、ダメ」
そして前ではバイブレーターが、内臓越しに振動を淑子の指に伝え、その指が共振して、お尻の内壁でむき出しにされた神経を直撃する。
「そ、そんなっ……んぐっ、うぁぁぁっ……だっ、だぁぁっ……あぁっ、んっ、はぁぁっ」
「ほら、イッてしまいなさい。亜佐美」
亜佐美のお尻を、淑子の二本目の指が深くえぐった瞬間。
「はぁっ、はぁっ、はあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ………………」
亜佐美のお尻とバイブレーターの振動に集中した意識は、肢体を突き抜け、全身の痙攣と共に開放された。
「んふっ、昇り詰めちゃったみたいね……」
淑子は亜佐美を元の寝巻姿に戻すと、調教に使用した器具を片付け、部屋を後にした。そしてその足を理事長室へと向けた。
理事長室では豪が葉巻をくゆらせ、部屋中に紫煙を充満させていた。
「で、首尾は？」
「ほぼ終了しました」
淑子はさも自信あり気に、入って来るなりの質問に答えた。
「後は血の洗礼を与えるだけ……か」
「来週末に、生徒会長就任を祝うという理由で、屋敷に招待する予定です。その時がチャンスかと……」
「うむ、来週末か、待ちきれぬな……」
「お父様……」
淑子は豪の前に、さっきまで亜佐美のお尻で体温を感じていた人差し指を差し出した。
「まだ、味が残っているかと……」
「ふむ、まぁ味見というのもよかろう」
豪は淑子の手を取ると人、その差し指をいとおしそうにねぶって、その表面に残った亜佐美の体液を拭いつつ味わった。
「ふむ、いい味じゃ。益々楽しみだのう」
豪は珍しく歯を見せた。
「お待ちかねの一族の血が手に入りますね」
「そうだ、我が一族の悲願、失われた力を取り戻す時が近づいているのだ」
「お父様……」
「我が種族も六つの家系に別れて、その強大なはずの力も薄れてしまった。我がザヴェール家は、私がこれまで他の五つの家系の血を入れ、本来種族の持っている力をここまで呼び覚ましてきた。が、本当の失われた力、不老不死を取り戻さなければ完全とは言えぬ」
豪は遠い眼をしながら、遠い記憶をたどるように話した。
「まさかあの木原亜佐美が、私達との求めているヴァティュ家の血を受け継いでいるとは、思いも

VASTNESS

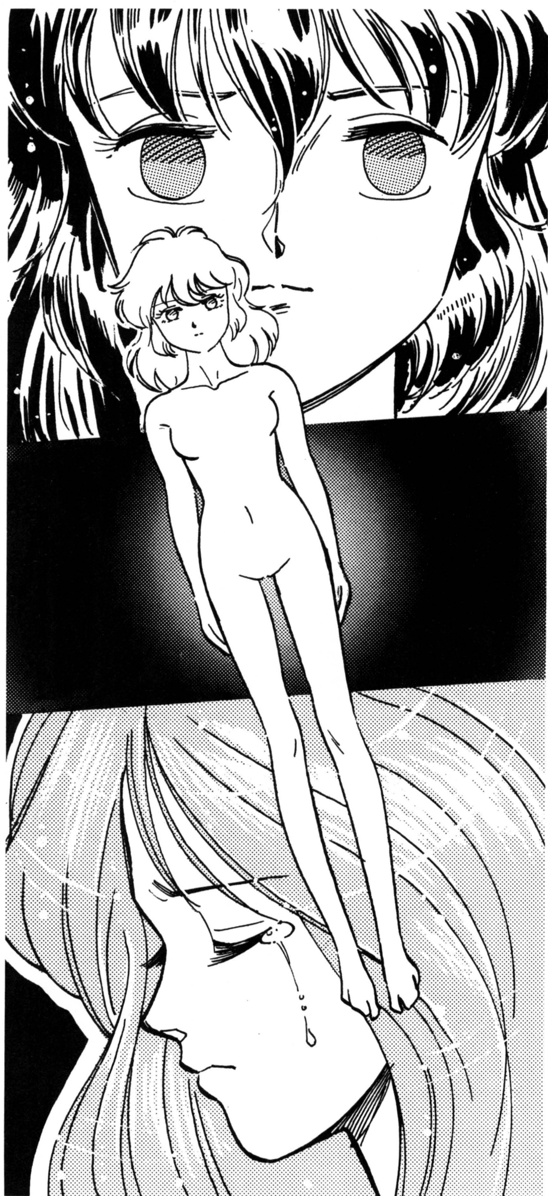
よりませんでしたわ」
「うむ、これで六つに別れた全ての血が揃い、失われた高貴なるザヴェール家本来の力が取り戻せる」
「永遠の美しさが手に入るのですね」
「うむ、お前には色々苦労をかけたな」
「そんな……お父様」
「では、後の段取りはまかせたぞ」
「わかりました。では、週末に……」
その夜二人の姿は、月齢二日の切り裂かれたような月夜の闇に消えた。
そして運命の日は来た。その日は朝から太陽が一度も顔を見せず、空は厚い雲に覆われていた。
生徒会長就任祝いという事で、亜佐美はいつもの学校のブレザーや、寝間着姿から一変し、華麗なドレスに身を包んでいた。
石嶺沢邸の玄関に迎えに出ていたのは、淑子であった。夜の顔とは違い、優しい笑みにあふれた顔で亜佐美を迎えた。
「いらっしゃい、亜佐美ちゃん」
「石嶺沢先輩、今日はお招きいただきありがとうございます」
「亜佐美ちゃんと言ったね。今日は淑子のわがままに付き合ってもらってすまないね」
理事長の豪も後から出迎えた。
「そんな、先輩にお招きいただけるなんて。私、光栄に思ってます」
亜佐美も理事長の手前、静叔な挨拶をした。
「それより亜佐美ちゃん、生徒会長就任おめでとう」
淑子の笑顔には一遍の曇もなく、心からの祝福で満ちていた。
「ありがとうございます、先輩」
「立ち話もなんだ、早く中にお入りなさい。私の部屋に行きましょう」
「はい」



淑子の部屋は、流石と言わんばかりに豪華な作りになっていた。
個室に設けられたバスルーム。毛足が長く、足が埋まりそうな絨毯。壁には有名な絵画。そしてダブルよりも一回り大きなベッド。どれをとっても亜佐美には見慣れぬ物ばかりであった。
「紅茶でよろしいかしら？」
「……は、はい、先輩」
亜佐美は緊張から、身体を強ばらせた。手に取ったティーカップもマイセンの品で、カチャカチャと小刻みに震えていた。
「二人だけの時は先輩って呼ばないで」
「はい……お姉様」
淑子の笑顔に見つめられ、亜佐美は平静を取り戻した。
「でもほんと、あなたの人気には驚いちゃったわ」
「そんな事ないですよ、お姉様のほうが絶対人気ありましたもの」
「んふ、在学していればね」
「ふふふ……」
「さっ、そろそろお祝いを始めましょう。私と二人だけのお祝いを……」
亜佐美は紅茶にちょっと口を付けただけで、ベッドへ上がるよう命ぜられた。
「お姉様……」
「亜佐美……」
始めの口付は、優しさに満ちていた。
「ちゃんとベッドの上では、ご主人様と呼べるようになったわね」
「はい、ご主人様」
「まず自分で裸になりなさい」
「は、はい」
安美は皺を残さぬよう、丁寧にドレスを脱いだ。

「どう？　恥ずかしいかしら？」
「は、恥ずかしいです」
既に亜佐美のショーツは、期待から潤み始めていた。自分でもそれに気付いたのか、それと知られぬようにショーツを下ろした。
「今日は、何をして楽しみましょうか」
「あの……ご主人様。この前のをして欲しいんですけど……ダメでしょうか？」
恥ずかし気にうつむきながら呟いた。
「病みつきになっちゃったようね。いいわ、してあげるわ。お尻の方にね」
亜佐美はベッドの上で、淑子の眼前お尻がくるよう、高々と持ち上げた。
淑子の目の前には、亜佐美の女性として恥ずかしい所全てが広がっていた。それを眺める淑子には、優しさの面影は消えていた。
「いっ、いっ、痛っい」
いきなり親指を挿入された亜佐美は、腰を落とした。が、淑子の手はその動きを追い、菊門から指を抜く事はなかった。
「お尻の方はね、前の方と違って、濡らさないでいきなり入れられると、とても痛いのよ」
「そ、そんな強引なの……やっ、やめっ……」
亜佐美がずりあがりながら、淑子から逃げようとしたが、逆に上半身を押さえられてしまった。
「ダメよぉ逃げちゃ。この前みたいに一人で楽しんじゃう人には、ちょっとお仕置きが必要なの。まだ指1本よ、我慢なさい」
「くっ、んっ、ぐっ、あぁっ……」
亜佐美の額にはうっすらと汗が浮かび上がり、苦痛に表情を歪めていた。
「亜佐美ちゃん。学校の寮では、あなたお姉様なんですって？」
「はっ、そっ、そんなっ……んっ」
亜佐美を攻めながら、淑子は質問を続けた。
「いいのよ、別に怒っている訳じゃないから、正直におっしゃいなさい」
「はっ、んっ……はい……」
「いいわぁ、亜佐美。まるで昔の私のよう」
枕の下に手を入れた淑子は、そこから極太のバイブレーターを取り出した。
「ふっ、あぁぁっ……なっ、なにをっ……」
間髪を入れずに、亜佐美の恥ずかしい穴に挿入すると、スイッチを入れた。
「後ろのバイブはどう？　亜佐美ちゃん。すっごい気持ちになるしょ。前に入れられるのとは全然違う快感があるでしょ？」
「んんっ、あああっ、あぐっ……」
亜佐美は淑子の質問の意味を理解する事ができないほど、菊門の刺激に酔っていた。あまりにも太く、あまりにも激しい攻めは、括約筋を刺激し、さらにその苦痛を強めていた。
「もう一つご褒美をあげましょう。お留守になってる前にも、バイブを入れてあげましょう」
淑子は枕許からもう一本、バイブレーターを取り出すと、熱く湿った割れ目の奥へ挿入した。
「はぐっ……んあぁぁっ、だっ……だめっ」
「亜佐美ちゃんたら、相変わらず凄いわね」
亜佐美の割れ目の奥から溢れ出る愛液で、シルクのシーツは怪しい光沢を放った。
「やっ……んあ……やめっ、てっ」
「大丈夫、今度イク時は一緒だからね」
淑子は亜佐美の身体から生えているバイブレーターの根元に、自分のモノをあてがった。
「バ、バイブの……振動が…私にも…感じる」
「ああっ、ご、ご主人……んあっ……様……」
亜佐美は淑子の指に自分の指を絡め、より淑子を近づけた。
「一緒に、いいっ……いける、んんっ……の」
二人の身体は、一点で接触し、互いの快感を共有しあった。
「おっ、あっ、んっ……んはぁっ、んうぅぅ」
「イク？……亜佐美……イッっちゃう？」
「ご、ご主人様ぁぁぁぁぁ……」
「亜佐美ぃぃぃ……」
淑子の顔が強ばり、苦痛とも快感ともとれる表情を浮かべた瞬間、亜佐美も全身に軽い痙攣を起こした。
亜佐美の身体からバイブレーターを引き抜くと、両の穴は大きくポッカリと口をあけ、愛液と粘液をたれ流し続けた。
「淑子、よくやってくれた。後は、わしが洗礼を行おう」





淑子の部屋の窓は開け放たれ、いつの間に入って来たのか、豪がベッドの横で二人の恍惚とした表情を見下ろしていた。
「はっ、はいっ……はぁっ、おっ、お父様…」
淑子は荒い息を整えながら、亜佐美の身体を起こした。
「えっ、はっ、はっ……おじさま……はっ、はっ……なっ、なにを?」
豪の太い腕に押さえつけられ、後ろから襲われる亜佐美に、抵抗する手段はなかった。
「ふんっ!」
「あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ」
あまりに太く長い豪の物を差し込まれ、亜佐美は熱く裂ける感覚に襲われた。
「んうっ、よいぞ。こ、この締まり、んをっ! まさに、我が一族の者になるのにふさわしい」
豪の腰の動きは、亜佐美の身体ごと突き上げていた。
「やっ、あぁっ……あぁっ、あっ、やぁっ」
淑子はベッドの端に腰を下ろし、傍観していた。
「んふふふ……お父様のモノはそれだけで媚薬、そして催淫剤の効果があるの。普通の女性だったら入れられただけで、すぐイッちゃうのよ」
亜佐美はよだれを流しながらも、奥歯を噛み締め必死で耐えていた。
「んぁっ、あぁぁっ……あぁぁん……」
「ほほぉ、わしの責めにここまで耐えるとは。さすがだ」
「やはりヴァティユ家の血を受け継ぐ者ね」
「よくやった、淑子。これで我が一族、つなぎ止めておけるわ」
「はっ、あぁっ……あっ……くぅっ、ううっ……はぁっ、んっ、んあぁっ……あぁぁっ、イクっ、んっ、んあぁぁぁぁぁぁ………」
亜佐美の痙攣の間隔が短くなり、その高ぶりが絶頂を迎えたまさにその時。
「今よ、お父様!」
「うむ」
亜佐美の首筋に豪の牙が深く突き刺さり、その白い首筋に、二本の赤い血の線を描いた。
「亜佐美、あなたは今から統率者となるのよ。聖エレノア学園は、明日からあなたの物。そしてあなたは、私たちザヴェール家の物」
「新しき統率者の誕生だ。今夜は一族をあげて祝おうぞ。高貴なるヴァンパイアの血を受け継ぐ、石嶺沢一族、いや、ザヴェール家一族の為に」
豪がタキシードに姿を変えると、淑子が亜佐美をベッドから豪の元へとエスコートした。
「起きなさい、新しき血の継承者。木原亜佐美」
「亜佐美。今日からお前はこのザヴェール家の一員だ。お前の持つヴァティユ家の血が、分かれ分かれになったヴァンパイア種族の血が、全て一つになった。ヴァンパイア一族復興のため、多くの新鮮な血を、わしらに提供し続けるのじゃ」
黒いマントを翻し、懐に亜佐美を招き入れると、亜佐美の目は血のように赤く輝いた。
「かしこまりました、マイ・マスター」
「亜佐美、私たち一族はこんな愛し方しかできないの。ゆるしてね。愛しているわ」
淑子の頬を、一筋の流星に似た涙が流れた。
その夜、窓の外では十六夜の月が、この世を儚みながら輝いていた。

END



——その時、私にはリングの上に一条の光が射したように思えた。…そして次の瞬間、〝彼女〟はそこにいたのだ。

元ＩＷＣ世界ヘビー級王者　流藤めぐみ著

「ファイティング・フェアリーズ」より

*

シャー…シャー……

レディ・サンダー
LADY·THUNDER

第一話
「電光」

Author
松井 淳
Jun Matsui

Illustrator
魔夜義寿
Mayagisu



勢いよく水の流れる音が耳に響いてくる。

シャー…シャー……

今日はやけにシャワーの音がうるさい。

シャー…シャー……

コックを捻る。頭頂を打っていた水流の感触が不意に失せる。自分の頭の左右に垂れた髪を伝わって落ちる流れの感触も、すぐに断続する滴の集積になり、その間隔は次第に開き…、やがて途絶える。

シャー…シャー……

音は止まらない。自身の裸の体を今しがたまで包み込んでいた水流は確かに止んでいる。見上げる。頭上のシャワーロからの湯の流れは確かに途絶えている。

シャー…シャー……

やはり、音は止まらない。…しばしの後、その音が耳鳴りであると合点がいく。

そう…、あの大歓声だ…。さっきのリングを押し包んだ歓声の嵐が、耳の底から未だ離れていかないのだ。

流藤めぐみは頭を一振りすると、その長い黒髪にまとわった水滴を払い落とした。今、自分の立っている控え室付きの狭いシャワー室を一渡り見渡すように視線を巡らせ、次いで目の前の姿見に視線を落ち着かせる。鏡の奥から見返してくるのは濡れそぼった一糸まとわぬ裸身の自分…。よく知っている自分の裸の姿のはずだった。日本人にしては白い肌。細目の首から流れる肩の線。少し小振りでツンと上向きに張った乳房。ひとかけらの贅肉もなく引き締まった腹。バランスよくまとまり両の腿へと豊かなシルエットを形づくる尻。そして…、両腿の間の、淡く、黒い繁り…。女子プロレスラーというには少々華奢な、今にもはじけんばかり熟しかけた中に未だ少女の香りを残した女の裸身…。そう、それは紛れもなく自分だった。自分のはずだった。

では、なぜか…？　めぐみは鏡の奥の自分を見つめたまま、ちょっと首を傾げた。鏡の奥でも、



そこに映った自分が首を傾げる。なぜ、これが自分に見えないのか…。そう、鏡の中のその女はよく知った自分の姿を確かにしている。しかしめぐみは、その女にまるで今日初めて会ったような気がしていたのだった。よく見て、また合点がいく。表情だ。その鏡の奥の自分の顔が、生まれてから20年、今まで見たこともないような表情をしているのだ。

今度はすぐに得心がいく。今、自分は興奮しているのだということに…。それも、かつてないほどに、だ…。

思い出してみる。ついさっきの体験だ。今でもまるで夢のように思える。しかし、それは紛れもなく現実のはずだ。〝彼女〟を見たのは自分だけではない。今夜このニュー後楽園ホールに来た観客全ても見たはずなのだから…。

未だ消えぬこの耳鳴りが、その証拠だ…。

＊

流藤めぐみは、女子プロレスラーとしての自分に自信と誇りを持っていた。見い出され、あまり大きいとはいえぬ興業団体、東洋女子プロレスから18歳でデビューした時から、その信念を持ち続けてきた。無論、闘った試合全てが勝ち試合ばかりではない。しかしその自信こそが己を支えると信じ、めぐみは闘い続けた。そして事実、その闘いぶりは彼女に曲がりなりにもタイトルと呼べるものを取らせるまで1年しかかけさせなかった。

そんなめぐみだからこそ…、IWCの存在は、彼女にとって許し難かったのである。

＊

IWC。インターナショナル・レスリング・チャンピオンシップ。元々はタイトル名だったものが、いつしか興業団体名になった。数十年の伝統を持つ現在世界最大の、また現在最も権威あるプロレス興業団体である。だが、オーナーが今の、自身が女子プロレスラーであり世界ヘビー級のタイトル保持者でもあるジュリア・アークフィーンドに代わってから数年、その興業体制はひどく〝過激〟なものになったと言われている。

めぐみが現実にIWCと関わったのは、くだんの初めてのタイトル――IWC認定東洋ジュニアヘビー級王座についた時であろうか。お決まりの、ファイトマネーからのリベート要求。そして、マッチメイクから試合結果までの〝強要〟…。最初にめぐみの前に現れたIWCのエージェントは、めぐみがそれまでに出会ったどの人物よりも居丈高だった。

無論、めぐみは断わった。

その後1年、めぐみがジュニアヘビーからヘビーに転向してからも幾度となくIWCからの〝要求〟は続いたが、めぐみは今日まで全て断わり続けてきた。

当然、IWCの〝実態〟については、めぐみは何も知らなかった。

＊

『全国女子プロレスファンの皆さん、こんばんわ。今夜はここ、ニュー後楽園ホールから、闘う妖精たちの熱いファイトをお届けしたいと思います。実況はTVAの服部、解説は元IWC世界ランカー、ビューティー由紀子さんでお送りします。由紀子さん、よろしくお願いします。』

『よろしくお願いします。』

『さて、ただいまリング上では東洋女子の流藤め



ぐみ、そしてＩＷＣのステラ・ノートンの60分一本勝負が行われておりますが、由紀子さん、今日の流藤はどうですか？』
『そうですね…、調子は悪くなさそうですが、例によって苦戦しているようですね。流藤はご存じの通り、去年ジュニアヘビーからヘビー級に転向したんですが、それ以降今ひとつ伸び悩んでいる最大の原因は、ヘビー選手としては流藤のウェイトが絶望的に足りないことなんです。ですから、技術的には申し分ないものを持ってはいるんですが、他のヘビー選手に対して流藤の攻撃は軽すぎて、なかなか大きなダメージを与えられない。…今夜の苦戦の原因もそれに尽きます。』
『ははぁ、なるほど…。』
『それにしても、今回のマッチメイクは少々不自然ですね…。ノートンといえばＩＷＣ世界ヘビー級6位の強豪です。現実には日本の中堅レスラーでしかない流藤とシングルで闘うレスラーでは本来ないはずなんですが…。ひょっとしたら、ＩＷＣと流藤の間に何か…、』
『おーっと、再び流藤の攻撃…！』
またか…！　何度目かの相手の攻撃をかわしつつその背後に回りながら、めぐみは絶望的に思った。スピードは明らかにこっちが勝っている。しかし…、しかし……。がら空きの後頭部にチョップを叩き込む。相手は少し小揺るぎしただけ…。またか…。また今日の相手にも、あたしの小技は通用しない…。
　相手はすぐに振り返り掴みかかってくる。後ろに飛びすさって避けるめぐみ。それを追って突進してくる相手の喉元を狙って、めぐみの近距離からのドロップキックが叩き込まれる。めぐみの全体重をかけた、しかもカウンターの飛び蹴りだ。今度はさしもの相手ももんどりうつ。が、しかし、ダメージをほとんど受けていないことは一目瞭然だ…。
　相手はゆっくり、しかし悠々と立ち上がる。やはり大技で仕掛けて一気に勝機を掴むしかないのか…！　めぐみは唇を噛んだ。無論リスクは大きい。しかし実際、めぐみの試合は毎回この賭けの吉凶で決まっているといってもいいほどなのだ。決まれば勝てる。しかし、もし決まらなければ…。
　次の相手の突進をめぐみは紙一重でかわした。そのまま脇に入り込み、腕をとってその突進力をロープへ向けて流してやる。相手がロープに突進させられていくと同時に、自分も反対側のロープへ。充分な反動をロープから受け、これも反動で跳ね返ってくる相手に向かって突進する。今だ！
ダン…!!　めぐみのマットを蹴る音が鋭く響く。
『でたぁ～！　かつてジュニアヘビーの世界を征した流藤の必殺技、ダブル・ニール・キィ～ック!!』
　宙に舞い上がっためぐみの体が横に回転、まるで鞭のようにしなる。揃えられた両足が大きく弧を描くや、カウンターで相手の胸板にさく裂する。反動を食って吹き飛ぶ相手。
『完全に入ったぁ～！　流藤、逆転か!?』
『…いえ、確かにさすが威力はありますけど、ヘビー選手には必殺とまではいかないところが流藤のつらいところです。…ほら…！』
『おーっと、ノートン再び立ち上がったぁ！』
大きく回した片足全体をカウンターで相手に絡

レディ・サンダー



めるように蹴り込むフライング・ニール・キック――それを両足で叩き込む、めぐみの最強の技だ。確かにヘビー級相手では必殺とまではいかない。が、しかし、かなりの威力は期待できるはず。しかも今のは最高のタイミングだったはずなのに……。間髪入れず身を起こした相手を見て、めぐみは再び唇を噛みしめた。あいつは…今日のあの相手はタフだ、恐ろしく……。

相手がニヤリと笑う。反射的にめぐみは間合いを取った。

どうする…？　間合いを保ってインターバルを取りつつ、めぐみは頭を巡らせる。打撃技ではもはやリスクが大き過ぎる。と、なれば、スピードで翻弄して何とかフォールにもっていくしかないか…。

相手が再び突進してくる。引き入れるように退くめぐみ。そのままロープ際まで下がるや、反動をつけて相手に踊りかかる。あわや激突と思われた刹那、めぐみの体が再び宙を舞った。そのまま相手の頭上を飛翔、飛び越す。その耳元でヒュッと風がまく。

『お～っと、流藤、ローリング・クラッチ・ホールドかぁ⁉』

飛び越した相手の背後に頭から落下する一瞬、宙に浮いたままのめぐみの両腕が相手の体を捕らえる。

『いけない!!　強引すぎます！』

そのまま体を返してフォールへ……！

「……⁉」

一瞬…、ほんの一瞬の静止。相手の体勢が充分だったための、ほんの一瞬のウェイト負け……。

次の瞬間めぐみのローリング・クラッチ・ホールドは完全に殺され、二人は折り重なってリングに倒れ込んだ。めぐみはまともに相手の体の下敷になる。

「きゃあっ!!」

思わずの悲鳴。そして絶望感がじわり、と、めぐみの胸の底から湧き起こる。あ～ぁ…、これで今日の試合は負けかぁ…。ちょっと強引にいき過ぎたよなぁ。どうしてあたしって、こう詰めが甘いんだろ…。

めぐみの動きがしばし完全に止まる。相手はボディスラムにいこうとしているらしい。めぐみの肩と股間を相手の手がぎゅっと掴む感触。ああ…、こうなったらもう早く終わってくれないかなぁ…。めぐみは半ば捨て鉢に思う。まともに組み合っちゃったら、どうせあたしに勝ち目はないんだから…。

……え…？　その瞬間、めぐみの体に走った感覚…。股間から始まって、背筋を脳まで駆け上がり、下半身を爪先まで痺れさせるような電流にも似たそれは…。

「な…⁉」

こんなところでは絶対感じるはずのない感覚…。信じ難いことだったが紛れもない、その感覚はめぐみの股間――そこに添えられた相手の手から与えられていたのだ。

リングコスチュームとはいえ実際には水着のようなもの、現実にはレスラーはほとんど裸で闘っているのも同じなのだ。〝刺激〟を受ければてきめんだろう。しかし、なぜ⁉　巧みにレフェリーや他の者には見えないようにやっているらしいが、こんな場所で、正気の沙汰ではない…！

混乱したまま、めぐみはマットに叩きつけられた。受身を取り損なう。が、痛みの代わりにめぐみを支配していたのはさっきからのあの感覚だった。思わず両腿を擦り合わせてしまう。そのつけ根の間にぬるりとした感触を感じ、頬が火照るのがわかる。

『おっと、これはどうしたことだ？　流藤の様子がおかしいぞ⁉』

『動きも全く止まりましたね。今のダメージがかなり堪えたんでしょうか？』

立とうとする。立てない。下半身に思うように力が入らない。

相手がめぐみを引きずり起こす。そのまま抱え上げてベア・ハッグ――さばおりへ。

「あっ…、あああっ…!!」

めぐみの悲鳴があがる。

と、その時、めぐみの耳にささやき声が届いた。対戦相手のステラ・ノートンだった。ねめつけるようにめぐみを見上げ、めぐみにしか聞こえないような声でささやきかけてくる。

「どうだ、体の自由がきくまい…。」

ベア・ハッグの腕にさらに力が加わる。めぐみの背骨がミシッときしんだ。

「あぅ…！　…ど…どうして…⁉」

「従わぬものの存在は許されぬ…。〝上〟からの御達しさ…。」

「…⁉」

「あんたはさぁ、嬢ちゃん、突っ張り過ぎたんだよ…。」

「あ……。」

「さあ！　…どうしてほしい？　このまま締め落とそうか？　それとも別の〝生き恥〟をかかせてやろうか…？」

「い…いやぁ…！」

めぐみの意識がもうろうとしてくる。ああ…こんなバカな…！　こんなのって…こんなのって、



ない…。あたしは…、あたしは、こんなとこで終わっちゃうの…!? …いや…いやよぉ…。そんなの絶対いやぁ…!!

必死にもがきベア・ハッグから抜けようとする。しかし、やはり力は入らない。

ノートンの嘲笑がめぐみの耳を打つ。

「無駄だよ、嬢ちゃん。さっきの〝一手〟は女の一番大事なツボを突いてるんだ。当分体は自由にならない…。…ククク…、あたしらIWC上位ランカーにとって、この程度の〝芸当〟は…そう、日本語で言やぁ〝朝飯前〟ってやつさ…。」

「あ…あ……。」

ダメ…、ダメだ…。助けて…誰か、助けてぇ…!

『流藤、ノートンのベア・ハッグから抜け出せない。これは決まったか!?』

ノートンの締める両腕にひときわ力が込められる。がくん、と、めぐみの頭が後ろにのけぞった。その目は虚空を見据え、口はまるで瀕死の魚のようにパクパクと開閉しながら泡を吹き出す…。

と…その時……、そう、その時、だった。

めぐみの体を締めつけ今しもへし折ろうとしていたはずの力が、全く突然に失せた。

めぐみはそのままマットに放り出された。しばしの間…。しかし、それきりめぐみの上には何も起こらない。

「……?」

のろのろと顔を上げ、あたりを見回す。リング上を、いや、この場内全てを包み込む雰囲気が異様に変化していることが、めぐみにも段々と知覚されてくる。

え…、何…? 何なの…? まだうすぼやけている意識を、めぐみは懸命に振り絞った。

ノートンが、めぐみから少し離れたところで頭

をおさえてうずくまっている。…そして…、めぐみとノートンとの間に誰かが立っていた…。
『おお〜っとぉぉ〜！ いきなり、いきなりの乱入だぁぁ〜っ!! 一体何者なのかぁ〜!?』
めぐみの目の焦点がようやく合ってくる…。
その時、めぐみにはリングの上に一条の光が射したように思えた。…そして次の瞬間、〝彼女〟はそこにいたのだった…。
めぐみが見上げる格好になっているせいだろう、とても背が高く見える。が、よく見れば、めぐみと体格はあまり変わらないようだ。今はこちらに背を向けているが、その上半身を覆いつくすように流れる長く豊かな髪は艶やかな黒。肌の色とあわせて、〝彼女〟が東洋人であることは間違いない。引き締まり均整のとれたその体を覆うコスチュームは空のように鮮やかで深い蒼（あお）…。そこに入った金色のストライプは鋭角的な折れ線を描き、〝稲妻〟をかたどっているようだ。
さら…と、まるで草なぎのような音がめぐみの耳に届く。〝彼女〟の長い黒髪がふうわりとふくらむようにそよいでみえる。〝彼女〟が振り返ったのだ。思わず飛び起きるように身を起こすめぐみ。
一瞬、ぎくりとする。振り返った〝彼女〟の顔は、その上半分がマスクに覆われていたのだ。そのマスクも蒼と金。マスクの額の部分にまるで第三の目のようについたワンポイントと、マスクに包まれていない〝彼女〟の顔の下半分——その唇を彩るルージュのバーミリオン・レッドが鮮烈にめぐみの目を射る。
『おーっと、今までに見たことのない覆面のレスラーだぁ！ そのマスクマンがノートンのベア・ハッグから流藤を救い出したぁ〜!!』
ふ…と、ほんの一瞬、ほんの僅か、その唇が微笑んだように思えた。その瞬間、めぐみの周りから全てのものが消えた。まるで夢のように、今のめぐみには〝彼女〟しか見えず〝彼女〟から目をそらすこともできなかった。
ああ…、あたし、どうしちゃったんだろう…？ ぼんやりとめぐみは思う。なぜ…？ なぜ、あの人から目をそらせられないんだろう…？ …ん…、まだ頭がぼっとしてる…。…でも…、なんて綺麗な人なんだろう…。覆面してるのに…、同じ女なのに…、とっても綺麗…。ああ…あたし、何か、変…。
めぐみが〝彼女〟に魅せられていたのがどれほ



レディ・サンダー

どの時間、いかほどの瞬間だったのか…。
　ダウンしていたノートンが、のそっ、と立ち上がった。しきりに頭を振り、今しがたのダメージを振り払っている。〝彼女〟の視線がゆっくりと、その目の前の敵へと戻される。
『由紀子さん、突然乱入して流藤を救ったあのマスクマン、一体何者なのでしょうか!?』
『わかりません。私も見たことがないレスラーです。し…しかし、すごい…！　あの重量級のノートンを一撃でマットに這わせるとは…！』
『おっとぉ、再び立ち上がったノートン、その謎のマスクマンにターゲットを定めたようだ…！』
　ノートンの視線が〝彼女〟に据えられる。一瞬、驚きと戸惑いの表情。そしてそれは即座に、凄まじい憎悪の表情へと変わってゆく。
「…〝魔王〟の飼犬が……。」
　え…？　ギョッとし、同時に我に返るめぐみ。途端に周囲への知覚が戻ってくる。
　めぐみは改めて目の前の正体不明の覆面レスラーを見上げた。今の声…。自分だけ、もしくはせいぜいノートンあたりにだけ聞こえたであろう、微かな、ささやくようなうめくようなその声…。
　それが〝彼女〟から発せられたものであることを反射的に理解したと同時に、めぐみの背にぞっとするような悪寒が走った。今の声…。めぐみには信じられない。この世にあんなものが存在するとは…。…それはめぐみが未だかつて出会ったこともない、凄まじくも激しい憎悪…。向かい合ったノートンの表情から感じられるものなど比べ物にもならぬ、一体どうしたら、何を見たらこれほどまでに人を憎むことができるのかというほどの、狂おしいまでの憎悪だ…。
　めぐみのその惑いにも似た思いもまた、しかし一瞬の出来事だった。
　雄叫びをあげ、ノートンが〝彼女〟に襲いかかる。対する〝彼女〟は相手を見据えたまま動かない。その覆面に覆われておらぬ口もとは全くの無表情。
　ノートンの腕が完全に〝彼女〟を捉えた、と、思われた刹那…、
「…!?」
　めぐみは〝彼女〟を見失っていた。ノートンも、いや、このリングを見ていた誰もが、その視界の中から〝彼女〟を消失させていた。
『きっ、消えたぁ!?』
　めぐみの視線は上へ。
『いいえ…！』
　それは…、人間とは思えぬ驚くべき跳躍力だった。〝彼女〟の体は、獲物を捕らえそこねた自分の両腕を唖然と見つめるノートンの遙か頭上に舞っていたのだ。
　次の瞬間、ノートンの上に舞い下った〝彼女〟の両足がその首を挟み込むように捉えた。そのまま前へと落下する〝彼女〟の体に引き倒されるようにノートンも前にのめる。と、一瞬宙に浮いた〝彼女〟とノートンの上下が転回、入れ替わる。ノートンの巨体は〝彼女〟の下敷になる格好で、轟音とともにマットに叩きつけられる。
『おっと決まった、フランケンシュタイナーの大技〜！』
『す、すごい…！　何て動き…！』
　またもすぐに立ち上がるノートン。だが今度は頭を強打したか、動きがひどく鈍い。〝彼女〟はその機を逃さない。ロープの反動をつけて突進、一転、蒼い影が宙を舞う。大きく振り上げられた片足が、ハンマーのようにノートンの胸板に打ち込まれた。鋭く張った打撃音が大気をつんざく。
『こ、今度はフライング・ニール・キック！　謎のマスクマン、目にも止まらない連続攻撃だぁ〜!!』
　なおも立つノートン。しかし、すでにそれは立っているだけだった。〝彼女〟の2連続の大技は、相手の戦闘能力を完璧に奪い取っていた。
　すっ…と、〝彼女〟がノートンの後ろに回る。その両腕がノートンの胴に廻され、捉える。
「!!」
『でっ、出たぁ〜!!』
　〝彼女〟は軽々とノートンを抱え上げ、そのまま後ろへと倒れ込んでいく。〝彼女〟の肩越しから逆落としでマットへ落ちてゆくノートン。華麗なブリッジを描く〝彼女〟の体が、鮮やかにそれを支えていた。
『とどめ！　ジャーマン・スープレックス・ホールドの超大技だぁ〜!!　鮮やかに決まったぁ〜!!』
『見事…！　正に見事です!!』
『ノートン、今度こそ立てない！　ピクリとも動きません！　完全にノックアウトだぁ〜!!』
　マットに沈んだノートンの陰から〝彼女〟がゆっくりと立ち上がる。めぐみには、まるで夢そのものが立ち上がったように見えた。
　一転、場内は大歓声に包まれる。
『強い！　全く強い、謎のマスクマン！　ＩＷＣ世界ヘビー級第6位の強豪ステラ・ノートンを、あっという間にマットに沈めましたぁ〜!!』
　大歓声はさらに高まり、収まる気配も見せぬ。
　〝彼女〟が、ゆっくりと振り返った。さら…と、草なぎのような音とともに、その長い黒髪がライトの反射を光の粒のように撒きながらついてくる。マスクに隠され見えなかったが、その目は間違いなくめぐみを見つめていた。

ようやく自由の戻ってきた下半身に力を込めて、めぐみはよろよろと立ち上がった。股の間が気味悪く濡れていたが、今は気にならなかった。そのまま〝彼女〟を見つめ返す。我知らず、頬が火照ってくる。〝彼女〟の方は無表情…。

だしぬけに〝彼女〟の姿がめぐみの前から消失する。一瞬虚を突かれはっとしたが、めぐみも今度はその動きが見えた。目で追う。ロープを一飛びで飛び越し、西側の花道をさながら風のように走り去ってゆく〝彼女〟の後ろ姿が見える。

見送るめぐみの胸に、新たな感覚が湧き上がってくる。なんて綺麗…。そして、なんて強いの、あの人…。そして、そして…、なんてすごい〝レスラー〟なの…！ 言い知れぬ興奮が湧き起こり、めぐみの体を痺れさせてゆく。

『お聞き下さい、この大歓声！ まさに電光の如し、突如現れ、そして今また風の如く去っていった謎のマスクマンが見せた素晴らしいプロレスに、場内は興奮の坩堝と化しております！ 一体何者なのか⁉ その正体は⁉ 由紀子さん、どうなんでしょうね⁉』

『わかりません。全く謎としか言い様がありません。ただ…ひとつだけ私にもわかったことは…、〝彼女〟がとてつもない実力者だということです。その力はひょっとすると…、…。』

歓声はなおも高まり、リングを押し包む。この時めぐみは、〝彼女〟のあの呟き――凍りつくような憎悪に満ちたあの声のことは忘れきっていた。

『これから果していかなる波乱がまきおこるのか、数々の謎を残し、新たな風雲急を告げて、開始より14分46秒、流藤めぐみ対ステラ・ノートン60分一本勝負は、謎のマスクマンによるノートンKOという全く意外な結末で幕を閉じたわけであります。…さて、この後は、お知らせを挟んで、ブルー東中野・北斗晶子組対キューティー美鈴・尾崎魔百合組タッグマッチ、60分三本勝負の模様をお送りいたします…！』

＊

そうだ…、〝彼女〟は強かった。…そして、美しかった…。

果てもない追想を断ち切るように、めぐみは頭をもう一度振った。彼女の長い黒髪にまとわり残っていた水滴が、ぱらり…と、また散った。姿見に映った自分の顔にまた視線を戻す。

まるで酔っ払ってるみたい…。めぐみは苦笑した。鏡の自分もまた苦笑する。無論、鏡を見ながら酒を飲んだことなどはない。しかし、試合や今しがた浴びた熱いシャワーのせいばかりが原因ではなさそうな紅潮した顔と、今だ興奮気味に輝きを放つ目元、そして我知らず不思議な笑みを浮かべている口元を見ていると、いささか根拠には欠けるが、酔った自分はこんな顔をするんじゃないか、と思ってしまう。

ふと、視線を落とす。鏡の中の自分の股間――少し淡めの黒い繁りが目に入る。ついさっき対戦相手から受けた異常な仕打ちを思い出してしまう。あれは…異様な感触だった。めぐみとてセックスの経験がないわけではない。だがあれほどの――腰が抜けてしまうほどの感覚など味わったことはなかった。もちろん、楽しかったわけはない。しかし我知らず胸の動悸が高まっていってしまうのを、めぐみは抑えることができなかった。息が静かにつけなくなってゆく。

後ろに寄り掛かり、足を少し開く。…なぜこんな気分になるんだろう、と、ぼんやりと考える。自分の右手が見下ろした黒い繁りにゆっくりと下っていくのと同時に、理性が遊離してゆく。その遊離した理性でめぐみは思う。なんか、変…。今のあたし、なんかいやらしくなってる…。何でだろ…？ やっぱり、あそこをいじられたせい、かなぁ…？

指先がめぐみの敏感な突起を探し当てる。少し、触れる。ツン、と駆け上がってきたその感触に、めぐみは少し背を反らせる。指先はそこを越えて股間へ…。花びらのあわせ目に触れる。ぬるりとして、また、むらりと熱い。湧いたばかりの新しい泉だ…。

指先を突起に戻す。遊離したままの理性で、めぐみはまたぼんやりと考えを巡らせた。そう言えば、ノートンが変なこと言ってたな…。この程度の芸当は〝あたしらＩＷＣ上位ランカー〟には朝飯前だ…って…。指を動かす。今度は断続的に快感が背を上がってくる。腰を引くような格好でめぐみは背を反らす。〝あたしらＩＷＣ上位ランカー〟には…。ＩＷＣ上位ランカー…。…あんなことを誰でもできるっていうのかしら…？ 指の動きを速める。快感がゆっくり、そして段々に加速度をつけて高まってゆく。と、すれば…、ＩＷＣって何なんだろう？ あたし、滅多にオナニーなんかしないのに…。あたしをここまでいやらしくさせるようなことができるなんて…。

「あ…っふ……。」

声が漏れ出る。腰から下が痺れたように、通常の感覚が失せてゆく。

そうではない、と、どこかで何かが告げる。めぐみの意識も感覚もそのことには気づかない。しかしめぐみの中のそれは、きっぱりと告げていた。今、自分がこれほど…かつてないほど淫らになっている原因は、ノートンなどではない、と。

レディ・サンダー



「う…あ…あ……あああっっ……!!」

閉じた瞼の裏が蒼く染まったように思えたとき、めぐみは絶頂を迎えた。

立っていられなくなる。シャワー室のタイルの上に座り込む。荒く息をつく。快感が余韻を引き、消えてゆく。同時に体内の淫らな火照りも失せてゆく。

また、会えるかな…。遊離していた理性がめぐみの中に戻ってくる直前、最後に浮かんだ思いだった。

あの耳鳴りも、もうすでに聞こえない。

＊

明けて、翌日。

めぐみが東洋女子プロレスの本部ジムに出てきたとき、時刻はすでに昼に近かった。

最寄り駅からおよそ5分。本部のある雑居ビルの玄関前に立って、めぐみはふと上を見上げた。5階建てのあまり新しいとはいえないこのビルの1フロアが、めぐみの所属する興業団体、東洋女子プロレスの本部――オフィス及びトレーニングジムになっている。めぐみは、ビルのさらにその向こう――よく晴れ渡った空を見上げた。今日は雲ひとつない快晴。東京では珍しい、目に染みるような空の蒼だ。

思い出して、めぐみは頭を振る。またも我知らず頬が熱くなる。昨夜(ゆうべ)って一体何だったんだろう…。何度思い返しても現実味がついてこない。しかし、夢ではあり得ないのだ。何よりも一体何がこれほど自分の心を騒がせているのか、めぐみにはわからなかった。そして、思いが至るのは深い蒼…。はっとして、めぐみはもう1度、さっきよりも激しく頭を振った。

強引に思いを変える。めぐみは再び東洋女子本

部のあるビルを見上げた。あまり綺麗とは言えないよなぁ…。思わず苦笑する。小さなビル、小さなオフィス、そして小さなジム…。所属選手だって、自分を入れて10人足らず…。めぐみは物思う目になる。はっきり言って弱小団体だよなぁ、うちって…。でも、社長も、それにみんなもよくやってる。あたしだって、曲がりなりにもここの看板レスラーなんだ。そうだ、いつまでもぼっとはしてられないぞ…！

「めっ・ぐっ・みっっ!!」

いきなり背中を思いきりどやしつけられ、めぐみは前につんのめった。慌てて振り返る。

「ゆき江〜!! もう、痛いじゃないのよ！」

「ごめんごめん。なんか、上見てぼ〜っとしてたからさ。」

立っていたのはめぐみの同門、同じ東洋女子プロレス所属のレスラー、真鍋ゆき江だった。デビューはめぐみより少し遅かったが、めぐみのヘビー級転向後、東洋女子のジュニアヘビーの看板を支えている実力派である。めぐみとは歳も近く、よきレスラー仲間であり、友人であり、また、ライバルでもあった。

「今日はどしたのさ？ めぐみにしちゃあジムに出てくんの、遅いじゃんか？」

めぐみと肩を並べビルの玄関へと目で促しながら、ゆき江は屈託なく笑う。めぐみも笑顔を返した。

「ん…、ちょっと、ね…。昨夜の試合、疲れちゃってさ…。」

「そういえば昨夜の試合、見てたけどさ、どうしたん？」

「何が…？」

「何か変だったよ、めぐみ…。途中から動きがすごく鈍くなったじゃない。あんたってさ、スピードだけが取柄だってのに。」

「何ですってぇ〜!?」

食ってかかるめぐみ。ゆき江の方はニヤニヤ笑いを浮かべる。

「〝だけ〟たぁ何よ、〝だけ〟たぁ！ 顔、スタイル、性格、取柄だらけじゃないの！」

「それって、あんまりプロレスと関係ないよ…。でも、冗談抜きでどうしたん？ 昨夜はほんと、動きがおかしかったよ。」

ゆき江の顔が本当の心配顔になる。めぐみは詰



レディ・サンダー

まった。
「う…あ…あの、だからさ、そう、疲れが出たみたいで…。」
まさか、あそこを触られて腰を抜かした、などとは言えない。
「ふ…ん、まあ、今日は顔色も悪くないみたいだし、いいけど…。」
ゆき江はなおも心配気にめぐみの顔をのぞきこんだが、やがて再び笑顔を浮かべた。
並んでビル玄関の自動ドアをくぐり、玄関ホールに入る。ホールそのものはあまり広くない。奥右手にエレベーターがある。
「そういえばさぁ、めぐみ、聞いた?」
ホールを抜けエレベーターに向かいながら、ゆき江が再び口を開いた。
「…? 何…?」
「新女がさ、IWCと〝契約〟したらしいよ。」
「何ですって⁉ 新日本女子が⁉」
めぐみは仰天した。新日本女子プロレスといえば、老舗の全日本女子と並ぶ、日本では最大手の興業団体である。それがIWCと〝契約〟、すなわちその傘下に入ったというのだ。
「いつ⁉」
「今朝のニュースで言ってた。何かさ、IWCに〝逆らってる〟のって、もう東洋女子(うち)だけみたいな雰囲気になってきたよね…。」
めぐみは押し黙る。
もちろん、その全てが見えたわけではない。しかしめぐみは昨夜、IWCという組織の実態をかい間見せられたのだ。そしてそれが決して屈してはならない相手であることを、強引に確信させられてしまったのである。
エレベーターに向かうめぐみの歩調がいきなり速くなる。ゆき江がびっくりしてついてくる。
「ちょっと、どうしたのよ、めぐみ⁉」
「社長に言っとかなきゃ。うちは絶対IWCと〝契約〟しちゃいけないんだって…。」
「めぐみぃ!」
構わず、めぐみは開いたエレベーターのドアをくぐろうとする。
その時、だった。
「あら、あなた…。」
めぐみの動きがまるで凍りついたように静止する。危うくエレベータードアに挟まれそうになるのを、ゆき江が引っ張り戻した。
めぐみの胸に動悸が高まる。今の声…。ああ…、まさか…!
ゆっくりとめぐみは振り返り、今の声の主を見る。
玄関よりホールへと射込む折からの陽光を背に、〝彼女〟はそこに立っていた。
もちろん昨夜と同じ格好のわけがない。ジーンズにスニーカー、上はTシャツにジャケットとスポーティなスタイル。しかし、あのマスクは着けていた。蒼地に稲妻を思わせる金のストライプ。
そしてその後ろにあふれる、反射光の粒をふりまく長い黒髪…。
あ…、この人って、すっごい着痩せするんだなぁ…。何の脈絡もなく、めぐみはぼんやりと思う。
しばしの絶句の後、ようやくめぐみの口が動いた。
「あ…あの…、あなた……。」
〝彼女〟のバーミリオンのルージュに彩られた形のよい唇が、今度ははっきりと、優しく微笑んだ。
「あなたに会えてよかったわ。…社長にお会いしたいんだけれど、取り次いで頂けるかしら?」
頬が熱く火照ってくるのを激しく意識しながら、めぐみは聞き返した。
「あの…、社長にどういった…?」
再び微笑む〝彼女〟。
「IWCとのマッチメイクをお願いしたいのよ。私はどこの興業団体にも属していないし、ここはまだ〝契約〟させられてはいないようだし…。」
次の言葉を発する前、めぐみはぐっと唾を飲み込んだ。飲み込む音が自分の耳にやけに障った。
胸の動悸はますます早鐘のように高まっていく。
「あの…、…〝あなた〟は一体…?」
また、〝彼女〟は微笑む。
「私は、サンダー…。レディ・サンダー…。」
その時、めぐみは何かが心に引っかかるのを感じた。まるで全身が心臓と化したかのような胸の動悸と頬の火照りで、体全てが火のように熱くなっているはずのそのどこかに、それは微かな冷え冷えとした感触とともに確かに引っかかっていた。
しかしそれが一体何なのか、今のめぐみにはわかろうはずもない。
目の前の〝彼女〟は、なおも優しく微笑んでいた。

＊

その部屋は薄暗く、少年が転がされているその場所だけライトに照らし出されて明るかった。
ブロンドの巻き毛のその白人の少年は、全裸で、手足をがんじがらめに縛り上げられている。その顔には苦痛とも快楽ともつかぬ奇怪な表情が凍りついたように貼りつき、ぐったりとした体は、まだ空しくも逃げ出そうと抵抗しているのだろうか、時折くねくねと緩慢に動めいてみせる。そして、その股間のもの——ペニスに取りついているのは…。

その女の方も、ブロンドの髪を長くのばした白人の女だった。小柄で恐ろしく華奢な印象の、ともすれば少女のように見える女だ。しかし、全裸の白い体をライトの中に浮き立たせ、少年のペニスを口に含んだその表情には、少女にはあり得ぬ邪悪で淫蕩な色が満ちていた。

女が少年から口を離した。次いで、長く伸ばした舌をペニスの敏感な部分に這わせてゆく。少年の表情が狂気じみたものになる。と、その瞬間、少年はその先端からミルク色の液体を射出していた。

これで何度目か…。10回ではきかぬ。

その狂気の表情は、少年の顔にそれまでの苦痛の表情に代わって貼りつき、そして消えなかった。とうに〝限界〟は超えているはずであった。吐き出されたミルク色の樹液もほんの数滴の量だった。しかしその射出された飛距離は、少年の高ぶりが凄まじいものであったことを示している。少年の体をその極みまで押し上げた女の手管が尋常のものでないことも、そのことは同時に示していた。

キッキッキッキッキッ……

薄闇の中、奇怪な甲高い音が響き渡る。何かを擦り合わせたようなその音。よく聞けばまるで何かの昆虫の鳴き声のようにも聞こえる。知らぬ者には思いも及ぶまい。それは、あの女の笑い声だったのである。

奇怪な笑い声を上げながら、女は片手で少年のペニスに激しいしごきを加える。少年は快楽と苦痛と狂気の入り混じった表情のまま、空しくその張りきりっぱなしのペニスを上下に動かすのみ…。女は残る片手で傍らにあったディルドを引き寄せ、器用に自分の股間にはめる。ローションがたっぷりと塗ってあるのか、ディルドはぬらぬらと淫らな光を放っていた。

その少年と女の凄まじい痴態が演じられている〝舞台〟の傍ら、巨大な安楽イスの上に別の女が一人寝そべっている。その女はゆったりとしたローブを身にまとい、ブランデーの入ったグラスを片手でもて遊びながら、舞台の上の饗宴を眺めていた。そして、さらにその傍らにひざまづいているもう一人の女…。やはりゆったりとしたローブをまとっており、こちらは寝そべった女に付き従うように黙し、顔は伏せられていた。

舞台の上では、女が少年の体を返し、自らの股間に装着されたディルドをそのアヌスに突き立てていた。それまで死んだようだった少年の喉から魂切るような悲鳴が上がり、同時に彼のペニスからは再び白い淫液が噴き出す。

「見事なものだな…。」

安楽イスの女が言葉を漏らす。ひざまづいた女が顔を上げる。

「あの〝ダーク・ビー〟の手にかかれば、男でも女でもあっという間、だ…。」

ひざまづいた女が受ける。

「あの子は、例の…?」

「その通り。西海岸で幅を効かせている奴の息子さ…。昨日は奴の奥方の体と、それが死ぬまでの一部始終を撮ったビデオを送りつけてやったが…。これで奴も、奴のファミリーもおとなしくなる…。」

「と、すれば、合衆国内の興業権は、ほぼ全て手中に収めたことになりますな…。」

安楽イスの女はそれには答えず、手に持ったブランデーグラスをひとしきりくゆらせて見せた。

「ときに…、」

しばしの後、再び安楽イスの女が口を開いたので、ひざまづいた女は反射的にかしこまった。



レディ・サンダー



「ケララか、しくじったようだな…。」
「は…。メグミ・ルトーの始末には九分九厘成功していたようなのですが…。」
「ふむ…、ルトーの始末については、早急に新しい〝対戦相手〟をセレクトするように。我が団体の興業上、あのジャップ娘は邪魔なことこの上もないからな…。」
「は、それは早々に…。…して、〝あやつ〟のほうの始末は…？」
「とりあえずは様子を見る。まだ我々に逆らう輩と決まったわけではないしな。ただの威勢のいい新参者かもしれん…。」
「わかりました。そやつに関してはエージェントを派遣しましょう。もし万が一のことあれば、このサイドワインダーが始末をつけます…。」
「うむ、まかす…。それより、な…。」
安楽イスの女の口調が突然に変わる。彼女はゆっくりとローブの前をはだけた。その下には何も着けていない。
「私も少し欲しくなった…。来い、サイドワインダー…。」
「…はい、総帥…、…いえ、ジュリア様…。」
ひざまづいていた女が立ち上がる。身の丈2メートルにもとどきそうな大女だ。まとっていたローブを脱ぎ捨てる。こちらもその下は全裸だった。
キッキキッキッキッキッ……、また、あの昆虫じみた笑い声が響く。舞台では、女がディルドを少年のアヌスに突き入れたまま、交尾の動作を繰り返している。
少年の表情が狂気から空虚なものに変わったとき、最後のオルガスムが彼に訪れた。そして彼がその命とともにペニスの先端から噴き出したのは、ミルク色の樹液ではなく鮮血であった。それは薄闇の中、ぽっかり浮かび上がった光の輪の内に、妖しい真紅の花を咲かせたのだった。
〈つづく〉

放課後クラクラ通信

Vol.1 真智子ちゃんの巻

ブルセラショップで捕獲した女子校生を徹底解剖

なまえ：A塚真智子（１７歳）
がっこ：東京都文京区某女子校２年
じゅうしょ：千葉県柏市

こんにちわ。真智子です。ブルセラのお店には友だちの紹介で来るようになりました。遊ぶお金のない時なんか、はいてるパンティをそのままお店に売ることもあるんですよ。もちろん、親には内緒。バイトしてることになってるんです。

コンドームはいつも持ってるよ♡

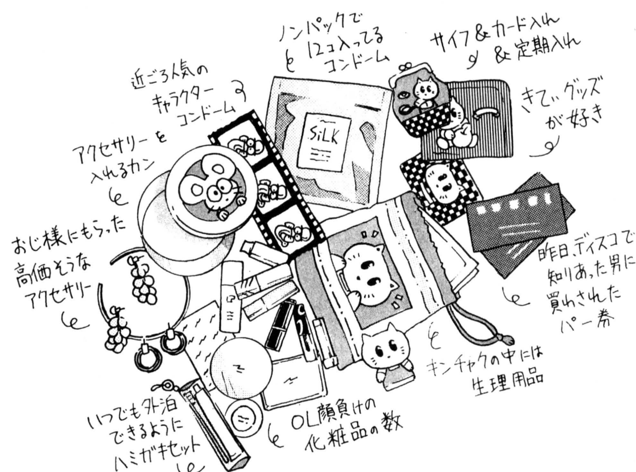
学校はけっこう自由な雰囲気で、持ち物検査もあまりないから、コンドームなんかでも平気で持ち込めちゃう。欲しい子には、学校で分けてあげたりもするのよ。遊びに行く日は、授業が終わったら学校でメイクしちゃう。見つかったら怒られるけど、落ち着いてできるので失敗が少ないの。

死ぬまでに一度はイッてみたい!!

実を言うと、最近セックスをあまりしてないんです(笑)。彼ともBまではいったりするんだけど、いざという時に友だちがやってきたり……。この前も、初めての男のコとやったら、先っぽが入ったところで爆発！　もう、やんなっちゃう!!　それから、私まだイッたことないんです。死ぬまでに一度でもいいから、イクっていうのを体験してみたいの。というわけで、イカせてくれる人を募集中で～す。

カワイイものが好き！

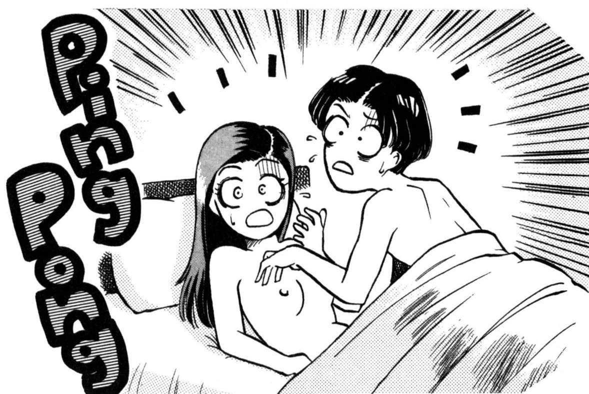
え、いつももってるもの？　別に普通の女の子と同じだよ。昔からキャラクターものが好きで、お財布や定期入れや小物入れもみんなネコちゃんキャラクターなの。ほら、この人形もかわいいでしょ。カワイイからこういうの好き。

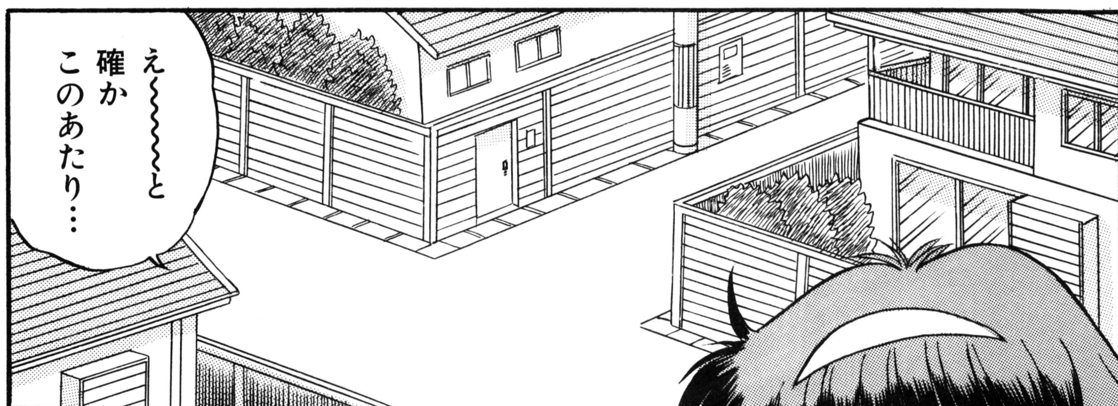


ブルセラ診断

真智子ちゃんは、女子校生にしてはかなり遊び慣れた女のコだ。初めて会った時には、とても女子校生とは信じられなかったけど、こっそり生徒手帳も見せてもらったぞ。仕事じゃなければ、たっぷりイカせてあげられたのじゃが……。

（マッハ文男）





あゆみちゃん物語 外伝

〜 あぶないお見舞い 〜

ラッシャーヴェラク

協力:アリスソフト







※ この作品は、アリスソフト発売の人気美少女ゲームソフト「あゆみちゃん物語」をもとに構成したものです。

浩一クン…大丈夫っ?

ガチャ!

今日カゼで学校休んだらあゆみちゃんがお見舞いに来てくれました。

ひょい

あははは…もう大丈夫!心配いらないから……

ゼェ…

ゼェ…

ゴホッゴホッ

もそ…

……

十分心配しちゃうよ…

――でももう安心して!

ばばっ!!

スーパー
69

◆彼の特効薬は愛しい彼女の来訪ととっておきのごちそう…!?



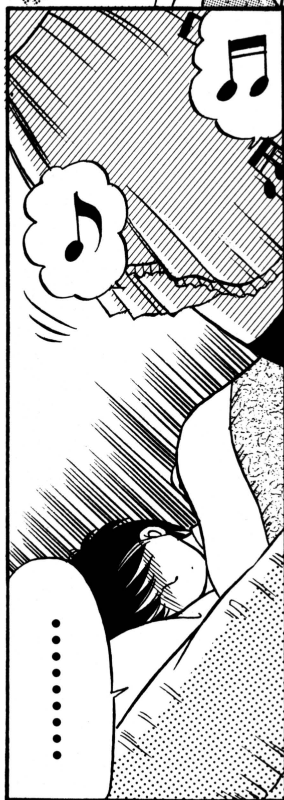
きゅっ!

あゆみおいしい物いっぱい作ってあげる――

ねっ♡

ぴらっ!

!!



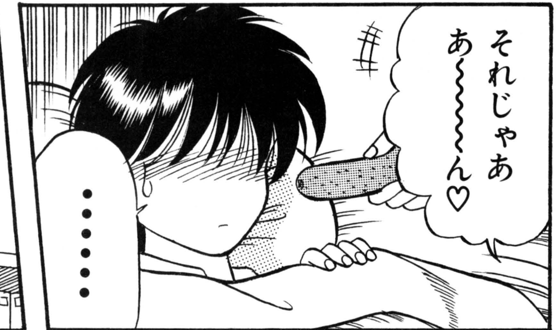


いつも元気なラッシャーヴェラク先生に作品の感想と愛のあるお便りを!!



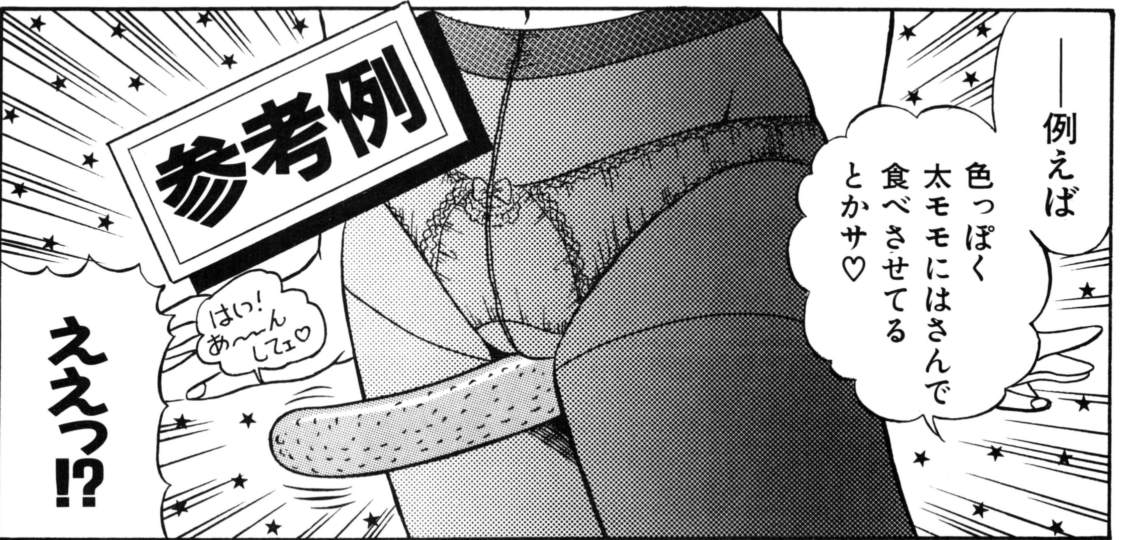






お便りのあてさきは…

〒162 東京都新宿区早稲田鶴巻町543-7 NSビル2F「パソパラCHAT」編集部まで





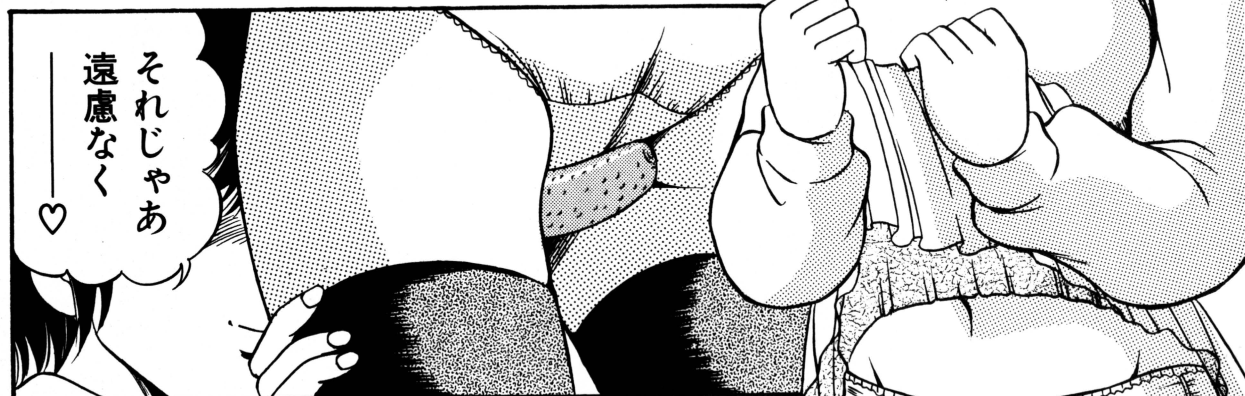
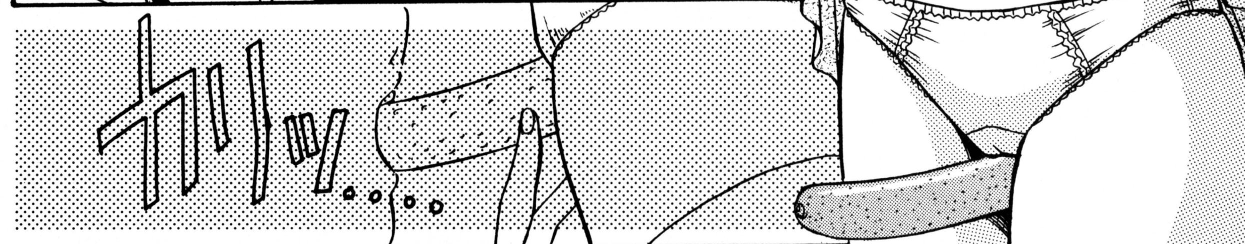




そんなの
やだよォ!!

だから
お願い!!

あゆみ
なんでも
してあげる
から！


おねがい…
食べて
ぷるっ……
ぷるっ……

それじゃあ
遠慮なく
――♡

カリッ……

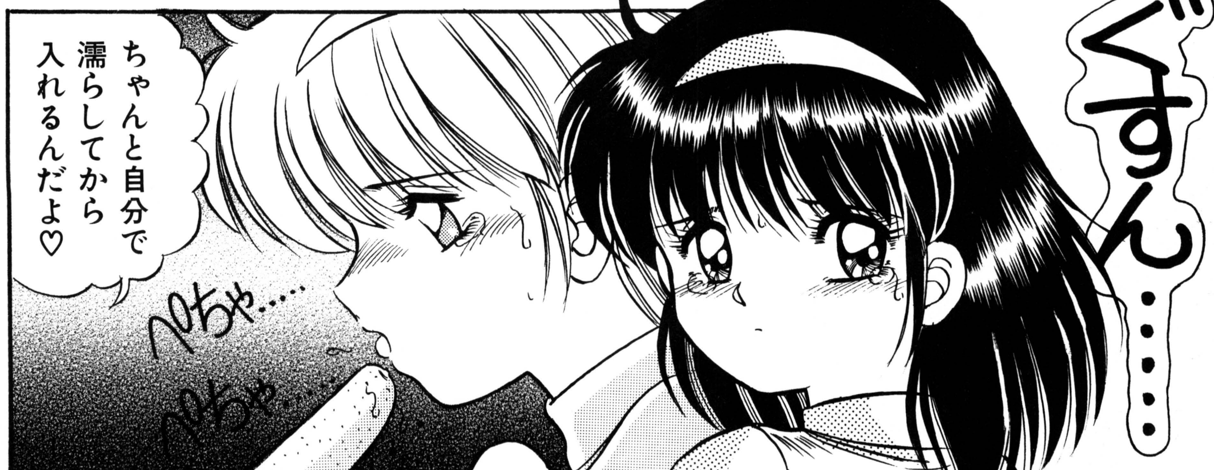
んっ……!
カリッ!
んんっ!!
カリッ!!

次は胸の谷間で食べさせて♡
ペロりん♡
はい・・・
残りは口移しだ♡
コリッッ…
コリッ…






肺炎にかかって
もう一生
あゆみの顔
見られないかも
しれないいな…
しみじみ……
はい…
します
ぐすっ……
ぐすっ……


ぐすん……
ちゃんと自分で
濡らしてから
入れるんだよ♡
ぺちゃ……
ぺちゃ……

うん……

脱ぎっ！

ぬぽっ……


ふううう！
ビクッ!!
ふぁあっ!!
ビクッ!!
ジュッ！
ジュッ！
ジュッ!!
じゅくっ！
あっ…！
ああっ!!
じゅくっ!!
ぬっぷ！
ぬっぷ!!
はぁ…
はぁ…
トロ……

あっ……
くっ……!
あっ……
あっ……
ビクッ!
くふうっ!!
ビクッ!
ビクッ!








はぁ……
はやくっ…
はぁ……
はやく
たべてェ…
ピクッ
ピクッ
ピチュ…
ピチュ…
ピクッ
はぁ
はぁ
ポタ…ポタ…
それじゃあ
いただき
ま〜〜〜す♡
パキッ!!
ひいっ!
あああ
あっ!!





ほら早く！あゆみの膣に入れてくれないと
大切な所がカゼひいちゃうよ！
はぁ……
はぁ……
はぁ……
はぁ……
はぁ……
ギシッ……
うん……
ぬちゅ……


くうっ…！
ズズズズ!!!
ふあああ
あん!!
ズプ!!!
あっ!
あっ!
あっ!
あっ!

カゼって
人にうつすと
治りが早いって
言うから――！
がばっ!!
きゃん!!
あゆみの膣にいっぱいうつしてあげるねっ!!
ぐぷっ!!
ぐぷっ！
あああっ!!
ああん!!
うつしてェー

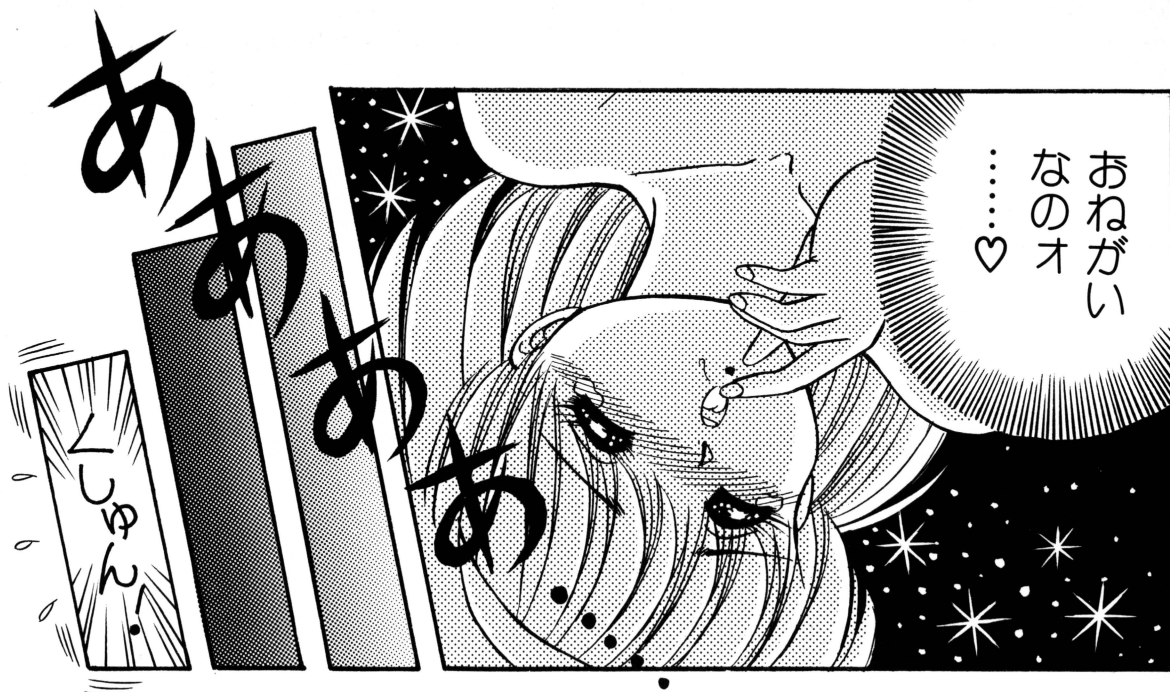
ああっ!!

あゆみの膣(なか)にいっぱい!いっぱいっ!!

ああっ

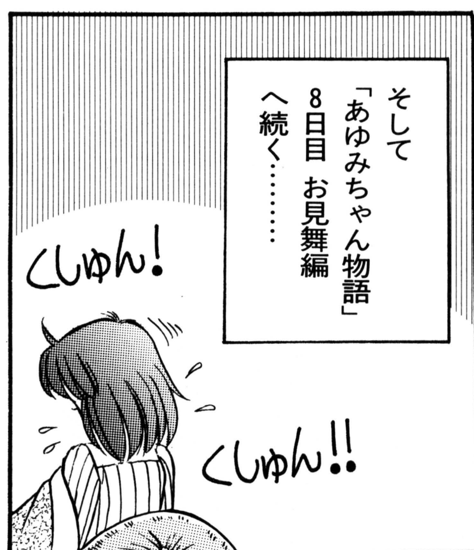
ドプッ!!











あゆみちゃん物語　外伝／おわり

第1回

有坂亜摘のファッションスクランブル

私のテリトリーにようこそ。他称下着&スクール水着フェチの有坂亜摘です。男のロマン女のウラ側。ファッションスクランブル第1回目はセオリーにブラジャーとショーツについてのレポート。

まずは清純派編。Tバックが巷を度巻してはおりますが、これ見よがしの姉チャンのTバックなんかより、普通の女のコのフツーの下着の方が断然色っぽいし、そそられる。そう感じているのは私だけじゃない筈だ！

ささて、右の2人の下着はポピュラーな下着のワイヤーフォームブラ&ショーツ。白い髪の女の子はハイレグ。

両方ともワコール。ワコールは少々高価だけど、ブラジャーとかでもいいデザインがそろってる。

最近の流行りなのか何なのか、レースを使ってある下着が増え始めて実にありがたい♡

ブラはともかくショーツってのはへそ下でお腹を締める小さなビキニタイプっては体にも良くないし、はき心地も悪いのだ。（いや極端な話、いわゆるデカパンの需要が若い層にも伸び始めているそうで、はく方はともかく、見る方は…泣）でも、実際、中高生なんかはプリントショーツが多かったりする。

ブラジャーは、上記のワイヤーフォームブラとバンドーブラ（ワイヤーの入ってないソフトなもの）が一番ポピュラー。右下のSD女の子の付けてるのがバンドーブラ。ただ、このブラジャー少々見た目が地味の為、ポピュラーなのに美少女系コミック誌や同人誌などで見掛けた事はないんだよね。大体H本の主流は1/2カップか3/4カップブラだね。

たかが下着、されど下着。男はともかく女は結構大変だったりするのだ。

さて、次回はちょっとHなショーツあれこれ。下着に対する質問や疑問も受け付けています。ビシバシ答えられるよーにしますのでお便り下さいね。

参考：ワコールBC139 A〜Cカップ6800円 Dは7300円

読みきりショート・ファンタジー
えっちストーリー

僕の彼女は小妖精(エルフ)

Author
瑞 茂豊基
Motoki Mizu
Illustrator
カズマ・G-VERSION
Kazuma・Ji-Barjon

僕には好きな女の子がいた。
今すぐにでも自分のものにしたかった。
でも、実はその娘(こ)は――

「……では、古より定められし偉大なる《天と地と精霊の神々》との盟約に従い、神の下僕リー・カンバルウンガの成人をここに認めん」

〝長老〟が恭しい仕草で告げる。その瞬間、僕は「やったぁ！」と心の中で叫んだ。

とうとう僕は「大人」になったんだ。15歳の誕生日の時から、成人の仲間入りができるこの日の儀式をどんなに待ったことだろう。

僕は、僕に向かって差し出された成人の御酒を、作法通りに全部飲み干した。盃を返し、一礼する。

祭壇の上から「ふぅ」という溜息の音が聞こえてくる。

「やれやれ、やっと儀式が終わったわい。この歳で祭司の衣装を着るのはなかなか辛いことじゃて」

そう言って、〝長老〟は頭から冠状の重そうな飾りを下ろした。「町内会」の会長を務める偉い人であっても、90歳を越えちゃうと、やっぱり儀式はしんどいものらしい。

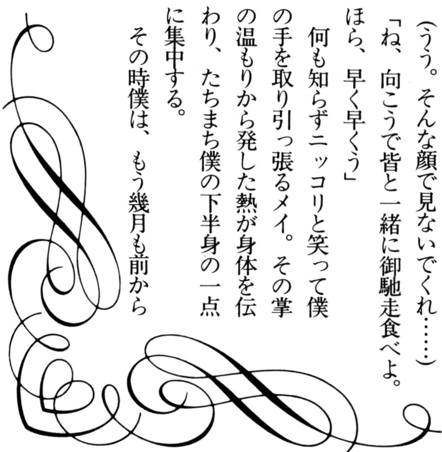
でも僕はニコリともせず（だって儀式中に笑うと怒られるんだもの）、じっと床に跪(ひざまず)きながら、厳粛な態度で次の言葉を待ち続けた。

「さて、リーよ。今日からお前も無事に

成人として認められるようになった。だが成人といっても、それだけで一人前になったわけではないぞ。これからのお前は、より一層、社会勉強に励まなければならない。父母を敬い、師に従い……」
うっ——始まった。重要な儀式の時の〝長老〟の説教は長いんだ。でも、これを乗り越えなければ待望の「成人」にはなれない。成人にならないと僕は——
「……非道を行なわず、むやみに疑わず、他人を決して外見だけで判断せず……」
イライラする心を懸命に抑えながら、僕は早く〝長老〟の説教が終わるように必死で《天と地と精霊の神々》に祈っていた。



「おめでとう！」「とうとう大人の仲間入りか。やったな」
どうにか長話から解放されて「公民館」の扉を出た途端、いきなり僕は大勢の人から祝福の言葉を受けた。両親、親戚、友人たち——そして、その中には隣家に住むエルフ一家のイレリオさん夫婦の姿もあった。
あれ？ と、いうことは——
「おめでとう、リー！」
友人たちの輪の中から、祝福の象徴であるファリンカの花束をいっぱいに抱えた小柄な女の子が飛び出してきた。
その娘は僕の所へくるやいなや、花束を渡して僕の頬にキスをした。
瞬間、僕の胸が思いっきり締めつけられる。
彼女は僕を見て嬉しそうに目を細め、尖った耳をピンと立てて微笑んだ。
（メイ……）
そう、彼女はエルフ。人間にそっくりな、でも人間とはちょっと違う「妖精族」の生物だ。イレリオさん夫婦の一人娘、年齢も僕と同じ15歳。黒目がち（いや、茶系色の目だから茶目がち、かな？）の大きな瞳、ミドルカットの金髪とスレンダーな肢体、透き通るような声の可愛い、明るく元気な女の子。
僕は、ちっちゃな子供の頃から彼女に心を奪われていた。
人間族と妖精族が和解し、人間と積極的に交流しようとする妖精たちが人間の住む町や村に移住してくるようになってずいぶん経つ。特に、人間と結婚できる（つまり子孫が残せる）エルフの人たちはかなりの数が移り住んできたみたいだ。長らく森だった僕の家の隣にイレリオさんたちが引っ越してきたのは、僕がまだ3歳の時だった。
彼らが越してきた時、僕はエルフ一家の突然の出現にひどくびっくりした憶えがある。森の木々が寄り添うようにして形成された、大きな樹木状の家。そこから現れた、白い肌で尖った耳の異国の人たち。中でも一番驚いたのは、彼らの中に僕と同じくらいの年齢の「女の児がいたことだった（彼女を最初に見た日の夕方、なぜか僕は恐くて泣きながら、慌てて家に走って帰ったんだっけ）。
でもそれは最初だけで、しばらく近所付き合いをしているうちに、僕と彼女はすぐに打ち解けて仲良くなった。
彼女——メイは、それからもずっと僕と一緒の時を過ごした。幼稚園も一緒、小学校も一緒。僕は、よく友人たちにメイとの仲を囃し立てられたものだった。言葉には出さなかったけれど、人間ばかりの社会に来て心細かったんだと思う。登下校の時も遊ぶ時も、メイは僕の側にピッタリ付いて離れなかったんだもんな。
そんな彼女を「女性」として意識するようになったのは二人が中学校に入って二年目（つまり去年）のことだった。その頃には友人がたくさんできていたメイは、彼女らの誘いでバレーボール部に入っていた。部の活動で忙しく、なかなか一緒に帰れないのを寂しく思った僕は、「エルフが激しい運動をして大丈夫なのかな」などと勝手に心配し、ある日こっそり彼女の様子を見に行った。だが僕の期待は外れ、メイは友人と楽しそうにボールを追い駆けている。なんとなく気まずくなった僕は、気づかれないような場所でしばらくぼんやりとそれを眺めていた。
その時——
（げっ
汗で引っ張られた体操着の片裾から、彼女の臀部が不意にはみ出した。
その後すぐにメイは自然な動作でそれを直したものの、まともに目撃した僕は、その瑞々しく濡れた白いふくらみに、形容し難い不思議な感情を覚えてしまった。と同時に股間に異様な昂りを感じた僕は、慌てて校舎のトイレの中に駆け込んだのだった。（——思えば、初めて「抜いた」女性はメイだったんだよなあ……）
それ以来、セーラー服を着ている時も普段着でいる時も、僕は彼女の服の下が気になって仕方がなくなってしまった。また彼女が気になる仕草をするたびに、自己の熱い昂りを密かに処理するようにもなった。だが、それは日ごとに激しくなる一方だった。ある時など、気が狂いそうになって、続けて三回以上処理したこともあった。
メイが跳ぶ。笑う。耳を動かす。
（うっ、メ、メイ！）
——その頃から、メイは僕の特別な存在になったのである。
「ねえ、リー。何を考えてるの？」
喧騒の中で思い出に浸っていた僕は、唐突な言葉で我に返らされた。見ると、茶色の大きな瞳をクルクルさせたメイが僕の顔を覗き込んでいる。
（うう。そんな顔で見ないでくれ……）
「ね、向こうで皆と一緒に御馳走食べよ。ほら、早く早くう」
何も知らずニッコリと笑って僕の手を取り引っ張るメイ。その掌の温もりから発した熱が身体を伝わり、たちまち僕の下半身の一点に集中する。
その時僕は、もう幾月も前から



考えていたことを実行に移そうと心に決めた。



「わ～、リーの部屋に入るのって何だか久しぶり」

僕の部屋に入るなり、メイは開口一番に言った。

「そんなに久しぶりだったっけ」

エール茶の入ったマグカップを持つ手を緊張でほんの少し震わせながら、僕は平静を装って話しかけた。

僕のベッドに無遠慮に音を立てて腰を落とすメイ。今日の彼女は緑(グリーン)のTシャツにギンガムチェックのミニスカート。そのスカートがベッドに乱暴に腰を落とす瞬間フワリと捲(めく)り上がり、細くて白い彼女の大腿部(ふともも)を露出させる。思わずカップを手から落としそうになってしまった僕は、慌ててそれを机の上に置いた。

「そうよ。だって最後に部屋に入ったの、小学5年の時だったもん。それだって、リーが忘れた宿題のプリントを渡して、すぐに帰っちゃったじゃない」

そう言いながらメイは、窓の外の景色に遠い目を向けた。だがそれと同時に足を組んだものだから、僕の視線は自然とそちらに集中してしまった。

たちまち僕の股間が熱くなる。

(ううう……ま、まだだ、まだ我慢しろ)

僕がメイを自分の部屋へ呼んだのは、彼女に結婚を申し込むためだった。

15歳になれば結婚もできるし、子供も作れる。もちろん家族を養うための食いぶちは稼がなければならないが、中学を卒業したら僕は「町内自警団」に見習い兵士として就職することを決めていた。だから僕は、成人の儀式が終わったらすぐにメイにプロポーズするつもりだったのだ。

そして、できればそれと同時に——

『あ、あのさ、話があるんだ。今、ヒマかい？　家(うち)に来ないか』

ぎこちない声で電話でメイを呼び出す。彼女の両親も僕の両親も出かけて不在なのは確認済みだ。

メイは疑いもせず、いつもの明るい調子で『うん、いいよ』と答えた。



「リーもう大人になったんだよね。何だか私たち、どんどん離れていっちゃうみたい……」

僕の妄想は、彼女の物憂げな、そして妙に寂しそうな声で打ち切られた。

「そ、そんなことはないさ」

メイの言葉の真意は読めなかったものの、僕は興奮に震える声で返事をする。

「どうしたの、リー。今日、何か変だよ」

変化に気づいて、メイが不思議そうな顔をこちらに向ける(か、可愛い……)。

「そ、そんなことはないって。——そ、そうだ。エール茶でも飲むか。淹れ立てで美味(うま)いぜ」

僕は必死に平静を装ってマグカップを彼女に向けて差し出す。ところがその時。

「きゃっ」

メイは僕の手からカップを取りそこね、中身を全部、自分のTシャツの上にこぼしてしまった。

メイの、決して大きくはないが、形の良い二つの乳房がくっきりとシャツの上に浮かび上がる。

「メイ！」

僕はメイの身体を抱きしめ、ベッドの上に押し倒していた。

「な、なに、やめて」

あまりの突然さに、メイは「どう反応してよいかわからない」といった表情で僕のされるがままになっている。

僕は素早くメイのTシャツを脱がし、露になった白い胸の中央に顔を埋めた。その時になって、ようやくメイは自分の置かれた立場に気づいたようだ。

「リー。お願い、やめて」

必死で僕の上半身を両手で押し返してくる。

「好きだったんだ！」僕は叫んだ。

「好きだったんだよ！　ずっと前から！」

メイの、力を入れれば折れてしまいそうな腰(ウエスト)を左手で、すべすべした乳房を右手で摑みながら、僕は夢中になって言葉を発した。だが、その時すでに僕の頭の中は真っ白になっていて、ただひたすら、目の前に倒れている一個の「女」を自分のものにすることしか考えていなかった。

首筋から唇を這わせ、胸の突起を口に含む。でもそれが相手のことをまったく考えない自分本位の愛撫である証拠に、メイが僕の身体を押し戻そうとする行為は、力は弱まるもののいっこうに止まる気配がない。

かまわず僕は乱暴に乳房(メイのむね)を舐め上げた。

「結婚したいんだよ……君と」

舐めながら、呻(うめ)くように呟く。

太陽が雲に遮られ、不意に部屋の中が暗くなった。その時なぜか、僕を押していたメイの腕が左右に倒れ、彼女の身体からフッと力が抜けた。

その変化に気づかず、僕は、腰の部分からスカートの中に強引に手を捩じ込み、まだ男の手が触れて(けがされて)いない温かいメイの谷間の中に自分の中指(けがれ)を突っ込んだ。

そのまま、無理矢理に上下に動かす。動かすたび、微妙な起伏の感触が指に伝わってくる。

指が彼女の源泉(クリトリス)に触れた。

メイの口から可愛い吐息が漏れる。

——その時、突然僕は、メイの谷間(それ)が見たくてたまらなくなった。

「メイ……見せてくれ」

返事を待たず、僕はメイのスカートを摑み、下着と一緒に一気に足首まで引き下ろした。文字通り「若草色(うすいグリーン)」のメイの若草が、僕の目の中に飛び込んでくる。僕の予想に反してそれは、まだ産毛程度にしか生えていなかった。

(子供(ガキ)みたいに薄いなあ……でも……)

見ているうちに、だんだんとそれが、愛らしく感じられてくる。

(綺麗だ……とっても)
　僕は思わず、震える指でメイの若草(それ)をサッと撫でた。すると、梢の新緑の芽のような何ともいえない淡い香りが、僕の鼻腔をくすぐった。
　僕の耳に、泣いているような、喘いでいるような、そんなメイのか細い呼吸が聞こえてくる。僕はその下の部分にもう一度手を触れてみたが、すでにメイの谷間(そこ)は熱い彼女の体液で溢れ返っていた。
(もう——もう我慢できない!)
　僕は乱暴に下履(ズボン)を脱ぎ捨て、荒々しく自己主張(きつりつ)するもう一つの「自分」をメイの前に晒け出した。そして彼女が悲鳴に近い声を上げるのにもかまわず、昨年からずっとメイの中に侵入したがっていたそれを、一瞬の躊躇もなしに彼女(メイ)の中へ突き入れた——
「ん……あ……」
　ゆっくりと、いとおしむようにメイの中を上下する。
　あれからどれほど経ったのか僕は、もうすでに六度目の行為に入っていた。
　最初の「爆発」は突き入れてすぐに起こってしまった。
　だが僕の胸の高まりは治まらなかった。二度、三度と「爆発」させる。
　それでも僕の高まりは静まらなかった。
　ようやく僕が落ち着きを取り戻したのは、彼女が、苦痛ではない、真の悦楽の喘ぎを漏らし始めた五度目の「爆発」の後だった。
　六度目を突き入れながら、僕は唐突にメイの身体の柔らかさに気づいた。
(僕は今、メイと一つになっているんだ)
　感激して、僕は胸が一杯になった。
　突き入れた最初は顔中を歪ませて痛みに耐えていたメイも、今では気持ち良さそうに息を弾ませている。その、小鳥の囀りにも似た美しい声は、それだけで僕の愉悦を高めてくれた。
「んん……ふ……くぅ」
　メイの喘ぎ声が早くなってきた。同時にメイの中も、それに合わせて心地好く僕を締めつけてくる。ほんの少し前まで処女(おとめ)だったそこは、男を通すにはまだまだ小さく、華奢だった。だが、僕には、それがかえっていじらしく思えてならなかった。そしてそれは、僕の「分身」を、さらにさらに硬く熱り立たせた。
(ああ……メイ……メイ)
　僕は思わず腰の動きを早める。
「……あ……ああっ」
　メイの高まりが急激に近づく。彼女のもっとも敏感な性感帯である「耳」が、ピンと張ってピクピクと動き始めた。
「あ……あ……」
(ううう……げ、限界だ……)
　たまらなくなった僕は、いきなりメイの耳の先を口に含んで吸い上げた。
　その瞬間、
「きゃうん!」
　可愛い叫びを上げてメイがイッた。
　そして僕は、六度目の「爆発」をメイの中に放っていた。



僕の彼女は小妖精(エルフ)

嵐が去った後のような静寂が訪れた。

　メイと僕は、ぐったりとして、しかし心地好い余韻を味わいながらベッドの上に倒れていた。外はもう暗くなっていて、メイの表情は窺い知れない。だが、想いを遂げた僕の方は、いつ死んでもいいと思えるほどの充実感に満たされていた。

「……ありがとう……」

　突然のメイの言葉に、僕は身体を動かして反応しようと試みた。だがそれにはあまりに疲れすぎていて、気怠さに負けた僕は、結局「えっ？」と聞き返すのがやっとだった。

　そんな僕に腹も立てず、メイはそっと僕の肩に手を伸ばしてきた。

「私もね……結婚するならリーと……したかったの。……今、とっても幸せ……」

　激しい運動の後の疲れに掠れる声で、メイは囁くように呟いた。

「ほ、本当かい」

「うん」

　僕の喜びは、しかしメイの次の言葉で遮られた。

「でも、お願い。結婚まで、あと5年、いや、6年待って……」

「え、なぜ。どうして」

「うん……私たちエルフは、成人するのが遅いのよ。人間と同じように成長するのは10歳くらいまで。大人になるには、21歳の誕生日が過ぎるまで待たなければならないの……」

「ふ～ん、そうなのか……」

　急激に僕は落胆した。しかし次の瞬間、頭の中に浮かんだ「ある疑念」によって僕の身体は竦み上がった。

「お、おい！　すると、もしかして今の君の年齢は――」

　彼女（メイ）は、ちょっぴり恥ずかしそうに、それでもハッキリとした声で僕に告げた。

「うん。人間でいえば、まだ12歳くらいなのよ、私」

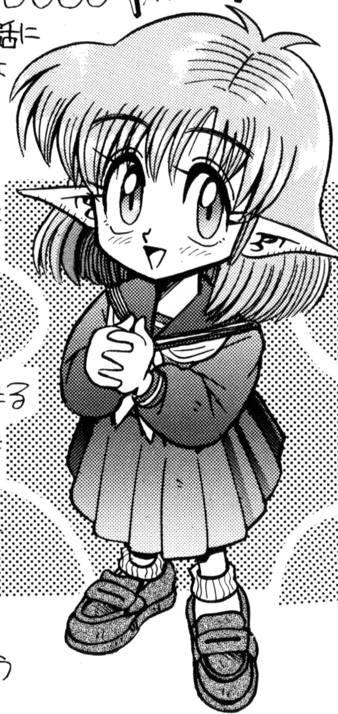
　僕は頭骸骨を棍棒で殴られたかのような衝撃（ショック）を受けた。15歳の「成人」が12歳の女の児（こ）とHした。これは立派な「淫行」じゃないか！

　僕の町では、淫行罪は死刑、もしくは終身懲役刑だ。僕は顔から血の気が大量に引いていくのを感じていた。

「パパとママに知られたらタダじゃすまないね……ね、内緒にしとこう。内緒にしておけば絶対にわからないよ。ね？」

　普段（いつも）の子供っぽい明るさでメイが笑って言った。でも、もしも彼女が妊娠したとしたら、その時こそ僕は――

『他人を決して外見だけで判断するな』



僕の頭に、いまさらのように〝長老〟の言葉が思い出される。

（とほほほほ……）

　腕に抱きつくメイの温もりを感じて頭を抱えながら、今は元気なく縮こまったもう一つの「自分」を僕は思いっっっっっっっっきり睨み付けていた。

（つづく……かもしれない）




亜理子／きゃんきゃんバニー・スピリッツ（カクテルソフト）より
しらとりれいこイラストシリーズ
GAME
ゲーム広場
GARDEN

読者参加シミュレーションゲーム堂々開幕!!

これは美少女版の「三国志」だ!

娘々八国志

NYAN NYAN HAKKOKUSHI

イメージイラスト/ぴろしき



企画・文／七瀬流
イラスト／藤原秋久・福原興治
協力／ポニーテールソフト

ときは戦国、ところは神秘のヴェールにつつまれた東方は龍の国——そこに、戦乱の世を統べんと立ちあがった八国の群雄の姿があった。

八国の君主は麗しの美姫たち。

さあ、キミもこの美しき君主の下へとはせ参じ、旗を掲げて戦いに加わろう！

将軍として仕える君主の戦力を支え、軍を指揮する大将軍となるを夢見るか。それとも、軍師として全軍を動かす作戦を立て、君主の信頼をえて参謀となるか。勝者には栄光、敗者にはきびしい運命が待ち受ける。勝てば国の支配する領土が広がり、君主から報償を賜わることができる。しかし、負ければ処刑、降格は当然のこと、国そのものが滅んでしまうことすらある。

すべてはキミの采配しだい。

読者参加シミュレーション・ゲーム、『娘々八国志』——ここに見参！

AUTHOR
たかなみれい
REI TAKANAMI
ILLUSTRATOR
としまちはや＆飯塚正則
CHIHAYA TOSHIMA　MASANORI IIZUKA
森村みずき
MIZUKI MORIMURA
青井　竜
RYU AOI

まで、

美少女モンスターRPGリプレイ

ELQUEST
混沌の勇者たち

RPGの大好きなキミたち！　なんと、女の子モンスターの世界で冒険するRPGリプレイのスタートだ。
個性豊かな冒険者たちは、それぞれ得意な能力を使って、美少女モンスターや美少年モンスターにされた生物と戦う。
そして、性愛パワーで彼らを元の姿に戻していくんだ。……よーするに、えっちしちゃうっていうこと。
別に、ケモケモにやりまくるってわけじゃないぞ。正義のためにはしかたのないことなのだ(笑)。
四人の勇者たちは世界に再び平和が訪れるその日まで、日夜、戦いとえっちを続けるだろう。みんなも応援してね♡

邪淫王ゼノスを倒すその日
性愛パワー全開だ！

ANG



くえすと0　キャラクターメイキングだよん

某月某日。おひがらもよく(笑)『エンジェル☆クエスト』のセッションのために、数人のプレイヤーが某編集部に集まった。

マスターは、まずみんなにゲームの概要資料を配って、簡単に説明をする。……何しろ、開発したばかりのRPGだもんで、最初から説明しなきゃーね。

マスター：さて、みんなどーかな。だいたいわかった?

まなぶ：ふむふむ、よーするに冒険しながら、かわゆいモンスターとえっちすればいーわけだ。

りゅう：ちょっと違うよーな(笑)。世界を救うために、悪いモンスターをこらしめるっていうことでしょ。

みずき：えー、あたしわかんないですぅ。えとえと、テーブルトークRPGってはじめてでー。

はいじ：大丈夫ですよ。わかんないことは、何でもおにーさんに聞いてください(笑)。

マスター：うん、コンピューターRPGをやったことがあるんなら、別に難しいことはないよ。まわりのみんなもフォローするし。

まなぶ：そんじゃ、マスター、キャラメイクをはじめよう。

マスター：ルールを見てのとーり、キャラ種族とクラス（職業のよーなもの）にはいろんなのがあるでしょ。種族を決定すると、できるクラスがいくつかに絞られてくる。

りゅう：フェアリーもできるんだね。バーバリアンって……もしかして、アニキ?(笑)

はいじ：フランネスにガイウルフねえ。獣人もプレイできるのか。

みずき：うーん、まよっちゃう。
マスター：ふっふっふ。でわ、種族はダイスを振って決めてもらおー。好みにあわない場合を考えてそれぞれ3回ずつ振ってくれたまい。
まなぶ：コロコロ……っと。じゃあ、ぼくはスタンダードに人間ってことで。
みずき：えーと、出たのは、フェアリー、エルフ、人間。
マスター：フェアリーは初心者にはちっと難しいかもしんない。エルフちゃんなんてどう？
みずき：それでいきまーす♡

りゅう：あたしはねー、うーん……フランネスって猫娘なんだよね？
マスター：特技は、しっぽに魔法をチャージできるって能力。
りゅう：あっ、それグー！ フランネスに決まり。
はいじ：3回振ったのにバーバリアン、ガイウルフ、ガイウルフ……ダイスの神は狼男にしろと言っている（笑）。
マスター：ちなみに、フランネスは性別が女性のみ、ガイウルフは男性のみとなっている。猫男や狼女はいないのだ。

まなぶ：ぼくは男性キャラでやります。
マスター：そりゃそーだ。プレイヤーで女の子がふたり入ってるのに、ヤローにわざわざ女キャラをやってほしくないぞ（笑）。
みずき：んじゃ、あたしは女性キャラってことでいーよね。
マスター：ここまで、決まったら各種族データを書き写していく。HP（体力）、MP（魔力）、容姿、腕力、運動力、知能、性別、所持金そのほか種族能力ね。レベルは全員1からスタートだよ。
マスター：次にクラス決めだ。はいじくんからいこう……ガイウルフの適性クラスは、僧侶と格闘士と調教師。どれにする？
はいじ：ちょ、調教師ってなんですか。そんなクラスがあるんですか。
まなぶ：えっちRPGならではのクラスだね。他にも踊り子とか奴隷とかジゴロとか、思いっきりヘンなのがあるよーだぞ。
はいじ：狼男だから、僧侶より格闘士でしょう。
まなぶ：調教師は？ 調教師は？
はいじ：問題外ですよう。
マスター：ではりゅうちゃん。フランネスの適性クラスは踊り子、くノ一（女忍者）、召喚士だけど。
りゅう：どれも珍しいクラスね。くノ一とかよさそーじゃん。
マスター：んじゃ、それでOK？ よしよし。次にみずきちゃん。エルフはなれるクラスが多いんだ。リストを見てちょーだい。
みずき：えとえとぉ、エルフだから魔法が使えそーなキャラにしたいですぅ。
マスター：いーところに気づいたね。エルフはマジックポイントが高いから、魔法を使わなきゃソンとゆーものだ。魔道士と召喚士のどっちかを選ぶといいね。

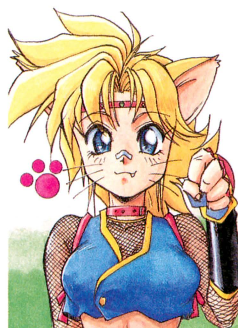
☆《フィルフィナ・ワールドとは？》

さて、勇者たちは、いったいどんな世界で冒険を繰り広げるのだろーか。ここで解説をせねばなるまい。
ファンタジーワールド、フィルフィナ。
フィルフィナは、人と自然が調和した理想境だった。
人々は村をつくり、獣人の一族は獲物を最小限だけ狩る。エルフやフェアリーといった妖精族は森でうたい、精霊や動物、そのほかの多くの亜人種もそれぞれ幸せに日々を送っていたのである。
フィルフィナ・ワールドは、昔からずっと平和だったし、すべての生き物たちはこの幸福が永遠に続くものと信じていた。
……が、突然に大きな災厄がやってきたのだ。
世界の中央に浮かぶ小島、ゼノス島には言い伝えがあった。古代において神々に敗北した邪神群が地下深くに封じられているというものである。
そしてある日、狂った魔道士の忌まわしい儀式によって、ついに邪淫王ゼノスの封印が解かれた。ゼノスは数千年ぶりに地上に復活したのだ！
世界が魔の手に制圧されるのには、ほんの数日しかかからなかった。
彼はゼノス島を中心にして、世界全体を覆うほどの巨大な〝ゾーン〟をつくりあげた。ゾーンとは、淫魔のオーラが渦巻く結界である。この中では邪神とその配下は存分に力を振るうことができるのだ。
円形に広がるゾーン内に取り込まれた生物は、多くが邪悪なモンスターに変身した。
ゼノスは、生物がそれぞれ心の隅に持っている性欲を増幅させ、よこしまなる快楽の下僕にする。とくに人間のように高いシャクティ（性愛エネルギー）を持つ生物は、より強力なモンスターとなるようだ。
また、ゼノスを性欲を利用して手勢を増やしたわけだが、シャクティに乏しい老人や子供は弱小なスライム系モンスターになってしまうこともある。彼らはゾーンの外に連れ出すか、治癒魔法をかけてあげることで回復させられる。
モンスターどもは常にえっちな刺激に飢え、満たされることがない。気に入った獲物を襲っては、そのシャクティを吸収して生きている。そして、モンスターに襲われ、シャクティを吸い取られた生物もまた怪物化してしまうのだ。
平和なフィルフィナは、たちまち邪悪なえっちが支配する荒廃した世界になった。
生き残った人々のうち、わずかな者が世界を元通りにするために立ち上がった。それが冒険者たちである。
ゼノスが滅ぼされ、フィルフィナに平和が戻るのはいつの日か!?

モンスター図鑑① ゴブリン



レベル：1、クラス：兵士
変身前：山猿、子供など



ニャルフォード（ニャル）

フランネス（猫）族、のくノ一。姉貴はだで思いきりがいい

みずき：そーねぇ……召喚士にしまーす♡
まなぶ：さて、いよいよぼくの番か。
マスター：人間は何にでもなれるよ。お好きなクラスをどーぞ。
まなぶ：もう、これしかないでしょう。調教師だよーん。最大奥義【最高のごほうび】を武器にして、鞭を片手にがんばるのだぁ！
一同：やめて～!!（笑）
マスター：ふーむ。予想に反して、戦闘系キャラが少なくなったな。まあ、その分えっちテクニックでがんばってもらうとしよう。
まなぶ：調教師は強そうじゃないか。
マスター：調教師は、弱い者をいぢめるのはうまいが、戦闘は苦手なのだ！（笑）……さて、じゃあここまでのデータをキャラシートに書き写してちょーだい。クラス、レベル1で会得している一般アクションAとB、奥義や魔法や技能、それから各種えっちアクション、性愛方向などだ。
まなぶ：フッ。さすがに調教師は技が多彩だ。鞭の術に縛りの術、蠟燭の術……ブツブツ。
みずき：たのしそーですねー、まなぶさん。召喚魔法はえーと……まだレベル1だとすくないなぁ。電精召喚と岩精召喚、あとは夢精召喚ね。
はいじ：むむっ夢精召喚！　なんとあぶないネーミングなんだ！



シャルル・ド・カリオストロン

人間の調教師、ちょっと変な奴だけどリーダー的存在

みずき：えー？　なんでですかー？　どーして夢の精があぶないんですかぁ？
りゅう：そーよー。なんでー？　マスター？（笑）
マスター：あうう。まあ、いーじゃないか（苦笑）
りゅう：うぷぷぷ……！
はいじ：どうしたんだ？
りゅう：この、くノ一のえっちアクションなんだけど、すごいのがある～。
みずき：なになに……【忍法時雨花火】。みずからの××にはじける薬粉を塗って、しゅわしゅわの刺激とともに××する技……。きゃー、はずかしー！（笑）
はいじ：そりゃあ、××が××するね。
まなぶ：ってことは、×××が×××だったら××だな。
マスター：こらこら、わけのわからん会話をするなー。××だって××だろ？
一同：××××××！（こいつら、何やってるんだか……）
マスター：ところで、クラスが決まったところでキャラのイメージもまとまったでしょ？　自分のキャラクターの名前とか年齢を考えてね。さ、自己紹介。
まなぶ：やあ！　ぼくのキャラの名前はシャルル・ド・カリオストロンだ。調教師だから



シュガー・マーブル

エルフの精霊使い。無邪気で可愛いが、魔法を使える

なー、当然のように名前もあやしいぞう。
はいじ：いかにもっていう感じですね。
みずき：うーんとぉ、シュガー・マーブルっていいまーす。17さいでーす。よろしくね♡
まなぶ：うみゅ、かわいい。
りゅう：猫娘で忍者だからねー、ニャルフォード。よろしくね。
マスター：なんか忍犬連れてて、分身攻撃ができそうなキャラだ（笑）。
はいじ：そーだなぁ、狼男で格闘家かー、う



パック・ピート（パピー）

ガイウルフ（狼）族の格闘士。信念はあるが、命令に従順

ーん……。
りゅう：あー、でもほんとに忍犬とかいるとうれしーなー。
マスター：ここにいるじゃないか。ねえ、はいじくん。
りゅう：そーだわ！　はいじくんのキャラの名前さあ、パピーにしない？
はいじ：えー、パピーですかー。そりゃないよー。
みずき：パピーってかわいいですよねー。い

☆冒険者たちの使命

冒険者は誰でもがなれるわけではない（らしい）。

邪悪なえっちがはびこる危険な世界で生き残り、使命を果たすためには、戦いに長けていたり、えっちに自信のある者でなければいけないのだ。

えっちによってイカせないかぎり、怪物化した人や動物が元に戻ることはない。逆に冒険者がイってしまったら、怪物化してしまうのだから、実は命がけなのだ。

冒険者としての当面の目的は、なるべく多くのモンスターを（倒さないようにしながら）元の姿に戻すこと。冒険者たちは怪物化した人々に正しい性愛を思い出させることで、味方を増やし各地を開放しているのだ。

邪神ゼノスは、フィルフィナのすべてを自分の配下にしようとしている。放っておけば、すべての生物はゼノスの奴隷にされてしまうだろう。ちなみに、（好色なゼノスの趣味で）モンスターの大部分は美少女か美少年だ。

ゼノスや、その支配地であるゾーンにはまだまだ謎が多いが、冒険を続けていけば、隠された秘密もきっと明らかになるだろう。



いないいなー。

まなぶ：パピーにしないと、【秘技・バナナ締め】しちゃうぞ！

マスター：そりゃ踊り子の技や〜。

はいじ：もう。わかりましたよう。じゃあ、名前はパック・ピートってことで。通称パピーです（笑）。

マスター：はいじくん、本当にそれでいいのか！（笑）……そんじゃ、ここからはRPGらしく、各プレイヤーをキャラ名で呼ぶことにするよ。いいね？ んでは、キャラメイクの締めくくりに、お買物をしてちょーだい。各クラスごとにふさわしいアイテムが設定してあるから、まずはそれを優先的に買っていってね。

シャルル：調教師は、最初から蠟燭と荒縄と浣腸器を持ってるんだな。ぼくは鞭と黒のソフトレザー、ブレスレット、あと、赤い編みタイツとシルクハットね。

パピー：あ、あやしい〜！



ニャル：こわいよ、こんなのと一緒に旅をするのやだー!!（笑）
シュガー：ねね、みんなぁ、シースルーローブってどんな服だと思う？
ニャル：みえみえのすけすけなんだよ。はなぢがぶーだよ（笑）。
シュガー：きゃあ。
マスター：えっへん。この世界では、魔力は全身の表面から放出されるので、とくに魔法使いは薄着なほど有利なのだ。
シャルル：燃える！　なんてうれしい……いや、オリジナリティあふれるルールなんだ！
シュガー：パンティを買おうと思ったけどぉ、アイテムリストにはTバックしかないみたい。
ニャル：ええと、ニャルフォードは忍刀に手裏剣、忍びかたびら、シーフセット。あと、ノミ取り首輪がほしー。
マスター：いいよん。ところでみんな、冒険者セットか冒険者セット・イージーを忘れずに買ってね。冒険に必要なアイテムがセットになってるから便利だよ。
パピー：くう！　イヌだから金がないザンス。冒険者セット買うのがせいいっぱいで、防具とか武器なんてとても無理～。
シャルル：狼人間だから、何にも着なくてもいいじゃないか。お金貸してやろうか？
パピー：それは悲しすぎる。……あ、何とか買える服があった。
シュガー：なぁに？
パピー：首輪と貞操帯。（一同爆笑）

くえすと1　アムニス村のダークエルフ男爵

みんなキャラが完成したようで、テーブルの上のお菓子をつまみながら、わいのわいのやっているところだな。
さて、『エンジェル☆クエスト』キャンペー

☆テーブルトークRPGとは？

ファミコンやパソコンのゲームでは、すっかりおなじみになったRPG＝ロール・プレイング・ゲーム。空想の世界で、自分が主人公になってドキドキするような大冒険を体験するゲームだよね。

テーブルトークRPGっていうのは、その遊びを会話中心ですすめていくタイプのゲームなのだ。

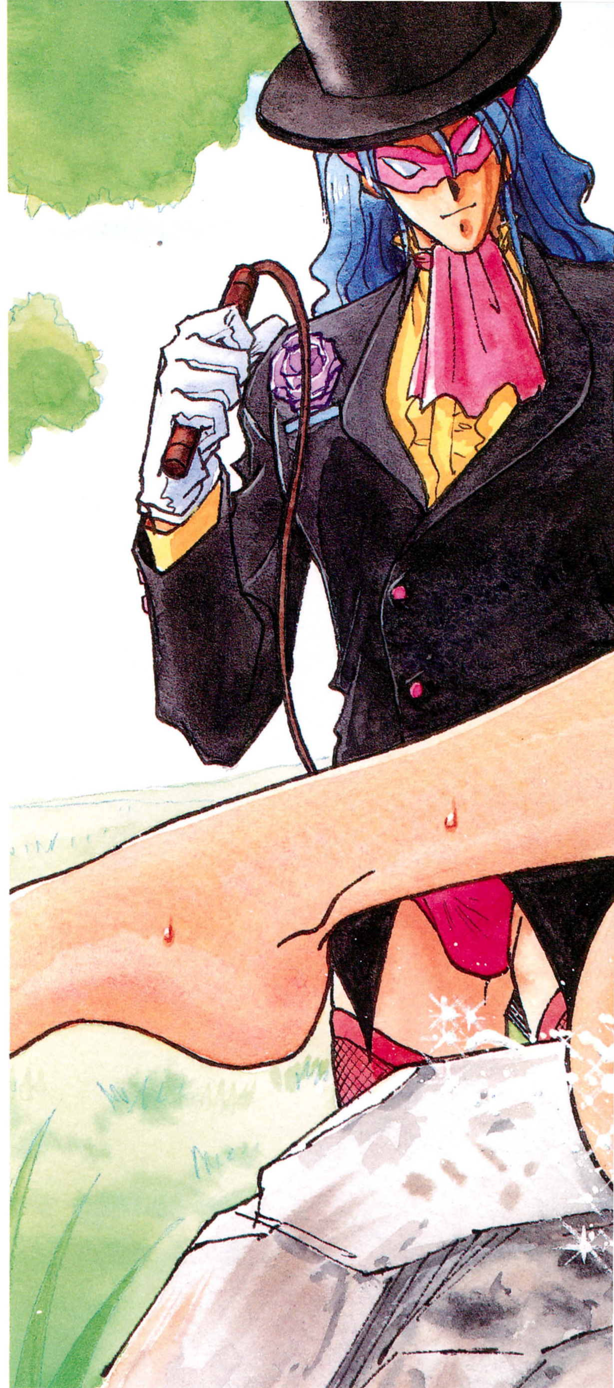
コンピューターRPGでは、マイキャラはいろんな行動をとって、レベルアップを繰り返し、アイテムを入手して、どんどん強くなっていく。その楽しみはテーブルトークRPGになってもそのまんまだ。それどころか、コンピューターRPGにはできないほど、無限に近い広がりを持ったゲームなんだよ。

プレイヤーは、それぞれ冒険者をひとりつくって、そのキャラクターを演じることになる。数人でパーティを組み、会話とダイス（サイコロ）で冒険を進めるんだ。

その一方で、シナリオを用意し、モンスターを動かしたり、ダイス判定などを受け持つ役も必要だ。このゲームでは〝エンジェル☆マスター〟（以下マスター）と呼ばれている。

つまり、テーブルトークRPGをプレイするのにはプレイヤー数人（この記事では4名）とマスターがひとり要るってわけ。

友達を集めないとできないのが難点だけど、多人数でわいわいとプレイする楽しさ、ダイスを振って成否を判定するスリリングさはやってみないとわからないぞ。



ン、記念すべき第1回目のはじまり。最初のシナリオはウォーミングアップっていう感じで、軽くショートにいってみようかな。

ちゃぷたー1　冒険のはじまり

キャラたちは、それぞれの動機から打倒ゼノスを誓って、故郷の村や町をあとにした。そして4人は巡りあい、ゾーンへと足を踏み入れていったのだ。

いま、一行が進んでいるのは、世界の東方に広がる〝リスカー山脈〟の山道。もうすぐ山あいの村〝アムニス〟に到着するはずだ。

マスター：アムニス村の道しるべがあるよ。で、立て札のそばに貧相な男が座り込んでいる。

シャルル：おお、ここがアムニス村か。よお、おじさん、景気はどうだい。

マスター：妙な一団が現れたので(笑)、ちょっとびっくりしている。「いや、景気も何も、村はいま大変なんじゃ」

パピー：やっぱり、邪神ゼノスの魔の手が伸びているんですか？

マスター：そうなんじゃ。村の若者の中でも腕の立つ魔法剣士フリントがモンスターにされてからというもの、奴らは好き勝手しほうだいなんじゃ。

ニャル：フリントってハンサム？

マスター：「そりゃあもう」

シュガー：どこに捕まってんの？

マスター：「あの高台にある館じゃ。もとは村長であるわしの家だったんじゃが……」

ニャル：そのへんの木にしゅたっと登って見てみます。

マスター：いちおう運動でチェックしてね……うん、よく見える。陰気な感じの館で、周りを茂みに囲まれている。それから、そこからだと村の様子もわかるよ。

ニャル：村に変わったことは？

マスター：さびれた感じだけど……お、ある家から娘が連れ出されようとしている！　2匹のゴブリンが無理やり。彼女は助けを求めてるようだが。

モンスター図鑑② コボルト



レベル：1　クラス：小間使い
変身前：山犬、野犬など

ニャル：たいへん！　ほかのみんなにそれを伝えるよ。すぐに行こう。

マスター：「また奴らが来たのか。助けてくだされ」

ニャル：まかせて！　行け、パピー!!

パピー：わをーん（笑）！

マスター：……ほどなく追いついた。ゴブリンたちはいやがる娘を引きずって歩いていく。ゴブリンはね、こーゆー子（といいつつイラストを見せる）。

パピー：むむ、かわいい。両方とも女ですね。でも、今は誘拐されそうな子の方が心配だな。やい、その子を放すんだ！　攻撃します。

ニャル：あたしは手裏剣を投げるよ。

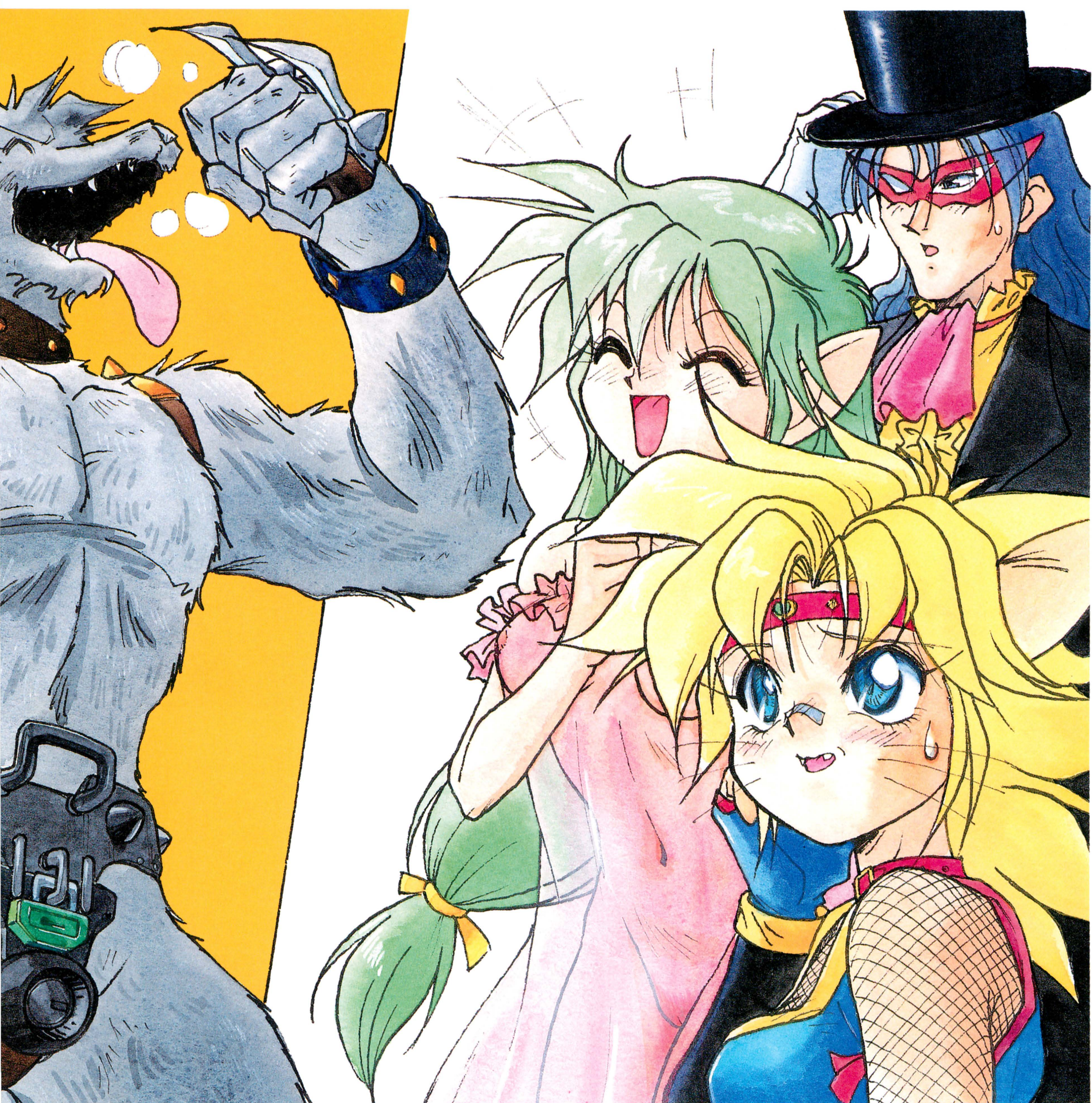
マスター：あうあう。放すんだとかいいつつ、すでに攻撃をしているな。えーと、ふたりとも攻撃は命中。シャルルとシュガーはどーすんの？

シャルル：ぼくは奴らの退路を阻むため、まわりこむ。

シュガー：えっとぉ、わかんない（笑）。

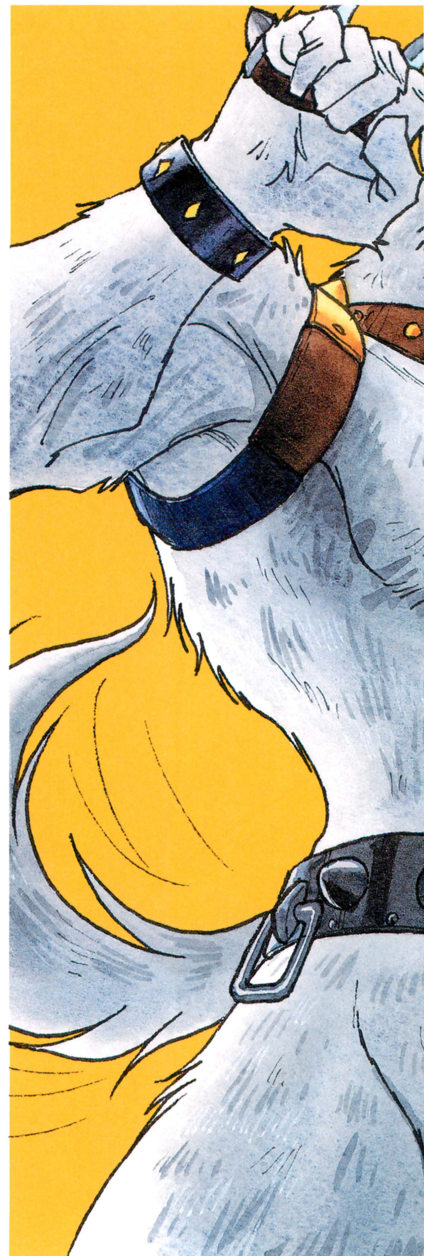
ニャル：ルールがわかんないのではなく、そーゆーキャラなんです（笑）

マスター：そーかー（笑）。ゴブリンの攻撃いくよ……村娘を連れてるからな……うーん、



やっぱしハズれた。ちなみに1匹は集中攻撃を受けてけっこう弱ってる。では次のターン。
パピー：弱っている方を押さえつけます。えっちしちゃる。
マスター：押さえつけは成功。続きは次のターンでね。
ニャル：村娘を引きはがして助けるよ。腕力に自信ないけど。
マスター：何とか成功。残った1匹は逃げ出しはじめた。
シャルル：ふふ、待ってました。気合いを入れて鞭でしばく！
マスター：ダメージ2倍か。これは痛かった。まだ逃げようとしている。
シュガー：逃げちゃダメー。電精召喚!!
マスター：おおお！　電撃を受けて、ゴブリンは黒コゲになった。
シャルル：ということは！
マスター：ゴブリンは煙をあげながら山猿に変身した。モンスターは攻撃を受けてHPがちょうど0になると、元の姿に戻るんだ。
シュガー：0をこえたりするとどうなるの？
マスター：死んでしまいます。ちなみに、えっちして元の姿に戻すという手もある。
シャルル：すべてのモンスターを元の姿に戻すっていうわけにもいかないかも知れないけど、なるべく多くの生き物を助けよう。
パピー：ようし！　捕まえたゴブリンを元の姿に戻してやります。
マスター：えっちするということね。「やーん、やめてよぉ」……ゴブリンはひどくいやがっているぞ。顔を引っかかれた。
パピー：がるるる。そうは言っても我慢できないです！
シャルル：まあまあ。ぼくが〝適性感知〟で見てみよう。……むむ、この子の適性はぼくに近い。とゆーか性愛方向が同じだぞ。
マスター：相性がピッタリだね。パピー、どうする？
パピー：しょうがない。シャルルくんに選手交替します。
シュガー：いーなー。ズルイズルイ。もー、見ててもしょーがないから、あたし、助けた子を家まで送っていくね。
シャルル：ラッキー。それじゃー、最初は軽く縛ってみよーかー。
マスター：ゴブリンは観念したようだ。君の縄さばき（笑）に逆らえない。
シャルル：蠟燭に火をつけて、目の前でちらつかせる。
マスター：「ひっ……」モンスターだけに火は怖い。おびえているようだぞ。
シャルル：ちょっとたらしちゃえ。じゅっ。
マスター：「あついっ」ゴブリンはたまらずおもらししてしまった。でも興奮しているようだ。
シャルル：じゃあ、アソコを指でいじくる。……む、漏らしたのはおしっこだけじゃないな。同時に胸ももんでみるか。
マスター：「あっ、あっ」と声を押し殺して耐えているぞ。もう時間の問題だ。
シャルル：ようし、このままフィニッシュだ。おもむろに鞭の柄をあそこに入れちゃう。
マスター：「！」ゴブリンはイってしまった。ぼわんとピンクの煙が立ちのぼって、人間の少女に戻った。ゴブリンの正体は猿かも知れないし、子供のこともあるんだ。
シャルル：よしよし、よかったな。
マスター：「おにいちゃん、ありがとう」この村の子のようだね。めでたしめでたし。シャルルはシャクティを獲得した。







ちゃぷたー2　ダークエルフの館へ

村娘を救った一行は、彼女に招かれて家に立ち寄った。そこでいろいろな話を聞くことになる。ちなみに、シャルルは原っぱでゴブリン少女とえっちしているので、まだ戻っていない。

マスター：「助けてくださって、ありがとう





ございました。あたしはネリーといいます」
……もう夕方になったので、ネリーさんは夕食をつくってみんなをもてなしてくれた。

シュガー：いただきまーす。ぱくぱく。ところで、ゴブリンさんたちは、もぐもぐ、どうしてあなたを、ごくごく、さらっていこうとしたの？

マスター：「多分、兄の……いえ、ダークエルフのフリント男爵の命令でしょう」

シュガー：えー？ よくわかんなーい♡

マスター：「数か月前のことです。兄のフリントは、麓に現れたゼノスのモンスターを成敗しにいくといったまま戻らなくなりました。そしてその数日後、ダークエルフに変身した兄は村に帰ってきて、村長の館を奪い、次々に若い娘をさらっていくようになったのです。

パピー：フリントさんは怪物にされてしまったんですね。ところで、男爵ってのは何ですか？

マスター：ゼノス軍団では、強いモンスターには称号が与えられている。男爵とか大佐とか姫とか博士とか社長とか(笑)。あんまし意味はないよ。ザコモンスターと区別するための肩書きだと思ってちょうだい。

シュガー：お兄さんはどんな人なの？

マスター：「村一番の剣士でした。みんなに慕われていたし、兄が怪物になってしまうなんて……」しくしく泣き出してしまった。ちなみに、居間の壁には彼の肖像画がかかってるよ。色白で細面、黒い長髪で、剣士というより吟遊詩人みたいに見える。

ニャル：いい男じゃん。ネリーさん、あたしにまかせて。必ずお兄さんを助けてあげるからね。

パピー：そんな安請合いしていいんですか〜、ニャルちゃん。

ニャル：うるさいわね。フリントを救えば、この村にも平和が戻るでしょ。モンスターと戦うのがあたしたちの使命なのよ！

パピー：ただえっちしたいだけなんじゃないですか〜？

ニャル：げし！(パピーに蹴りを入れている)さっそく出発よ！

マスター：ネリーは、「お待ち下さい。今日はもう遅いですから、明日になさっては？ お風呂もわいてますし、ね」と言ってるけど。

ニャル：うーん、でも明日行くにしても、ちょっと偵察しておきたいな。よし、パピーついといで！

パピー：わをーん！(ああ、完全に下僕と化している……)

マスター：あーあ、行っちゃったよ、あわて者なんだから。館はもと村長の家だったから、間取りとかも村人に聞けばわかるのに。

シュガー：わーい。おふろだおふろだ。ネリー、一緒に入ろ！

マスター：「えっ？ ええ、そうですね……お湯加減を見てきますから、お先にどうぞ」……しばらくして、ネリーがお風呂場に入ってくる。タオルで前を隠してちょっと恥ずかしそうだ。

シュガー：ういういしーねー。あたしはゆったりゆったり。満足ぢゃ(笑)。

マスター：「あの、お背中流しましょう」ネリーはシュガーの背中を流し始めた……「きれいな肌、ですね」……あれ、せっけんで手が滑ったのか、シュガーの身体のあらぬ所をまさぐっている。

シュガー：あん、くすぐったいよう。ネリー？

マスター：彼女は真っ赤になってうつむいている。「兄を助けてくださるのに、私には何のお礼もできません。だから……せめて……」

一同：わーい、レズっちゃえー。

シュガー：えー、するんですかー、どーしよう♡(キャラではなく、みずきちゃんの発言)

マスター：ネリーはシュガーをやさしく抱きしめてキスをした。

シュガー：胸とかおしりにさわったり、キスしながら言う。気にしなくてもいいの、うふっ、ネリーったらかあいい。

マスター：「シュガーさん……」彼女の全身はさくらいろに染まっている。もうネリーは、シュガーの指と唇のとりこだ。「きて……」

シャルル：ぼくはそろそろ戻ってくるぞ。おや、なんか風呂場から押し殺した声が漏れているな。ちょっとのぞく。

マスター：せっけんの泡の中で、シュガーとネリーのふたりが折り重なって、なまめかしくうごめいているのが目に入る。やがてネリーは短い悲鳴をあげて、くったりとなってしまった。

シャルル：何とうらやましい。ぼくも混ぜろ。窓から入ろうとする。



シュガー：ふう……きゃーっ！ ノゾキよっ！ とっさに魔法をかける。岩精しょーかん！

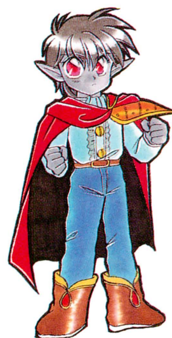
マスター：体勢の悪いときに魔法をくらった。シャルルは転倒して軒下の漬物石にしたたかに頭を打ちつける。2ダメージ。シュガーはえっちに成功したので、シャクテイを1だけ獲得。

シュガー：わーい。相手がモンスターでなくてもいいの？

マスター：獲得点は低いけど、当然そういうのもありだよ。

ちゃらら〜ん。というわけで、次の日。
館は案外小さなつくりで、ニャルフォードとパピーの偵察の結果によれば、モンスター

モンスター図鑑③ ダークエルフ



レベル：3 クラス：魔法剣士
変身前：エルフ(剣士フリント)



の数もそう多くなく、侵入に手間取ることもないと思われる。
一行は村人たちの声援をあとに、ダークエルフの館へと出発した。
植え込みをこっそり抜けて、高い塀の前まできたところだ。

ニャル：塀には仕掛けはないようね。あたしが最初に乗り越えて、ロープをたらすから、それを伝っておいでね。
マスター：パピーは成功。次にシュガーね。
シュガー：よいしょ。よいしょ。
シャルル：おおお！ 下からだとまる見えざんすー。らっきー。シュガーちゃんのはきれいなピンク色ざんすー。
シュガー：やーん！ えっちぃー。見ないでぇー。
マスター：……。（なにやってんだかなー、こいつら）
パピー：さて、入口はどこかな。裏口と正面玄関があるけど、どっちから入ろうか。
ニャル：敵に気づかれないように、裏口にしようよ。
パピー：いや、戦いやすい正面からです。
マスター：両者とも一理あるな。ここは知能で判定して、互いに相手を説得してみて。

パピー：知能ですか～、ガイウルフは頭悪いからな～。あ、成功した。
マスター：ニャルは失敗？ おー、パピーがニャルを説得できた。というわけで、君たちは正面玄関の方へ向かう。
ニャル：鍵は？ かかってる？ 鍵開けするね。かちゃかちゃっと。
マスター：成功。扉を開け、館内に侵入を果たした。玄関ホールは吹抜けになっていて、螺旋階段があり、天井からは質素なシャンデリアがぶら下がっている。正面には両開きの扉。
シャルル：まっすぐ進むと大広間でそこから地下室にも行ける。螺旋階段を登ると、バルコニーがあって奥に書斎があったな。どっちへ行こう？
ニャル：とりあえず聞き耳を立てる。
マスター：広間のほうから物音がするぞ。
シュガー：のぞきまーす。
マスター：エプロンをした小間使いのコボルトが4匹いて、忙しそうに食事の支度をしている。
パピー：こここコボルトー!? こっちにしましょう。さきに行きますよ。
シャルル：狼だけに、犬が好みなんだな（笑）。
ニャル：待ちなさいよ！ げしっ！（パピーに肘鉄） ここは敵のアジトなのよ。わかってんの？
パピー：いい痛いっすよ。でも地下室にさらわれた娘たちが捕まっているかも知れないし。
マスター：そうやってぐずぐずしているうちに、コボルトに気づかれたよ（笑）。何事かとこっちに向かってくる。
パピー：えーい、もうやるしかない。扉を開けて、いきなり奥義・群狼拳！ 敵1グループすべてに攻撃可能だ。命中、はずれ、命中、命中。
マスター：うーむ。強い。とゆーより、小間使いコボルトが弱いのかな。

コボルトどもとの戦いには、それほど時間はかからなかった。生き残ったコボルトは、情報収集もかねてパピーがえっちした。彼らは山犬の姿に戻って、山に帰っていく。

コボルトから得た情報によれば、村の娘たちはやはり地下室に閉じ込められているという。が、地下室の扉の鍵はフリントが持っているのだ。少女たちはフリントの慰み物になったり、麓にいるもっと強いモンスターの元に送られたりしているらしい。早く助けてあげよう。

パピー：ふー、たんのーしたです。うれしそーにしっぽを振っています。
シュガー：かわいー！
マスター：えっちに成功したので、シャクティをあげよう。
ニャル：地下室に行けそうな床蓋があるけど、開けられなかったよ。
シャルル：フリントを探すぞ。残った部屋は……やっぱし2階か。行こう。
マスター：2階に登って、書斎の前。君たちが近づくと、ドアの向こうから声がかかる。
「ふふん。よくきたな、冒険者たち。かわいい部下たちをずいぶんいぢめてくれたようだが、この俺はそう簡単にはやられないぞ」
シャルル：貴様がフリント男爵か。調教師シャルル・ド・カリオストロンの鞭をありがたくちょうだいするがいい！（笑）
マスター：「入ってきたまえ。勝負しよう」
パピー：飛び込むぞ！
ニャル：あー、こら。待ちなさい！ 罠があるかも……。
マスター：遅かったようだ。ドアの向こうの床には穴があいていて、パピーは1階へ落下していった。えっと……HPに9ダメージ。
シュガー：ズルイですぅ。シュガーちゃん、ぷんぷんよぉ。
パピー：ぐしゃ。しまったー！ さっきのえっちでけっこう消耗していたので、残りHPが1！
シャルル：しょうがない。ぼくたちだけで何とかしよう。パピーはそこで待ってるんだ。
パピー：くぅ～ん。おあずけ（笑）。
マスター：書斎のソファに細身のダークエルフが座っている。全身黒のレザースーツで、黒いマントをつけている。彼はすっと立ち上がり、マントをキザに放る。そして腰のサーベルを抜いた。戦闘開始ね。
シュガー：あ、〝水晶の目〟を取り出して正体を確認するよ。
マスター：うん、怪物といってもダークエルフは肌が青黒いだけで、あとはエルフにそっくりなんだけど。水晶の中のフリントは肌が白く、表情も穏やかだ。「なかなかの好青年じゃな。殺すのはモッタイナイゾ」と水晶の精がコメントしている。
シュガー：これって、しゃべる水晶だったのかあ。知らなかった（笑）。
シャルル：気合いをためて、この戦闘中のダメージを2倍にするよ。
ニャル：あたしは忍刀で攻撃だ。いけ！ ジャスティス・ブレイド！

……3人は健闘したが、かなりつらい戦いを強いられそうだ。

マスター：男爵も負けてはいない。ライトニングの魔法だ！ シャルルに6ダメージ。
シャルル：いってぇ！ さすがにボスだけあって強いな。長期戦は不利か。
ニャル：こうなったら奥の手！ しっぽ魔法のファイアボール！ ダメージは4。
マスター：敵はまだまだ余裕の表情だぞ。どうする？
シュガー：あたしもMPが残り少ないよう……夢精召喚を使ってみるね。この魔法で、う





まくえっちモードに持ち込めればいいんだけど。
マスター：う！　抵抗チェックに失敗。相手はその気になったようだ。
シャルル：ぼくもシュガーも、ＨＰ・ＭＰがわずかしかない。任せたぞ～。
シュガー：わーい、えっちだえっちだ。
ニャル：すかさず懐に飛び込んで、ソファに押し倒す(笑)。どう？　効いてる？
マスター：男爵は夢心地でニャルの健康的なふとももを愛撫し始めた。彼の性愛方向は技術。ニャルとぴったしだね。
ニャル：ニヤリ(笑)。フリントの服をゆっくり脱がせながら、うなじのあたりをなめる。猫舌でダメージ＋１だよね？
マスター：相手も負けてはいない。ニャルの胸をはだけ、力強くもみしだく。ＭＰにダメージ。
ニャル：あんっ、やだあ、抵抗すんの～？
マスター：そりゃボスですから。
ニャル：隠し持っていた催淫剤を口移しに飲ませちゃう。
マスター：くっ。性魔法をかける。インセクトストーム！　どこからか無数の蟲が現れ、ニャルの身体中を駆け回った。
ニャル：うひゃ～。気持ちよさそうだけど、想像したくな～い。今のは効いたわ。しょうがない。忍法四八手を試す。これで決めないと。
マスター：ニャルはしなやかな身体を使って、いろんな方向から責め、男爵を悦ばせた。かなり消耗してきたようだが……。
ニャル：どうすんの？
マスター：馬乗りになっていたニャルの腰を持ち上げ、自分のにあてがった。最後の勝負に出るつもりのようだ。「いくぜ」
ニャル：ん、いい……(笑)。望むところよ。
マスター：フリントのそれは、ニャルのなかに深々と突きささった。ふたりはそれぞれゆっくりと、そしてだんだんに激しくピストン運動を繰り返しはじめる。
ニャル：じゃあ、ファイナルアクションの《絶頂》を選択するね。
マスター：互いに残ったＨＰとＭＰを全部投入して差を比べ、さらにダイスによる判定をする。これで勝負がつくってわけだ。いいかい、同時にダイスを振るよ。コロコロ。結果は……ニャルの勝ち。「うをっ！」フリントはニャルの中で果てた。
ニャル：にっぽんいち～！　ぷるりん。ほほほほ(笑)。

戦いは終わった。冒険者たちはフリント男爵を倒し、地下室に閉じ込められていた少女たちを救出した。そして、村には平和が戻ったのだ。

エルフの姿に戻ったフリントは、麓のモンスターの情報を詳しく教えてくれた。

「麓の洞窟には、筋骨隆々なトロール・レディが潜んでいます。かなりスタミナがあって、えっちでは太刀打ちできませんでした。ニャルフォードさん、くれぐれも気をつけて下さ

い」
そして、村長ほか人々は冒険者たちに深く感謝して、礼金まで出してくれた。
パピー：ひとり50Gももらえました。これで貧乏から脱出できそう。
シュガー：ねー、ニャルちゃん、何か甘いものでも食べにいこーよ♡
ニャル：いいよーん。
シャルル：さあ、モンスターは待ってはくれない。出発しよう。
マスター：君たちはアムニス村をあとにした。ネリーがいつまでも手を振っている。「シュガーさーん、またいつか来てくださいねー！」
シュガー：はーい。平和になったらまたくるねー。
マスター：一行は麓をめざして、意気揚々と山道を下りていったのだった。……てなわけで、今日のシナリオはおしまい。
一同：みなさん、おつかれさまー。





ティーブレイク・コーナー
エンジェル☆インフォーメーション

パソパラCHAT創刊おめでとー！ あーんど『エンジェル☆クエスト』リプレイのスタートめでたいなっと(笑)。
このページは、エン☆クエのプレイに参加してるプレイヤーたちと、応援してくれる読者のみんなのコーナーなのだ。
お便りやリプレイ参加者の声のほか、次号からは、みんなが実際にエン☆クエをプレイできるように、システムやデータなんかもバシバシ載っけていくからお楽しみに！

おたより大募集！
エンジェル☆インフォーメーションでは、みんなからのお便りを募集するよ。リプレイの感想や、イラスト、モンスターのアイデアや登場させてほしいアイテム、そのほか何でも送ってね。宛先は
〒162 東京都新宿区早稲田鶴巻町543-7
NSビル2F
パソパラCHAT編集部エンジェルクエスト係

プレイヤー紹介&コメント

第1回ということで、キャンペーンゲームに参加してくれる4人のごあいさつ。そういえば、プレイヤーのみなさんにとって、エンジェル☆クエストのプレイは初めてだったわけなんだけど、どんなもんだったかな？ セッションを終えてから、ひとりひとりに感想や今後期待することなんかもあわせて聞いてみた。

L1忍ニャルフォード
プレイヤー：りゅうちゃん
久しぶりのプレイでした。エンジェル☆クエストは、自由度が高いので気楽にのびのびとプレイできました。技の名前とか世界設定がちょぉいとHで（笑）ドキドキしましたが、笑えてよかったです。
気心のしれたお友だちとワイワイ遊べるようなゲームになるといいですね。

L1調教師シャルル
プレイヤー：まなぶくん
上半身はタキシード仮面、下半身は変態仮面と呼ばれる出歯亀キャラをつくったのは私です。最近プレイしてなかったので、ちょっと頭をかかえてしまいました。でも、「天使探索」っていうよりも「天使蹂躙」というプレイをしそうな自分がキョワイ……。いやぁ、えっちRPGの今後が楽しみですね。

L1召喚士シュガー
プレイヤー：みずきちゃん
テーブルトークRPGをプレイするのは初めてなので、緊張してしまい、皆さんについていくのが精いっぱいという感じでした。でも、サイコロを振ったり、キャラシートに色々記入したり、何もかも新鮮で楽しかったですね。
次回はもっと積極的に行動してみたいと思っています。

L1格闘士パピー
プレイヤー：はいじくん
「若い女の子とHなRPGができるゾ」という誘い文句にすんなりついてきました。しかしプレイをやったのが、あまりにひさびさだったので思ったより羽目をはずした行動がとれなかったなー。今度は親方（シャルル）に負けずに暴れまくるゾ！ 狼の誇り高さを再現したいなー（ムリかな……）。

読者参加シミュレーション・ゲーム

娘々八国志





遂に始らんとする『娘々八国志』――これは、いわゆるシミュレーション・ゲームだ。それも、『三国志』とか『天下統一』みたいな〝国とりゲーム〟だと思ってほしい。プレイヤーがどこかの国の君主になって全国の統一に乗り出すってヤツね。

しかし、このゲームがふつうの〝国とりゲーム〟とひと味違うのは、これが読者参加ゲームだってことだ。プレイヤー(これを読んでいるキミのことだ)は国を支配する君主になるわけじゃないんだ。

そのかわり、プレイヤーは将軍か軍師の役を選んで、どれかの国の軍に参加することになる。

それぞれの国には個性あふれる魅力的な君主がいる。言わば、プレイヤーは、将軍か軍師になって、誰でもこれと見込んだ君主に仕えるんだ。

将軍は兵を持ち、国の戦力の要となる。さらに、大将軍となって他の将軍を含めた各軍団を指揮し、実際に戦闘を行なう。軍師は兵を持たず、作戦を立てて、それを君主に具申する。どこを攻撃し、戦闘にどれだけの戦力を投入するのか？　全軍の作戦行動を決定し、将軍たちを導く。

どちらの道を選ぶにしても、最終的に目指す目標はただひとつ。君主による全国の統一にある。

娘々八国志——プレイの仕方

ゲームに参加するには？　ゲームの内容



将軍と軍師

プレイヤーがゲームに参加するには、まず八国の群雄の中から仕える国をひとつ選ぶ。これでキミは選んだ国と君主に忠誠を捧げることになるんだ。

それから、将軍として仕えるか、軍師として仕えるかを選ぶ。

将軍は兵を持っており、君主の軍の戦力となる。戦力はこのゲームの基本となるもので、戦闘に勝つにはある程度の戦力が必要不可欠だ。将軍の数が少ないと必然的に軍の総戦力も少なくなり、戦闘に弱くなってしまうぞ。それに、一騎打ちなど、実際に戦闘を行なうのは将軍だ。とにかく、バリバリと戦って武勲を立てたいのなら、迷わず将軍を選ぶべし。

軍師は兵を持たず、戦力としてはまったく役に立たない。そのかわりに、作戦を立て、全軍の戦力をどう編成し、どう戦うかを決定する。全軍がキミの立てた作戦通りに行動し、戦闘を行なうことになるんだ。君主とそれに従う将軍たちの運命は、キミの立てた作戦にかかっている。戦力が多くても作戦がだめなら勝てないし、戦力が少なくても作戦しだいで勝てることもある。戦略家としてのキミのセンスが問われるところだ。

そして、将軍を選んだときには、将軍を作る。軍師を選んだときには、作戦を立てる。将軍の作り方、作戦の立て方は、後の「将軍の書」「軍師の書」のところに書いてある。ここをよく読んで応募のハガキを出せば、キミもすぐにゲームに参加することができるぞ。

ゲームの展開

ゲームは、本誌の連載一回を一年とし、一年は春夏秋冬の四季にわけられる。

さらに、この各季は以下のフェイズにわかれている。

① イベント・フェイズ
② 編成・移動フェイズ
③ 交戦フェイズ

イベント・フェイズには、さまざまなランダム・イベントが自動的に発生する。イベントは、数％の確率でどこかのエリアに発生し、支配国の軍の戦力と作戦に影響を及ぼす。たとえば、流言飛語とか新興宗教の蔓延によって戦力がダウンしたり、神の御加護を受けて戦力がアップしたりする。イベントによっては、移動、戦闘を禁じられることもあるぞ。

編成・移動フェイズには、国の総戦力が作戦に従って大将軍の指揮する個々の軍団に編成され、各目標に向かって移動を行なう。移動は、総戦力の低い国から順に行なわれる。

また、各君主には基本戦力としての近衛軍があたえられているが、近衛軍も作戦に従ってこのフェイズに移動を行なう。

全部の軍が移動を終えた後で、目標エリアに複数の国の軍が存在したばあい、交戦フェイズに戦闘が発生する。

戦闘は、大将軍どうしの一騎打ちと総力戦の二段階にわけて行なわれ、両方の戦力を比較したうえで、ランダムに解決される。その際、一騎打ちには大将軍個人の戦力（武力）を、総力戦には軍団全体の戦力を比較する。簡単な目安としては、戦力がまったく同じときには、どちらが勝つかは50％になる。片方が戦力でもう片方を上回れば、戦力比に応じて確率がアップすると思ってほしい。

そして、最終的に戦闘に勝ち残った軍がそのエリアを占領し、支配する。

支配するエリアがふえれば、国の勢力圏が広がり、君主が保有する基本戦力としての近衛軍の戦力も大きくなっていく。

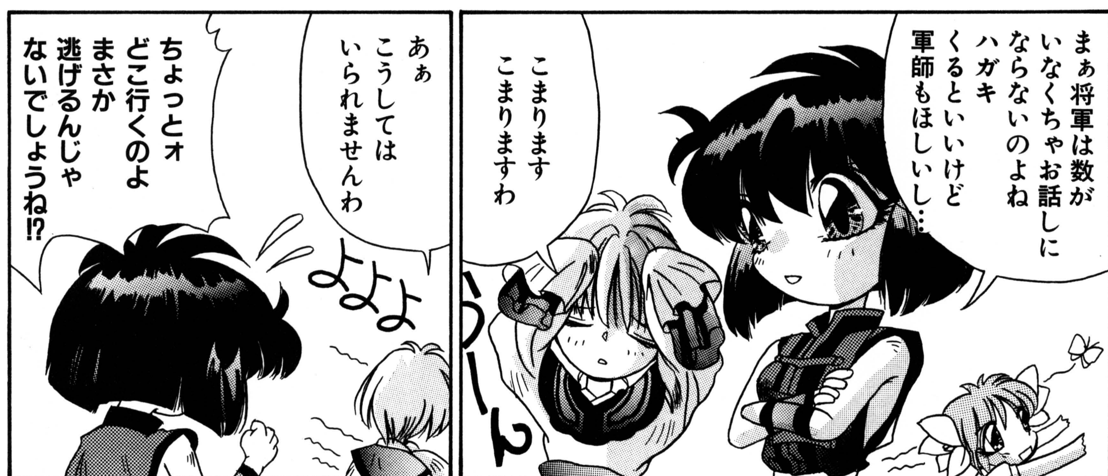
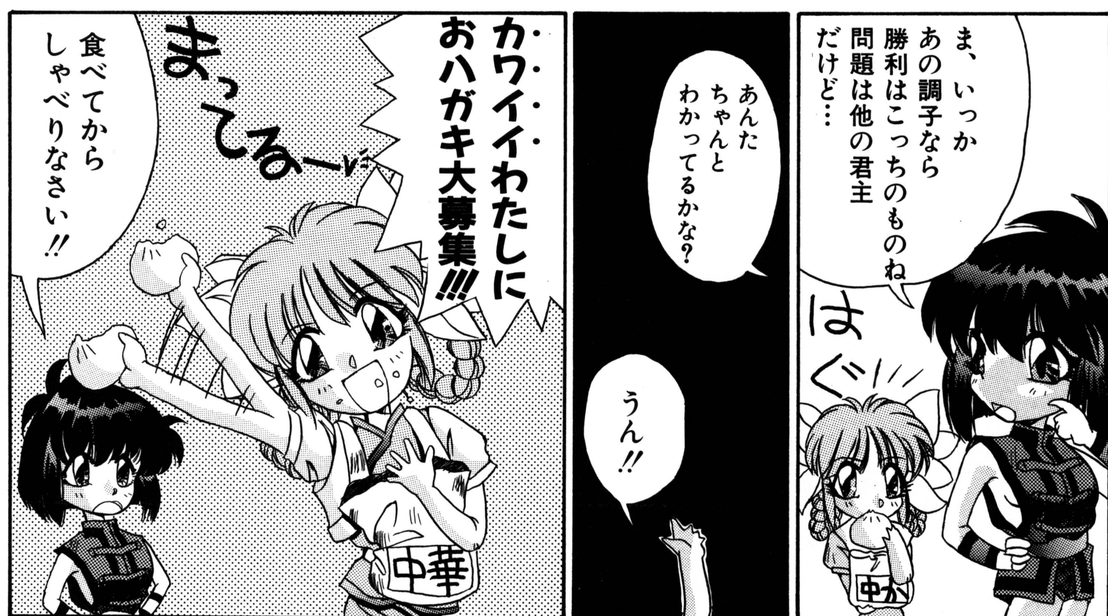
逆に、支配するエリアを全部失ってしまうと、君主は拠点となる国を失い、近衛軍すら失ってひとり大陸を彷徨うことになる。ただし、流浪の君主も将軍さえ集まれば、どこか他国の支配エリアを奪って、再び兵を挙げることができるぞ。

基本的なゲームの流れはこれだけだ。

一回のゲームが終わると、目覚しい働きをした将軍、軍師には、階級、アイテムなどの報償があたえられる。しかし、せっかく武勲を立てても運が悪いと戦死することもあるので要注意だ。それに、負け軍の軍師はたいてい処刑されてしまうので、よおく心得ておくように。





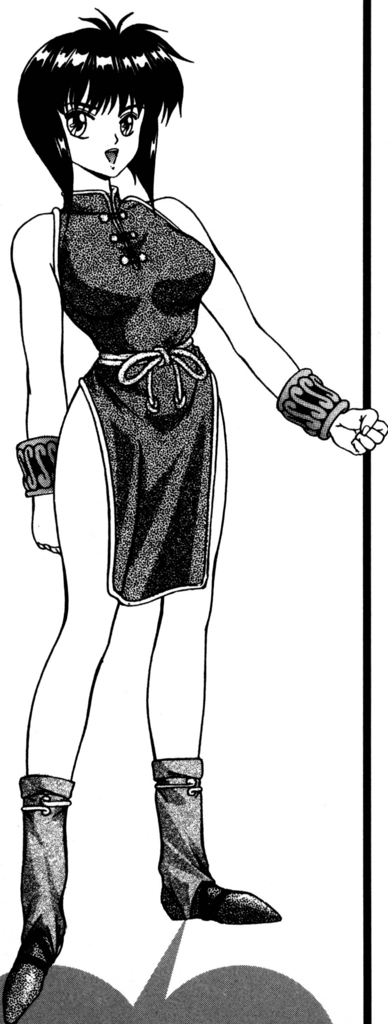

いやーーついに始まるわねわたし達の熱い戦い!!
はぁ～ビバノンノ～♪
あんたたち用意はできてんの？
アラアラアラアラ
やっぱできてないのね？
将軍も軍師もまだまだ数が足りませんのよ
くねくね
しっかり準備してるんじゃない…

まぁ将軍は数がいなくちゃお話しにならないのよねハガキくるといいけど軍師もほしいし…
うーん
こまりますこまりますわ
あぁこうしてはいられませんわ
よよよ
ちょっとォどこ行くのよまさか逃げるんじゃないでしょうね!?

ま、いっかあの調子なら勝利はこっちのものね問題は他の君主だけど…
はぐ
中か
あんたちゃんとわかってるかな？
うん!!
カワイイわたしにおハガキ大募集!!!
まってるーー
中華
食べてからしゃべりなさい!!

COMIC／福原興治

雷羅

武の道は我とともに

雷羅は達人級の腕前を誇る武闘家で、武芸百般に通じている。プライドが高く、ストイックな性格で、自分のみならず他人にもきびしい。ただし、アネゴ肌で面倒見はヨイ。カッとなって頭に血がのぼると、無謀、狂暴になるのがタマにキズ。正面から敵にぶつかって行き、最後まで戦うことを信条とする。

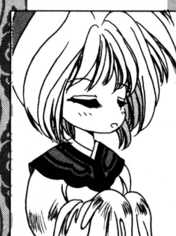


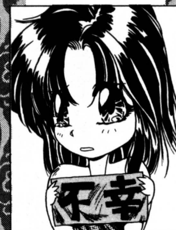
鈴花

明るくカワイく

鈴花はごくフツーの女の子。少しお調子者で性格が明るく、ノリがいいのが特徴だ。どことなく田舎者で、世間知らずの面もある。好きなものは、洋服、食べること、寝ること、入浴など。かつて見習い仙女だったとも噂されているが、真相は定かではない。八国君主のうち、最も野心に欠け、志が低い（笑）。





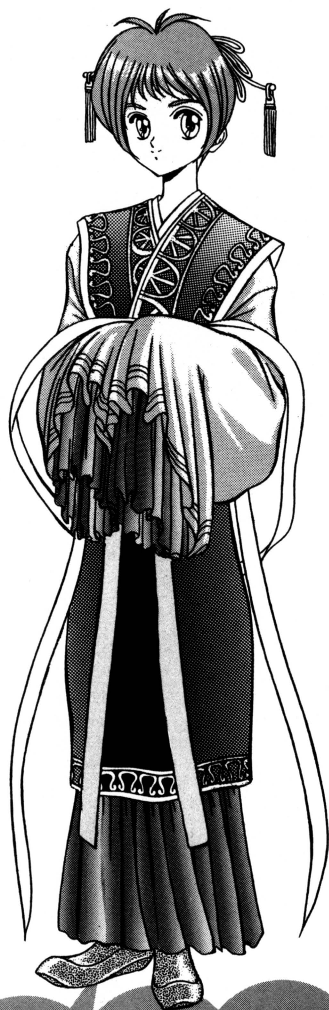




彩燕

光る知性、学師の鏡

彩燕はあらゆる学問に通じた学究の徒で、兵法の類にも精通している。とはいえ、博学の割に俗っぽいことには極めてうとく、ときに間が抜けて見えることも。性格は優しくおだやかで、控え目。暴力は好まず、不必要な戦闘は避けようとする。状況を分析し、最良の道を選択するのをよしとしている。



このような戦乱は実に悲しむべきことです。わたくしは人間の秘めたる知恵の光と仁徳の心を信じています。戦うしか他に道がなくとも、せめて早く戦いを終わらなくてはなりません。あなたも力を貸してくださいね。

ゲームマスター通信

どうもっ、『娘々八国志』のゲームマスター、七瀬流です。以後、ヨロシクぅ。
　ところで、実はこのゲーム、ポニーテールさんのパソコンゲーム『天仙娘々』、『エンゲージ・エランズ』からキャラクターをお借りしている（ただし、キャラクターは同じでも、内容はまったく違うゲームだけどね）。それだけに、元のゲームを知っている人なら、思い入れもひとしお、二重の意味で楽しめるハズ。
　知らないという人はいまから予習しておくのだっ!!





レイーヌ

美しき王女さま

レイーヌは遠い西方の某王国の血を引く王女さまだ。高貴な生まれなので、さすがに仕草は優雅で上品だが、態度は尊大で高飛車。しかも、性格はわがままで嫉妬深く、大の野心家。さらに、何か逆鱗に触れることがあれば、たちまち無慈悲なＳＭの女王さまに変身してしまう。奴隷になりたい人にはお薦めだ。



よくって？　高貴な生まれのわたくしには、玉座を継ぐ正統な資格があるのです。ましてや華麗にして美しく、聡明なわたくしが王となって支配するのは当然のことですわ。美しさこそ、不変の真実なのです。それをよく心得ておくことね。

ナルジス

豊満なボディの言葉の魔術師

ナルジスは南方から漂着した流浪の民で、生まれ育ちは謎につつまれている。特徴は、抜群のスタイルを誇るグラマラスなボディと、機関銃のように言葉をまき散らす達者な口先にある。強烈な悪口とウソで人をけむに巻くのが得意技。はっきり言って性格には難あり。神経も図太く、鉄面皮の見本と言える。

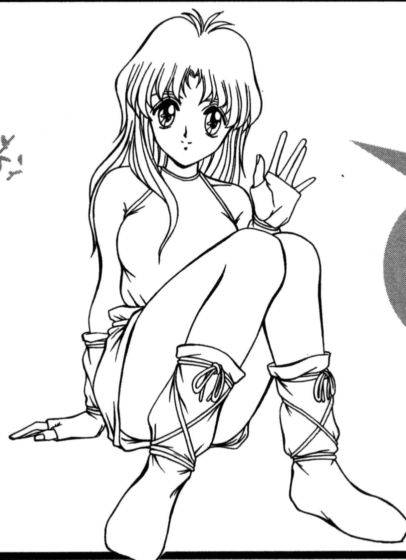


あらまあ、みんな揃ってお題目ばっかり。しらじらしくって涙が出るわ。本当は勝つためなら、どんなことでもするくせに。本音で生きてるあたしとは大違いね。わたしなら味方してくれれば何でも言うことを聞いてあげるけど、どうかしら？

美芳

全国一不幸な少女

美芳は全国一不幸な少女。赤貧にあえぐ大勢の家族と、ペット多数を、細腕ひとつで養っている。性格はケナゲながんばり屋だが、実は結構要領がよく、たくましいところもある。君主に名乗りをあげたのはよりよい暮らしを夢見てのことだが、貧乏からは逃れられそうにない。世間の風が身にしみる（笑）。

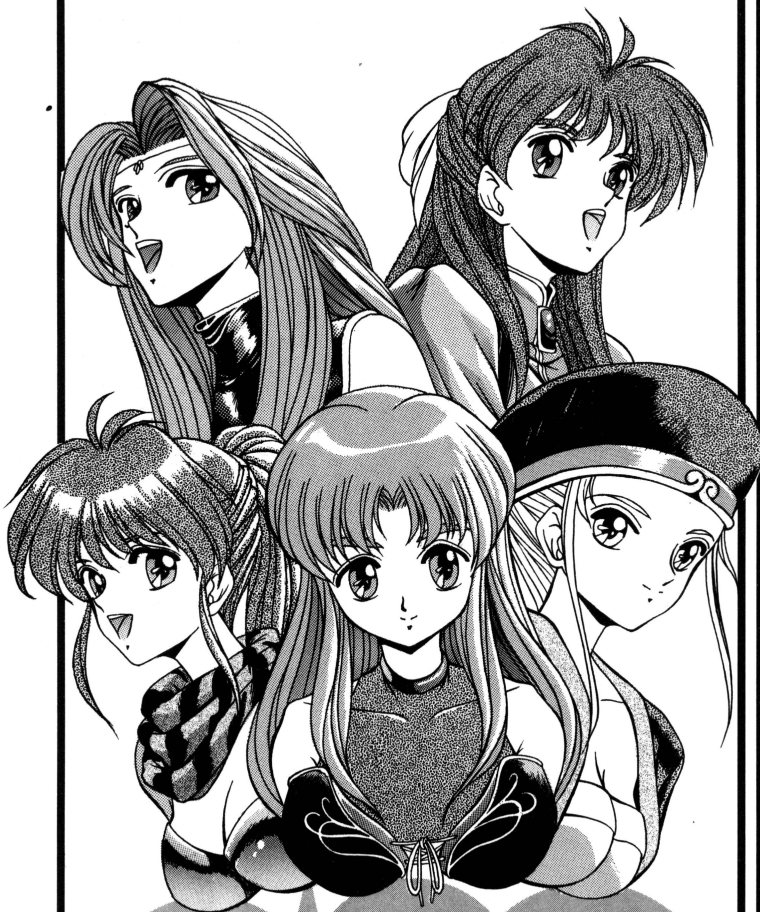


ウチは世界でいちばん不幸な娘や。神様は不公平や。ウチばかりに不幸を押しつけて。せやけど、ウチは負けへん。全国統一を成し遂げて、ビンボとはおさらばするんや。ただ、ウチにはあんただけが頼りなんや。お願いやから見捨てんといて。

エランズ12使徒軍

神に選ばれし12人の戦士

エランズは総勢12人の娘たちからなる大所帯。リーダーの重戦士のナスタシアを初めとして、騎士のジャネット、狩人のフェイ、剣士のアンナ、魔法使いのアリエッタなど、多芸多彩なキャラクターが揃っている。エランズは神から託された使命をはたすために他の世界からやって来た。その目的は、この世界に神の王国、楽園たるエデンを作り出すこと。しかし、どこぞのアイドル・グループよろしく、結構ミーハーだったりもする。

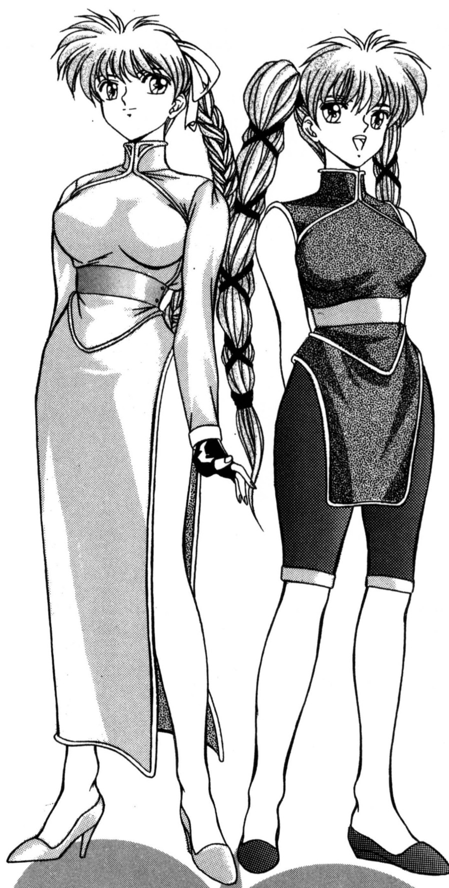


わたしたちエランズは、天界の神から遣わされた聖なる使徒。そうは見えないでしょうけど、全員が百戦練磨の戦闘の達人なので、甘く見ちゃダメですよ。わたしたちは、あなたの愛を必要としています。それは、愛がわたしたちの仕事だから。あなたの愛、わたしたちにください。

茉莉鈴 伽沙鈴

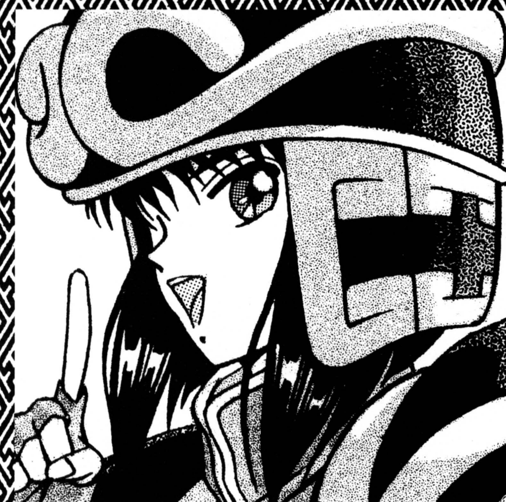
2人で1人の12の姉妹

茉莉鈴と伽沙鈴は双子の姉妹（茉莉鈴が姉で、ポニーテイルのおさげ、伽沙鈴は妹ね）。仲のよい双子にありがちなことに、どんなときでも必ずペアで行動する。性格もよく似ており、二人ともジュリアナのイケイケ娘そこのけの、ハデ好きの目立ちたがり屋。多少セコイところがあり、他の君主にイジワルをするのが趣味。



今度の戦いは、わたしたちツイン・シスターズがもらったわ！　スタイル抜群、挑発ポーズのダブルパンチで、どんな敵でもノックアウトよっ!!　さあ、束縛から自由になってパッションに身をまかせましょう。ああっ、体が熱いわ。

将軍の書



将軍は以下の四種類の能力値を有する。

★武力：将軍個人の戦闘能力を表わす。大将軍と大将軍との一騎打ちに重要。

★勇猛：どれだけ勇敢かを表わす。高いと積極的に戦い、武勲を立てる確率も高くなるが、それだけ戦死しやすくなる。低いと消極的にしか戦わず、武勲を立てる確率も低くなるが、戦死しにくくなる。

★人徳：将軍の人望を表わす。人望に5を掛けたものが将軍の保有する兵力になる。

★魅力：外見の美しさ（どれだけハンサムか、どれだけ美人か）を表わす。

また、将軍の武力に兵力を加えたものが、配下の部隊の戦力になる。

将軍を作るには、これらの能力値に10ポイントを自由に振りわける。ただし、各能力値には最低1ポイントを必ず振りわけなければならないので注意すること。

大将軍

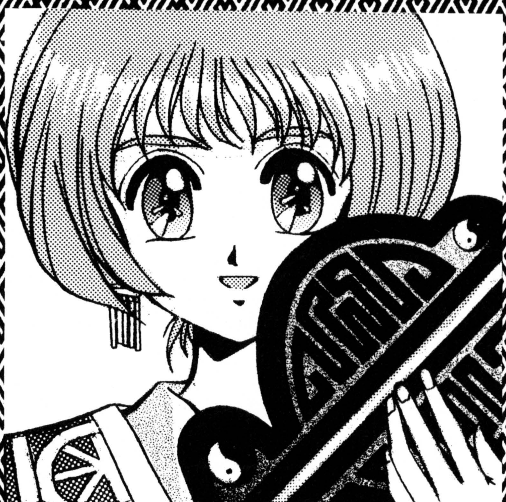
君主の下に集まって来た将軍（とその部隊）は、作戦に従っていくつかの軍団に編成される。その軍団の指揮官が大将軍だ。ふつう将軍は軍の戦力に組み込まれるだけで、武勲を立てるか、戦死するかしないと誌面に名前が掲載されることはない。しかし、大将軍になれば、必ず名前が掲載される。大将軍は実にオイシイ役なのだ。

大将軍になるには、各君主ごとに設定されている必要能力値をクリアしていなければならない。どの能力値が何ポイント必要かはあえて提示しないので、各君主のプロフィールとコメントをよく読んで、もとめられている人材とは何か推測すべし。そのうえで、条件をクリアしている将軍が多数いるときには、さらに抽選が行なわれる。

本当は一騎打ちのことがあるので、大将軍にはある程度の武力が必要だが、武力だけ高くても大将軍になれるとは限らない。

このあたりの選択がむずかしいところ。

軍師の書



軍師には将軍のような能力値はないので、軍師を選んだときには、軍師を作るかわりに作戦を決定することになる。

作戦は、まず全軍の編成を行なってから、各軍団が作戦を行なう季節と作戦目標を選択することで完成する。

★軍編成：総戦力をどう配分し、何個の軍団を編成するか。戦力の配分は1／10刻みで行ない、編成できる軍団の数は、第1軍から第10軍までの最大10軍団に限られる。

また、各軍団の戦力は、戦闘を行なうたびに、結果に応じて低下する（たとえ戦闘に勝ったとしても、数10％の被害が出る）。

君主が独自に保有する近衛軍は、軍団数の上限には含まれないが、それだけで1軍団として扱われるので注意。

★季節：四季のうち、各軍団の行動する季節。春夏秋冬から、ひとつを選択する。ただし、夏と冬は合戦に不向きな天候が続くことから、作戦を行なう軍団の戦力は自動的に50％に低下する。

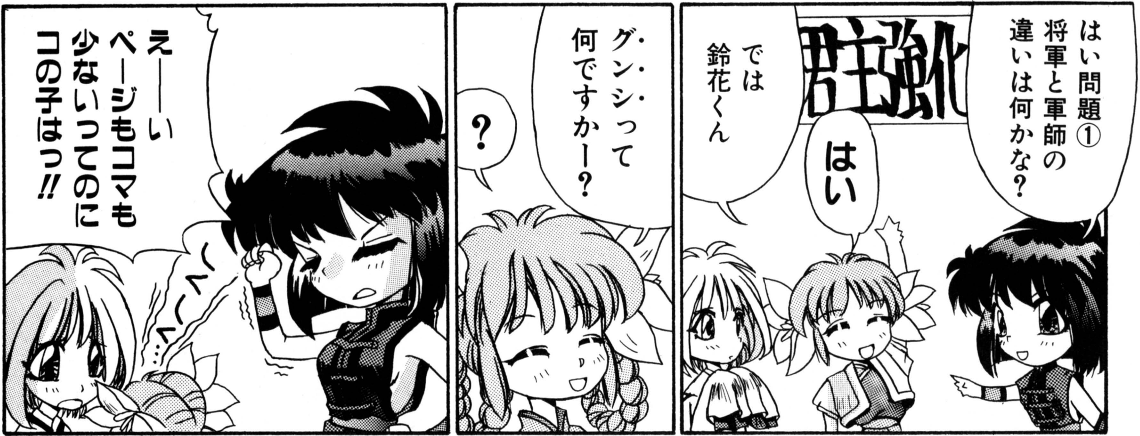
★作戦目標：各軍団が移動し、作戦を行なう目標エリア。戦略図のエリアナンバーから、ひとつを選択して指定する。

攻撃を行なうなら、空白の中立エリアか、他国の支配するエリアを作戦目標に指定する。ただし、目標エリアが自国のエリアと隣接している（国境線を接している）必要がある。隣接していないエリアを攻撃することはできない。防衛を行なうなら、自国の支配するエリアを作戦目標に指定する。

複数の軍団に同じ作戦目標を指定することもできるが、同じ季節に作戦を行なう場合、戦力はひとつに合計する。

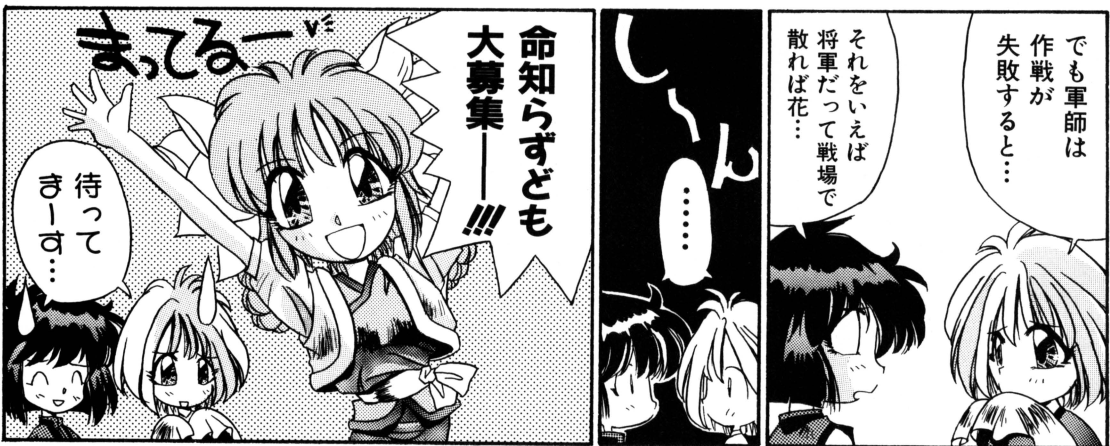
毎回、多くの軍師の中から、ひとりがランダムに選ばれて参謀に抜擢され、その作戦が実行される。しかも、作戦は、戦闘の局面に関わりなく、完全に実行に移される。

それだけに、参謀の作戦ひとつで、国の運命は大きく変化する。軍師は、そのことをよく覚えておくべし。


はい問題①
将軍と軍師の
違いは何かな?
君主強化
はい
では
鈴花くん
グンシって
何ですかー?
?
えーーーい
ページもコマも
少ないってのに
コの子はっ!!


軍師とは
全員の作戦を
すべて決定する
重要な人ですわ
軍師の作戦
しだいで勝敗も
ほとんど
決まりますのよ
どこにいってる!!
なかなか
わかってる
じゃない
彩燕
そして将軍は
戦場の花形よ


直接敵と戦うのは
将軍たちで
トキには敵の将軍と
一騎討ちしなくちゃ
ならない時も
あるケド
それだけに百戦練磨の
将軍には見返りも
大きいワケ
階級、アイテム、
もしかすると
♡♡♡とかね


でも軍師は
作戦が
失敗すると…
それをいえば
将軍だって戦場で
散れば花…
し~ん
……
命知らずども
大募集ーー!!!
まってるーー
待って
まーす…

応募の掟

応募の方法とハガキの記入の仕方



① 仕える君主を選ぶ

まずは、どこの国の陣営に加わるかを決める。初期設定の段階では、どこに参加しようが条件は同じ。好みの君主がいれば、迷わずその陣営に肩入れすればいいんだ。あえて人が集まりそうにない君主に仕えるのも、そのぶん名前が載りやすくなるから、意外に狙い目かもね。

② 将軍にするか軍師にするか

どの君主に仕えるかを決めたら、将軍と軍師のどちらで行くかを決める。もちろん、そうしたければ、両方のハガキを出しても構わないぞ。

③ 名前と性別を決める

将軍、軍師のどちらを選んでも、名前と性別だけは忘れずに決めておくこと。性別は、君主によっては重要な意味があるので、きちんと男か女のどちらかに決めるべし。

また、両方にハガキを出すなら、将軍と軍師の名前は必ず別にしておく。当然だけど、同じ名前でいくつもの国に仕えることもできないぞ。

④ 将軍を選ぶなら

将軍を選んだなら能力値にポイントを振りわける。能力値の割り振りしだいで、将軍の能力が大きく変わってくるから注意が必要だ。

特に大将軍の座を狙うなら、君主がほしがっている将軍がどういうものかよく想像して、必要と思われる能力値にポイントを多く振りわけておく。君主の性格や趣味がヒントになるハズだ。この必要能力値の基準をクリアしていないと、大将軍になることはできないぞ。

大将軍は望まず、とにかく君主に貢献したいというだけなら、配下の部隊の戦力が大きくなるように能力値を振りわけておけばいいだろう。

⑤ 軍師を選ぶなら

軍師の作戦は何よりも重要だ。作戦しだいでは、国が滅ぶなんてこともある。それだけに、先を見越したスルドイ作戦がもとめられるぞ。

作戦は、先に軍団を編成してから、各軍団に季節と作戦目標を選んでやれば自然に完成する仕組みになっている。ひとつひとつポイントを押えながら、確実に選択を行なうべし。

最大のポイントは軍団の編成と戦力の配分にある。それも、作戦を立てる段階ではどの程度の戦力が集まるかわからないんだ。大戦力の必要な作戦を立てるなら、予想に反して戦力が集まらなかったときのことを念頭に置いておくべきだろうね。

とりあえず、目下のところは戦端が開かれたばかりだから、それほど凝った作戦は必要ない。中立エリアを占領して支配エリアを拡大することを第一に作戦を組み立てよう。

⑥ 自由記入欄を記入する

ここには思ったことをキミの好きなように書いてくれ。将軍、軍師のイラスト、戦闘の際の決めゼリフ、君主に捧げる忠誠の言葉、行動方針(とにかく突っ込んで敵を斬り倒す、後方に留まり生き残りを心掛ける等)、キャラの設定など、どんなことでも思いつくまま書いてほしい。ささいなことでも必ずゲームに反映していくからね。

それから、実際のハガキの記入は、下の例を参考にするといいぞ。

記入の仕方

将軍用応募ハガキ記入例

娘々八国志　将軍登録ハガキ

1.陣営　仕える君主の名前をひとつ書いてください　雷羅

2.将軍の名前　自分の将軍の名前（12文字以内）　麗門

3.将軍の性別　男（○）　女

4.能力値　10ポイントを武力・勇猛・人徳・魅力に振り分けてください
（ひとつの能力値に最低1ポイント振り分けてください）

武力	5
勇猛	2
人徳	2
魅力	1
合計	10

勇猛に5をかける　兵力　×5＝10

戦力　15　＝武力＋兵力

5.国名　あなたの考えた国名を書いてください
君主　雷羅　の国を　修羅　と命名すべし

6.自由記入欄
オレさまがいりゃ百人力よ！
敵将軍の首3つはカタイ!!
ぜひオレさまを先陣に.

注意：このハガキには軍師のことは書かないでください

巻末ハガキを使ってね

軍師用応募ハガキ記入例

軍師登録はがき

1.陣営　鈴花
2.軍師の名前　司馬陵
3軍師の性別　男
4.作戦

軍編成		季節	作戦目標
第1軍	5／10	春	5国
第2軍	3／10	春	7国
第3軍	1／10	秋	2国
第4軍	1／10	秋	3国
近衛軍		春	5国

5.自由記入欄
何としてでも５国を落とすのじゃ。
７国はとれればラッキーかな？
わしの作戦に間違いはなあい！！
鈴花軍は大勝利じゃあ！！

官製ハガキを使ってね





投稿大募集

さて、ゲームの本格的なスタートを間近に控え、キミたちの将軍、軍師の到着を待って、各国の君主たちは早くもアツイ闘志の火花をバチバチと散らしている。全国を統一するのははたして誰か？これは、まったく目が離せなくなりそうだぞ。
というところで、お願いがひとつ。
麗しの美姫たちの戦いを盛りあげる、楽しい投稿を募集するぞ。
文章、イラストともに大募集だ。

★私設親衛隊

ここは、君主を応援するファンのためのコーナーだ。キミの大好きな君主に熱烈なラブコールを送ってくれ。われこそはと思う者は、君主を陰ながら支える私設親衛隊に名乗りをあげよう。キミの応援で君主の人気も高くなるかも。人気の高い君主はゲームでも戦力が集まりやすくなるぞ。

★わたしの将軍、軍師

キミの将軍、軍師を読者のみんなに紹介するコーナー。自慢の将軍、軍師の設定をドシドシ送ってほしい。カッコイイ奴、オマヌケな奴、アブナイ奴と、どんなキャラでも大歓迎。その点、ゲームマスター個人の好みから言うと、むくつけき男より、カワイイ女の子のほうが喜ばしいかもね。

★兵法の書

戦闘の常識を打ち破るとんでもない作戦を募集だ。こうすれば何が何でも敵に勝てるという、キミだけの秘策を教えてほしい。作戦とも言えないような、珍策・奇策の類、笑える作戦というのもアリだ。おもしろい作戦は表彰されるうえに、兵学者の殿堂入りの名誉もあたえられる。本当に優秀な作戦なら、キミのアイデアがゲームに採用されることもあるぞ。

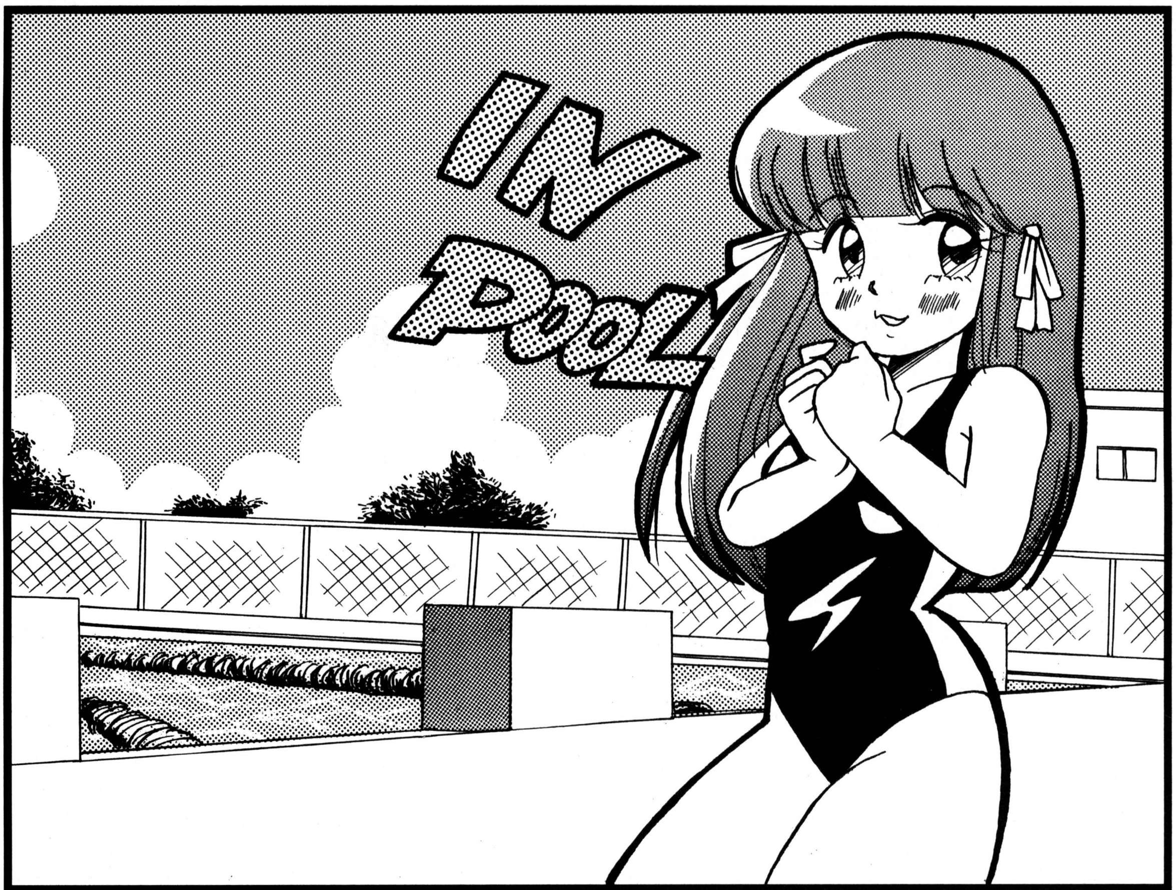
求む国名！

実は『娘々八国志』の各国にはまだ正式な国名が決まっていなかったりする。
そこで、八つの国に名前を付けてほしい。君主の性格と趣味にあったスバラシイ国名を送ってくれ。待ってるよん。



〒162 東京都新宿区早稲田鶴巻町543-7
NSビル２F
パソパラCHAT『娘々八国志』係まで

締切は12月24日(金)必着



創刊おめでとう
特別企画

同級生 舞ちゃん絵日記

ぶん・ゆうきまなぶ
え・かたぎりしょうぞう
きょうりょく・えるふ

♡8月12日(火) はれ

今日、「あの人」がプールに来たのでお話をした。「あの人」は用もないのに、なんで学校にくるのかしら？もしかして舞に会いにきてるのかな？ どひ～恥ずかしいよぉ……。でも、「あの人」は舞のことをどう思ってるんだろう？ いつも優等生のふりをしてる舞のこと嫌な女だと思ってるのかしら。「あの人」や健二くんみたいに話しかけられると舞もおしゃべりになるのに……。

あ、またいつもの消極的な舞になっちゃった。とにかく、舞もみんなと打ち解けて話せるようにならなくっちゃ。がんばっ！

♡8月15日（金）はれ のち くもり

「あの人」のマンションに行っちゃった。お稽古に行く途中にちょっと寄り道したんだけど。そしたら、「あの人」がちょうど帰ってきて……。あぁ恥ずかしい。あがっちゃって、舞なんかわけのわからないことしゃべっちゃったような気がする。反省。

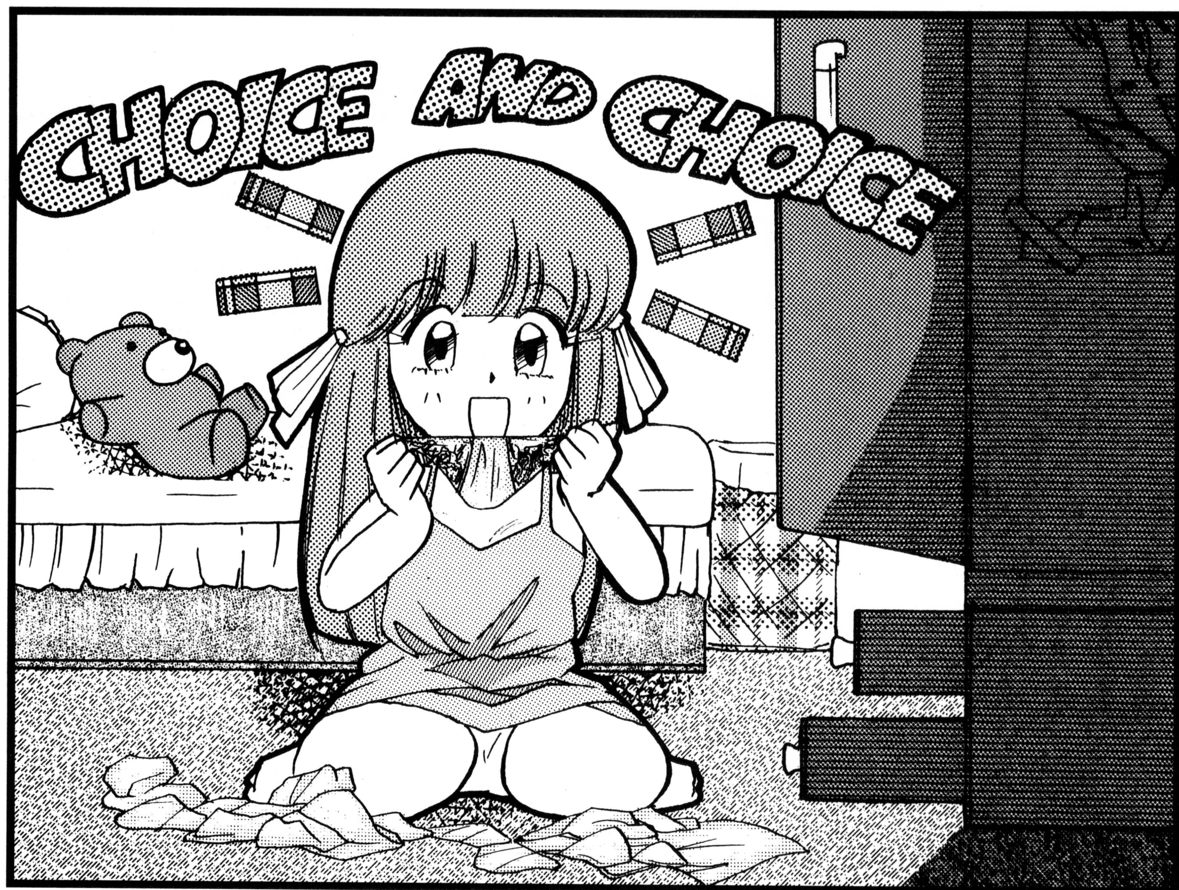
だけど、「あの人」の自由なところは舞と正反対。常識や自分の枠にとらわれないで行動できるなんて、ちょっと尊敬しちゃうな。結局、舞はパパやママの望んだレールの上を走ってるだけなのかも……。「あの人」なら舞を束縛から解放してくれそうな気がするんだけどなぁ。

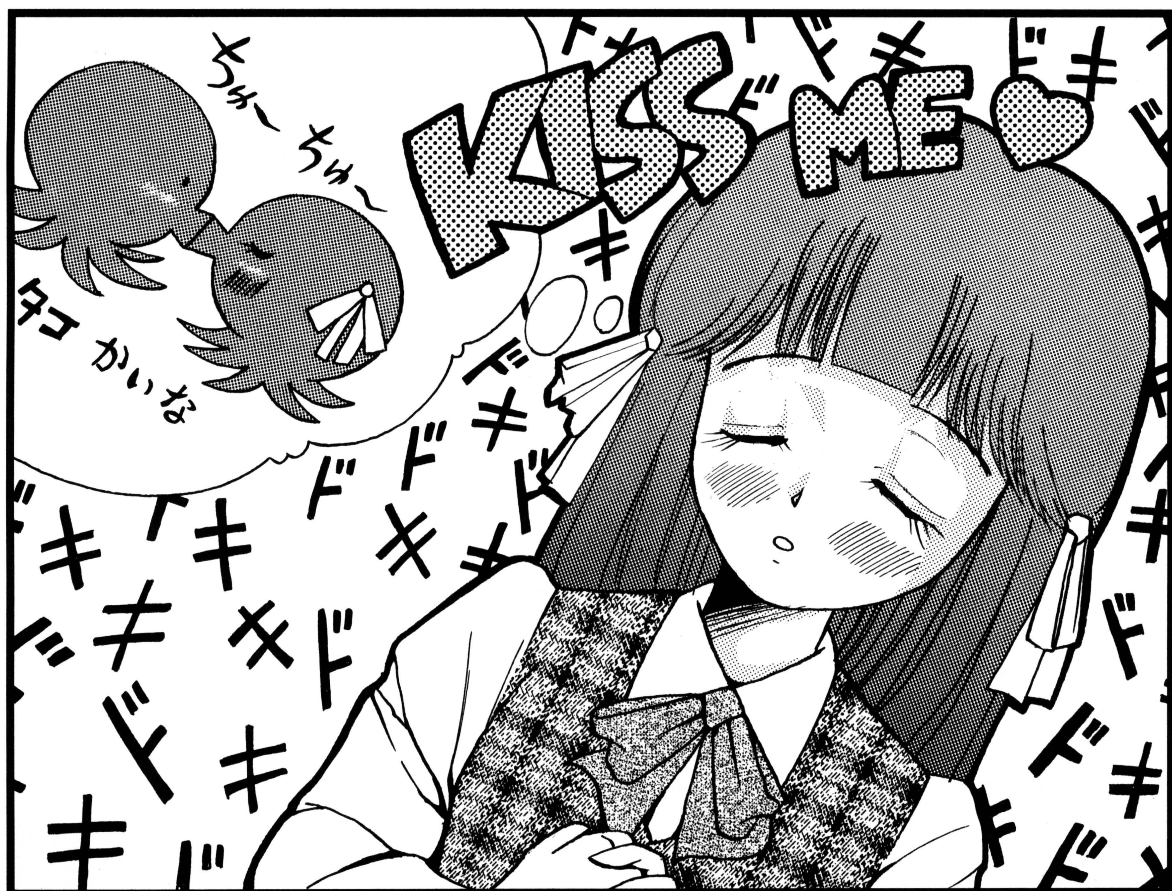
♡8月18日（月）はれ、はれ、はれ！

なんと大事件！「あの人」がデートに誘ってくれたの♡生まれてから17歳と9か月で初デートかぁ。舞もいいかげん奥手だなぁ。

今度の日曜日、10時にあの（！）矢吹町の遊園地。でも、遊園地屋の娘だってこと知られたらやっぱり舞のこと特別視するのかなぁ。そんなことないわっ！「あの人」はそんなことこだわる人じゃない！

もしかして、たいへんなこと（エヘヘ）になるかもしれないから、今から下着とかリボンとか選んどかないとね。とにかく24日が楽しみ（うふふ♡）





♡8月24日（日） はれ のち どしゃぶり

今日は楽しいデート♡ってことを書こうと思ったんだけど、もう、最悪。天気と同じ、今の舞の気持ちはどしゃぶりの雨。

デートした遊園地の入場口で、パパの秘書に見つかっちゃったの。その場はうまく逃げられたんだけど、パパにしっかり報告されちゃって……。もう、後は地獄。

「あの人」のことを根掘り葉掘り問いただされて、あげくには、「あの人」とつきあっちゃいけないって……。

パパのバカっ。

「あの人」のこと、なんにも知らないのに。なんであんなひどいこと言えるの！

明日から、ひとりでは外出禁止になっちゃった。あぁ、「あの人」に会いたい！　電話もできないなんて。

でも、今日のデートは、舞、一生忘れない！

遊園地なんて大嫌いだったのに……。あんなに楽しいところだったのね。「あの人」はやさしくて……。や、やだっ！　思いだすだけで恥ずかしい。怖いの嫌いなのに、調子に乗ってお化け屋敷になんて入るんじゃなかった……。うそ、うそ、ほんとは舞も望んでたことなの。そう、はじめてのキス。怖くてしがみついた時にキスするなんて反則！　でも、すごく素敵だったわ。「あの人」の強引なところが舞には心地好いの。

♡8月27日(水) くもり

最悪なタイミング! 舞はとうとう失恋してしまいました。もう、ぜんぜんダメ!

お目付け役の健二くんの目を盗んで、「あの人」のところに行こうとしたらバレちゃって(舞のドジっ!)。そしたら健二くん、強引にホテル(しかもラブのつく)に連れ込もうとするなんて! 最悪なのは、偶然通りかかった「あの人」にそれを……ラブホテルから出てくるところを見られたこと。あぁ舞のバカ! なんであの時弁解しなかったの! もうダメ。今夜は「あの人」のことを想ってひとりで自分を慰めることにします。クスン

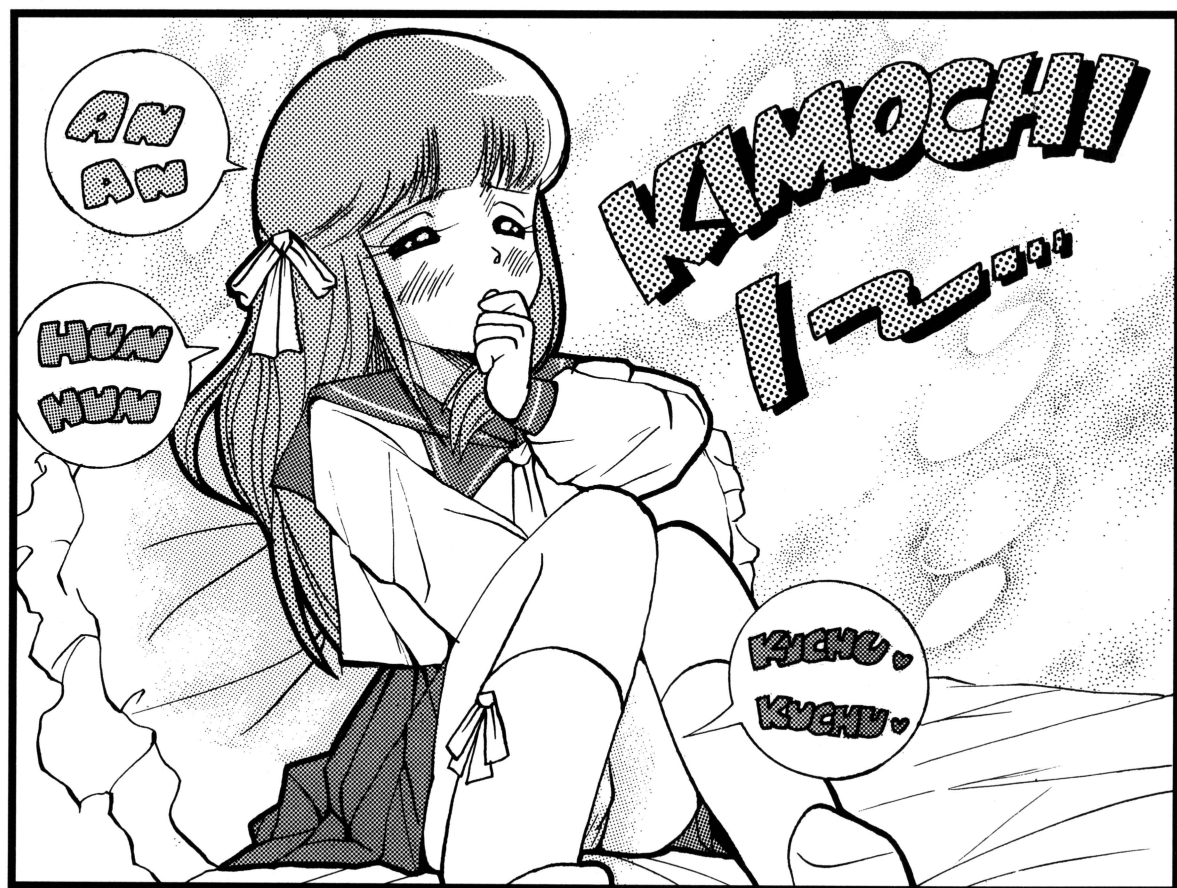
♡8月29日(金) くもり のち はれ

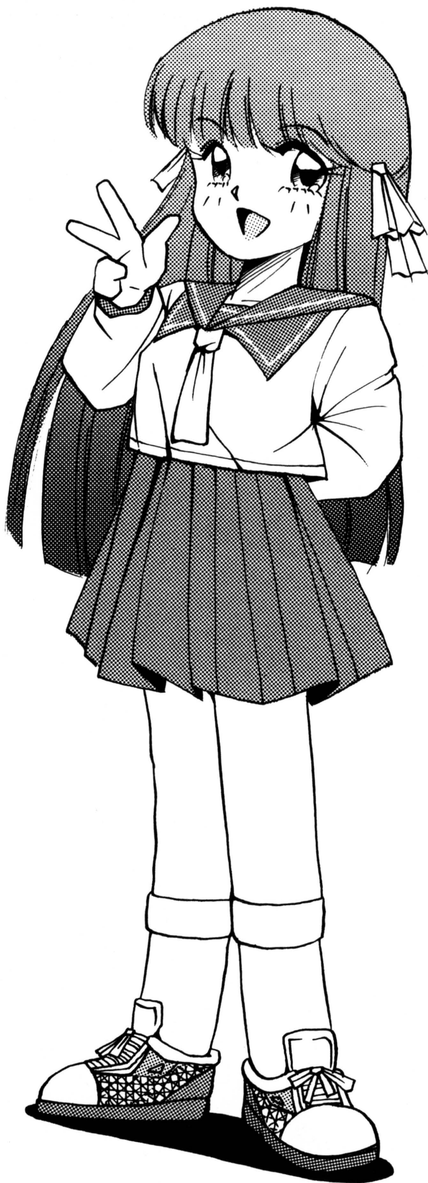
今日(といっても書いてるのは翌日なんだけど)舞はついにオトナになりました。最愛の、「あの人」に抱かれて舞はとってもしあわせです。

パパ、ママごめんなさい。舞は不良になってしまいました。でも後悔はしてません。

舞のこと、ほんとに大切に思ってくれてるなら、きっとわかってくれるはず。それに「あの人」の良さも、もっともっとおつきあいすれば、わかってくれると思うわ。

舞、がんばっ! しあわせはみずからつかみ取るものなのよ!





どうだった？
ちょっと恥ずかしいけど、これが舞の夏休みの「体験」。
この後、舞はパパとママを説得して「あの人」とつきあう
ことを承知させちゃった。
パパとママもやっと、子離れができて舞もホッとしてる
とこ。あれっ、ちょっとえらそうだったかな？
とにかく、これからクリスマス、正月、バレンタインデ
ーとイベント続きだから、後悔しないように男の子も女
の子も積極的に恋をしようね
じゃあ、みんなもがんばってね！　バイバイ

■結城の独り言

今回はエルフさんに無理を言ってこういう企画をさせていただきました。エルフさんのソフトはグラフィックもさることながら、ストーリー、つまりシナリオがすごくいいんですよね。シナリオを書いていらっしゃる蛭田氏は本当にセリフ回しがうまいし、キャラクターを立たせる技術は、結城などの及ぶところではありません。

僭越ながら、蛭田氏のシナリオの特長を述べさせてもらえば、序盤ではあまりエッチシーンにいきません。というより、序盤は人間関係を把握し、シナリオの核心への複線を用意するという役割を担っているのです。そして中盤は、キャラクターひとりひとりが主人公と関わりながら自分を印象づけていき、終盤にすべてが関連をもってひとつのストーリーを形作ります。

当然、エッチシーンは終盤にかけて多くなり、ドラマチックなエンディングの直前には、ほとんどの人が満足できるほどになるのです。

だから、エルフさんのソフトは絶対最後までやってください。さらに言えば、本文のシナリオをとばさないで、きちんと読んでください。これ結城からのお願い。



▲パソコンソフト『同級生』の舞ちゃん。竹井正樹画伯原画の美しいＣＧだ

■片桐荘三の言葉

竹井先生の描くキャラクターは可愛くてしっかりしているから、自分の絵にディフォルメするのは仲々苦労しました。おかげで全然似てナイ…(笑)。これからも、舞ちゃんに負けない素敵な女の子で我々を楽しませてください。

舞ちゃん絵日記



ポリリンのHゲーム大好き！

GAME1 あゆみちゃん物語

by あかほりさとる





というわけで、今号からHゲームのエッセイを書いてしまうお下品作家のあかほりだ。パソパラCHATからは好きなこと書いてくれとお墨付きをもらっているので、好きなHゲームについて、好き勝手に書いてしまおうと思っているのである！ ここでパソコンHゲームに関して意見を述べるのは私の天の与えたもうた使命と言えよう！（実は好きなHゲームが借りれるので、この仕事を受けてしまったのだ）

さて、記念すべき第一回目に当たっては、かなり感動してしまったアリスソフトの『あゆみちゃん物語』について述べてみたい。

だいたいHゲームなぞというものは究極的な目的は男のチンチンを立たせることであり、そこにゲーム性やらストーリー性が入ってきて、名作などと言われたりするものである。そういう意味で、あの希代の大名作『ランス』は存在するのだが、かのアリスソフトはその『ランス』と対極的に位置するこの作品を作ってしまったわけだ。だからといって別に『ランス』に対するアンチを提示しているわけではない。どちらもやはり、

「男の心をそそりまくる」

という一点ではまったく別方向からアプローチし、ここに至ってしまったというわけだろう。

さて、『あゆみちゃん物語』のコンセプトは、これはもうただ一つ——「やる！」

やって、やって、やりまくる！ 体力尽きてもさらにやる！ ——てなもんで、主人公の精力とチンチン本体の強靭さにはっきり言って脱帽した。私も十代のころはそのくらいがんばれたもんだけど……最近は体力ないんよ！

そして『あゆみちゃん物語』のもう一つのポイントは〝成長〟！ 言いかえれば〝調教〟か。

最初は純粋無垢でキスすることすら恥じていた「あゆみちゃん」が、やがてバイブを知り、縛りを受け、ついにはアナルまで開発されてしまうという、こりゃもうたまりまへんなぁ！ 言ってみれば男の夢がここにすべて凝縮されているといっても過言じゃなあいっ！

それにしても、アリスの少女たちは、『ランス』のシィルにしてもこのあゆみちゃんにしても、身体は開発され尽くしても、心は決してスレることなく、健気だ。ここに私はアリスのハニー大王こと多田氏の娘に対する愛を感じるのだが……ホントのとこ、どうなんでしょうね、多田さん！？

ところで、OVAの『ランス』の脚本は私が書きました。ストーリーとギャグに関しては自信あるのだが、出来上がりを見てないので、現段階ではどうなったかよく知らん！ 見た人は感想をパソパラCHAT（パソパラ本誌でも可）まで送るように。





あだるとと若大将の成年コミック（あやしい大国）コミックランド

おっす！　ちぃと気が早いが、あけましておめでとう!!　みんな、コミックパソコンパラダイスは読んでくれているなぁ？　俺は、パソコンのアダルトソフトを遊び続けて十数年の「あだるとと若大将」である。

初めてお目にかかる人も多いかと思うがこれからもよろしく頼む！

こっちでは、成人コミックの紹介をさせてもらうゾ！　「あだるとと若大将」の名に恥じない内容にするからな！　え、どういう意味かって!?　それは、好き勝手ヤラしてもらうってコトだ！　はっはっは!!　コミパラ読者ならわかると思うが、俺の文章は突っ走って、どこかにいってしまってることが多い！　読みにくいやつぁ、読みとばしてくれ。いやぁ、テマかけるな。じゃあ、手間かけついでということで、美少女漫画歴というものでも少し……。

俺が「美少女成人コミック」という物に出会ったのは、中学生の頃……。読んだ本はレ○ンピープ○であった。それまでは、道に落ちている劇画エロ漫画だったら読んだことがあったのだが、レモ○○ープルはそれまでとは違う、劇画ではないエロ漫画（という表現が正しいかどうかはわからんが）だったのである。かなりのショックを受けたなぁ。もうどんな漫画が連載されていたかは、記憶の彼方にとんでしまっているが……。今思えば、懐かしい若かりし日の思い出ってトコかな。

それから、いろんな成人コミックを読んだ……。パソコンのあいまに読む、寝る前に読む、ヒマな時に読む……。パソコンソフトより安いので、とどまることを知らなかったなぁ。とにかくいっぱい読んだ。

そんな中でのほんの少しではあるが、記憶に残る本の紹介をしようというのが、このコーナーなワケだ。

古いモノから新しいモノまで、いろいろ紹介していくつもりなので、最新ではないけれども、かなり有意義な情報のハズだ。参考になれば幸いである。

さて、ちと遅くなったが、今回の本だゾ。

まずはＷＩＮＧ☆ＢＩＲＤ著『お姉さまとお呼び♡』それと雅亜公著『ドッキュン♡はーと』である。２冊とも、フランス書院のコミック文庫である。しかも、かなり古い。だが、良いモノはヨイというコトで、あえて選んでみた。

『お姉さまと……』はシーメールものである。かなり好き嫌いが出ると思うが、いいんだよっ！　俺が好きなんだからっ!!

『ドッキュン……』の方は描き下ろしというコトで、かなり読める漫画。すごくハードだしな。う～ん、思い出しただけでもうびんびんである。持ってないやつぁ、探して読むんだゾ。

コミック文庫シリーズは、小さいし値段も手ごろでお薦めである。あえて難点をあげれば、コマが小さくなってしまうコトか……。気にならねぇと思うけどな。

今回は、だいたいこんなモンである。まだ、俺様の片鱗さえ見せられなかったが、次回は、ふふふ……。

んじゃま、またこのコーナーで、みんなあおうぜぃ！



お姉さまとおよび

WING☆BIRD
フランス書院
450円



シーメール物を中心とした短編集。女の子にそそり立つ「モノ」が卑猥でよいぞ





カット／風雅うつら

ドッキュン♡はーと

雅亜公
フランス書院
450円



悪魔との取引で、女運が良くなるという話。これだけヤレるんだったら考えちまうな。

結城学の らんだむ行動隊



◀あかほりと声優の皆さんの記念写真。ピンボケはすべて結城が悪いんです……（本文参照）

はじめまして、結城学です。このコーナーはパソコンソフトやコミック以外のジャンルで（そのあたりは別の方がやるようです）パソパラCHATに関わる情報を伝えるということを（表向き）目的としたものです。さて、第1回目はオリジナル・ビデオ・アニメ『ランス』のアフレコ取材です。



◀ランス役の矢尾（バスタード）一樹さん。とてもさわやかなナイスガイでした。服はうす紫のチェック柄！

■びでおランス録音の取材に行く！

一九九三年十一月九日、ビデオ版『ランス』のアフレコがあるというので、結城は新宿近くの録音スタジオへの道を急いでいた。アポイントメントの電話の時「進行状況にもよりますが四時には必ず来てください」と言われていたが……なんと四時五分！　しかも、おかしいことに目印になるタバコ自販機も○○クリーニング屋もない。え～と地図を見ると……。なんか大きく通り過ぎたみたいだ。「おたんちん！　地図も読めないような子に育てた覚えはないよ」ふいに母の声を聞いたような気がした。結局スタジオについたのは四時二〇分。まだ、インタビューは始まっておらず、ほっとしたところに、あかほり先生のにこやかな笑顔があった。ちょっとだけ天使の存在を信じた。

ドタドタッ！　あっテレコ落としちゃった。メモするための手帳忘れた……。なんてドジッ！

いよいよ声優さんの写真撮り&インタビューが始まる。カメラを取り出す結城。こんどは落とさないように……。うぎゅえっ！　なんだこれは……望遠？　そう、結城は編集部でカメラを借りる時、普通のズームではなく望遠ズームを持ってきてしまったのだ！　でもなんとか写真をパチリ。

矢尾一樹さんと岩坪理恵さんのインタビューが始まった。矢尾さんは、ランスみたいに鬼畜な行動を、もしやれるならやってみたい、などと過激な発言。Hゲームは両人とも、面白そうだけどやったことがないということです。

さて、ビデオの内容はというと、ランスとシィルはバトゥの村長アニーに頼まれて山賊「ブルースコルピオン」を倒しにいくのだが……以下略。

例によってランスは鬼畜なイイ性格してるし奴隷のシィルも健在。えっちシーンもあるし、ギャグのテンポはいい。しかし、ランスがゲームのような二枚目ではないというところが残念……。ビデオとゲームは違うってことで結城は納得した。でもシィルはカワイイ♡



ランス　砂漠のガーディアン

通販専用OVA　一二〇〇〇円（三〇分一本）

脚本：あかほりさとる　演出：本谷利明、富永恒雄　キャラデザイン／作画監督：小林明美　美術監督：長尾仁　音楽：武井浩之



◀シィル役の岩坪理恵さん。とっても明るくて、しかも可憐なシィルのイメージも合わせ持ってます

あかほり先生よりプレゼント　詳細は一二四頁

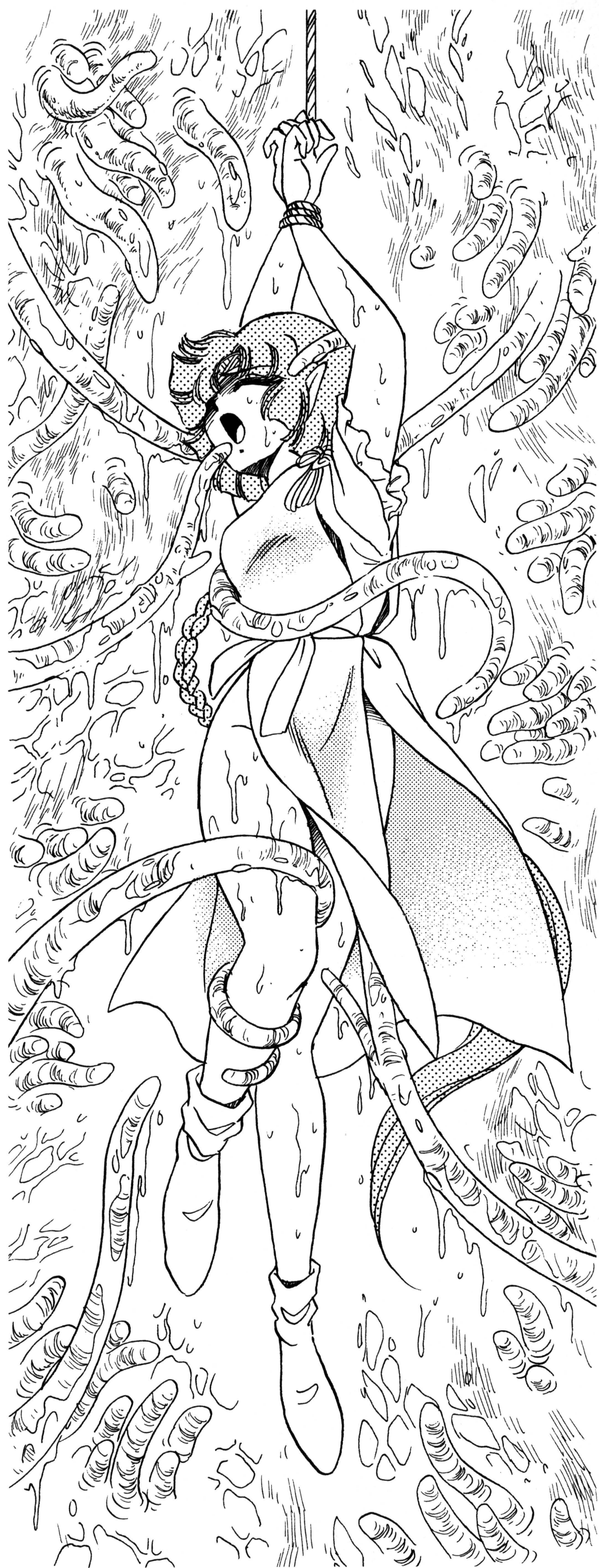
Author
青木　智彦
Tomohiko　Aoki
Illustrator
不知火　ほたる
Hotaru　Shiranui

デザイナー志望のおきらく少女ちさとちゃん♡の、
ドキドキ体験記の始まり〜！

ちさと with YOU

第一話　快感♡臨死体験

「……どーしましょうかね、課長？」
いかにも考えあぐねたという口調で、神経質そうな職員がポツリとつぶやいた。
6畳間程度の、いかにも『お役所』といった雰囲気が漂うこの管理官室の中には、あたしの他にこの神経質そうな職員とその上司が机を挟んで暗い面持ちで椅子に座っている。
「俺に聞かれても困るぞ！　大体こんなケースは前例がないんだし、とりあえず本部長の方から少将殿に伺いを立ててあるから、その返事待ちってとこだな。まったく小夜のヤツ、とんでもないコトをしでかしやがって……」
そういって、机の前に座っている40代前半と覚しき入界管理官の課長サンは、部屋の壁に埋め込まれている小さな窓から隣の部屋を覗き込んだ。
その中は、部屋というよりもまるで生物の内蔵の中のようだ。壁にはヒダとも触手とも区別のつかないものがグニュグニュと動いているし、全体からはネットリとした粘液のようなものが吹き出して濡れている。その中央に両手を縛られた小夜が天井から吊るされていた。
「ひぃぃぃん！　課長ぉ～、ごめんなさ～い、もうしませんから許してぇ～！」
小夜は懸命に身をよじり、天井から滴り落ちる粘液と吹き出す冷汗と涙で全身グショグショになりながら、懸命にもがいてる。
「だ・め・だ！　おまえは史麻呂様が迎えに来るまでそうしていろ！」
「そ、そんなぁ～！　このうえ史麻呂サマに折檻されたら身体がもちませんよぉ！」
「……ほお。ってコトは、まだお仕置きが足りないようだな？」
課長サンはそういうと、無表情のまま手元にある何かのボタンを押した。すると小夜の周囲の壁から一斉に触手が伸び、彼女の身体の上を這いずり始めた。
「えぇっ、またですかぁ？　あぁ～ん、そんなにされたら歩けなくなっちゃいますぅ！」
小夜は懸命にもがいているが、触手が着物の裾を割って両太腿の間に入り込んだ途端、身体をピクッと震わせて熱い吐息をもらし始めた。
「あっ♡　だめですぅ～…あん、そんなトコいじっちゃ……ああんっ♡」
小夜の喘ぎ声に導かれるように、触手はより敏感な部分を求めて全身を這いずり回っている。
「だめぇ～っ、そこはダメですぅ！　んんっ、後ろはダメなんですってばぁ～！　ああっ、んっ！　入ってきちゃだめぇ～っ！」
小夜の喘ぎは一段と激しさを増し、身をよじるたびに濡れた髪から水滴が滴り落ちる。
「はぁぁっ……んっ！　あぁ、そこは……あっいいっ！　当たってるぅ！　当たってるのぉ～！あんっ…くぅっ、きてる……も、もっちゃう、もっちゃうぅ～！　あぁぁぁぁっ！」
小夜が身体をピンと突っ張って甲高い声を上げるのと同時に、股間から迸しった液体が太腿を伝って滴り落ちた。
『ピーッ。5回目ノえくすたしーヲ感知シマシタ。被験者ニ対スル行為ヲ続行シマスカ？』
いきなり機械的な合成音声が課長サンの手元にあるスイッチのわきのスピーカーから流れる。
「当然だ。小夜ときたら、堪えるどころか悦んでやがる。とりあえず10回はイかせてやれ。」
『了解シマシタ。』
（げっ☆　じゅ、じゅっかい……。）
あまりのスゴさに、あたしは言葉が出ない。
「いや、失礼しました。あ、小夜のことならご心配なく。あの程度、史麻呂様の折檻に比べたらほんの小手調べですよ。」
「はぁ、……そーなんですか。」
あたしが呆気にとられていると、課長サンはまた事務的な口調に戻って事情聴取を再開した。
「それよりお嬢さん。今回のコトは何分前例がないので、私ども一介の管理官には判断しかねるんですよ。もちろん最善は尽くしますが、とりあえず詳しく状況をお聞かせ……あ、その前に、あなたも突然こんな所に連れてこられたワケですし、相当混乱されていると思いますので簡単に説明させて……」
「あ、結構です。こう見えてもあたし、以外と適応能力が高い方ですし、自分がどういう状況に置かれているかもおおかた理解していますので。」
そういって、あたしは課長サンの話しの腰を折った。それでなくても事務的な会話は苦手なのに、だらだら長～い説明なんて聞いていられますかって。
要するに、あたしは世間一般の常識からすれば『死んじゃった』ワケ。
……そう、あたしってば死んじゃったんだよね、ほんの1時間ほど前に……。
◇　◇　◇　◇



キ～ン…コ～ン…カ～ン…コ～ン……

「はい、やめぇ～。じゃ、講評は20分後から始めっから、イーゼルかたして待っとけや」

午後2時30分。3時限目の終わりを告げるチャイムが鳴って教官が退室すると、それまで静まりかえっていたアトリエの中はタバコの煙と雑談の話し声でいっぱいになる。

相川千里は、ここ『かわばた美術学院』に通うごく普通の浪人生。自分でデザインしたキャラクターグッズを作ることを夢に、美術大学を目指しているのだが、どうも彼女の感性は世間一般とは少々ズレているようで、成績はお世辞にもいいとはいえないようだ。

「ちょっと、ちさとぉ！　あんた軽いイーゼルばっか運んでないで、こっちのパジャントとモリエール動かすの手伝ってよぉ！」

「あ、ごめ～ん。じゃ、先にこっちの机、動かしとくから待って……」

その時、クラスメイトの声に振り返った千里の目に映ったのは、窓越しに見えた小さな蒼い光。

「……ねぇ、あれって何だろ？」

「何よ千里ったらぁ。ボケ～っとしてないで早く手伝ってよ！」

「でも、ほらぁ。あそこに何か光って……」

そういいながら、千里が窓の外を指さした時だった。その光は既に窓の外ではなく、あろうことか自分の目の前に浮かんでいる。

不思議な蒼さをした、きれいな透きとおった珠。

……その珠を見た時から、千里は数分間意識を失ってしまった……。

◇　◇　◇

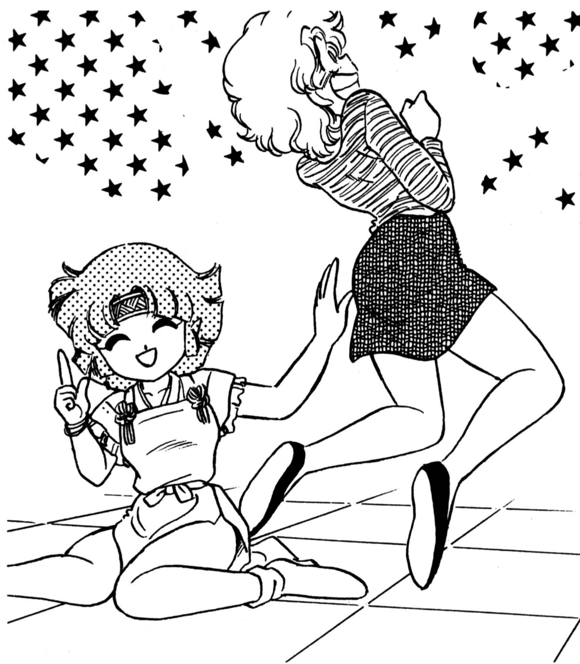
……どの位経ったのだろうか？　千里が我にかえって辺りを見回すと、そこは見慣れたアトリエの中だった。ただ、みんなの様子がいつもと違っていやに慌ただしく、部屋の真ん中には人だかりができている。

何事かと思って隙間から覗き込んでみると、どうやら誰かが倒れているようだ。どうせ恐らく貧血でも起こしたんだろうと、千里が倒れている人

ちさと with YOU

の顔を見てみると、それは自分自身ではないか!?
『ゴメン！　ちょっと通して』
　倒れている自分の側に行こうと人垣に割って入った千里だったが、まるで幻でも捕まえているように他人の身体を通り抜けてしまう。
（えっ？　どうなってるの？）
　千里は恐る恐る自分の身体を見たが、別にこれといって変わっている所はない。ただ、自分の身体が宙に浮いていることを除けば……。
（これは夢なの？　ううん、そんなハズないわ。だったら一体、何がどうなってるの？）
　クラスメイト達は、相変わらず後ろに立っている千里に気付いた様子はない。
『ねぇ佐知子ぉ、佐知子ってばぁ！』
　千里は自分の前にいる友人の肩に手をかけて、大声で呼んだのだが無駄だった。自分の声は相手には聞こえていないらしい。しかも、肩にかけたはずの手は何の感触も無くスルッと相手の身体を通り抜けてしまう。
　千里は突然の状況に混乱しながらも、懸命に冷静になろうと努めていた。その時教官が慌ただしくアトリエに入ってきたかと思うと、いきなり倒れている自分の手をとって脈を診、さらに胸に耳を押しつけた。
『こらっ！　どさくさに紛れて何をしてんのよ、このすけべオヤジ！』
　けれど千里のその声は、やはり教官には聞こえないらしく、教官は青ざめた表情で振り返りざまに叫んだ。
「救急車だ！　早く!!　心臓が止まってるんだ、早くしろっ！」
　その言葉に、千里は全身から血の気が引いていくのを感じた。
（……心臓が……止まってる……ってコトは、あたしってば『死んじゃった』ってコトぉ？　だって、だって、さっきまでフツーにしてたのに。身体だって、どこも悪くなかったのに死んじゃうなんて絶対変だよぉ！　そんな、そんなのって……あんまりだよぉ～！）
「はぁ…はぁ…や、やっと見つけたぁ～！」
　気が動転し、完全に混乱してる千里の後ろから突然聞き慣れない声。振り返って見ると、そこには見慣れない格好をした10代半ば位の女の子が疲れ切った顔をして床にしゃがみこんでいる。
「はぁ…は…あ、あなた…が拾ってくれたのね？　どうも…あり…ありがと…」
　相当急いで走ってきたのか、そのコは肩で息をしながらやっと起き上がって微笑んだ。
　しかし、完全にパニクっている今の千里に聞く耳などあろうハズもない。
「何よアンタはっ！　あたしは今それどころじゃないんだから、ちょっと黙っててよっ!!」
「!!　……くぅっ…ヒック…そんなぁ…い、いきなり怒鳴らなくたってぇ…えっく…あたしはただ、あなたにお礼を…ぐすっ…なのに、そんなコワイ…くぅっ…えっ…え～～～ん！」
「あ、あ、ごめんなさい。あたしチョット気が立ってたものだから。もう怒鳴ったりしないから、ねっ、もう泣きやんでよ？」
「だって……だってぇ……」
「ホント。もう怒ったりしないから、ねっ？」
「ぐすっ……ホントにぃ？」
「ほんとほんと！」
「……うん」
「良かったぁ。ねぇ、あなた見かけないけど、この学校の生徒じゃないわよね？　ここ、一応は学校だよ？」
「あ、あたしは落とし物を探しに来たの。仕事の途中で、すっごく大事な物を落としちゃって、それであちこち探してたんだけど、あなたが拾ってくれてたんだね、ありがと♡」
「えっ？　あたしが何を拾ったって？　あたし何も拾ってなんかないよ？」
「えぇ～っ、うそぉ!?　だってこの『三支杖』がちゃんと教えてくれてるもん。ほらぁ。」





そういうと、その女の子は手に持った変な棒を千里に差し出した。その棒は木というよりも、干からびて黒ずんだヒモノの様な感じで、先の方が3つに枝分かれしているのだが、それが千里の方に向けられた途端、先端がいきなり動きだして千里を指さす形になった！

「☆☆!! 何なのよコレ～！ やだぁ、気持ち悪いぃ！ 変なのぉ！」

「あははっ！ これはね、『錦魂』を持つ聖なる杖だよ。だから錦魂の所在を教えてくれるの♡」

「?? 何か良く分からないなぁ。じゃ、その錦魂って一体何よ?」

「錦魂ってゆーのはね、あたしも良く知らないんだけどスゴイ力を持ってるんだって。普段は天界からの命令で魂を回収する時にしか使われないんだけど、大昔の大戦では四聖獣を使って冥界の門を封印したんだって。」

（……ちょっと待て。何だって？ 魂の回収とか天界とか冥界とか、一体何のことを言ってんの、このコは？ それに落ち着いて考えると何か変じゃない？ だって今のあたしは他の人には見えてないのに、このコとは会話までしてる。……ってコトは、このコも普通の人じゃないってこと?）

「ごめんなさい。ねえ、それよりも『あなた』は一体何者なワケ?」

「あ、そーか。あなた、まだ新人サンなんだね。それじゃあ混乱しちゃうのも当然よね♡ 申し遅れました。あたし霊界出張所東京本部第二特務管理課所属准回収員の小夜っていいます。ま、俗にみなさんがいう『死神』ってヤツですよね。よろしく♡」

「☆☆☆！ し、死神ぃ～? あなたが?」

「そだよ。ほら、ちゃんと身分証明書だって持ってるもン♡ ところであなたの名前は? 迎えの回収員もまだ来てないみたいだけど、もし何だったらあたしが連れてってあげよっか?」

「……どこに?」

「あははっ♡ そりゃもちろん『あの世』に決まってるじゃない♡ ほら、これが魂の回収スケジュール表で、いわゆる『エンマ帳』ってヤツなの。でもって、それぞれの地区担当の回収員が巡回してるんだけど、時折時間に遅れちゃうこともあるんだよねー。だからいいよ、あたしが連れてってあげるから。」

「……行きたくないって……言ったら?」

「そりゃマズイなぁ。別に強制はしないけど、そうすると浮遊霊になっちゃうよ? 浮遊霊ってね、結構アブナイんだから。浄化されないから転生もできないし、下手すると魑魅魍魎に憑かれて変化になっちゃうし。それよりも若い女性の場合は、たいてい他の浮遊霊に輪姦されちゃうよ?」

「うっそぉ!? 肉体が無いのにHされちゃうってことぉ?」

「だって、お互いに肉体がないんだもの。そんなコト関係ないって。ほら、現にあたしはあなたに触れるよ♡」

「あっ、こら！ どさくさに紛れてオシリ触んないでよ！ とにかく納得したわ。こうなったらジタバタしても仕方ないもの。」

「そーそー、諦めがカンジンなのよね。他のヒトもあなたみたいに聞き分けが良かったら仕事も楽なんだけど。じゃ、住所・氏名・生年月日を教えてくれるかな♡」

（……そう、諦めがカンジンよね。ああ、お父さん、お母さん、先立つ不幸をお許しください。本当に短い人生だったけど千里は幸せでした……。）

ところが、エンマ帳をチェックしていた小夜はいかにも不可解といった顔をしてため息をつき、妙なコトを言い始めた。

「☆☆? ちょっと千里さん。あのね、エンマ帳によると、あなたが死ぬのは65年後になってるんだけど……」

「ええっ? そんなバカな！ だってあたし、現にこーして死んじゃってるじゃ……ってコトは、もしかして『生き返れる』ってコト?」

「あは♡ 残念ながら、どーやらそれは無理みたいね。だって、魂の緒が切れっちゃってるもの。」

「じゃ、やっぱり死んでるんじゃない。なら早いとこあの世へ連れってよ。他のオバケに犯されるなんてまっぴらだわ！」

「そうしたいんだけど、あの世に行くにも色々と手続きがあるの。まず入界審査証を発効してもら

ちさと with YOU

わないといけないの。」
「なんか海外旅行みたいね？」
「あ、それとおんなじ♡　パスポートが無い場合は入界管理局に出頭して事情聴取されて、そのあと資格審査を受けて……」
「あーもう、ややっこしーわねぇ。あの世までお役所みたいになってるなんて思わなかったわ。」
「ごめんね。あたしもできるだけのコトはするから気を落とさないで、ね？　とりあえず死ぬ直前の様子を教えてもらえるかな？　原因さえ分かれば何とか不可抗力(アクシデント)ってことで処理できるかもしんないから。」
　とりあえず千里は、自分が記憶している通りに一部始終を小夜に話した。講評の準備をしていたコト、そして目の前に突然現れた不思議な蒼い珠のコトも。
　すると、さっきまで明るかった小夜の表情が、さぁ～っと青ざめていく。そして大きく目を見開いたまま唇を震わせて、まるで消え入りそうな声でポツリとつぶやいた。
「……あたしの……せいなんだ……」
「えっ、何？　よく聞こえないよ？」
「……あたしのせいなの。……あなたが死んじゃったのは、あたしのせいなのぉ！」
「ちょっと、あなたは死神なんでしょ？　じゃ、自分のせいってコトじゃないんじゃないの？」
「ううん、違うの。あたしが錦魂を落としちゃったからなの。あたしが錦魂を『生きてる』あなたの上に落としちゃったから……それで、その時に何かが起きて、それできっと……」



そういうと、小夜はすっかり意気消沈してうなだれてしまった。
「ねぇ小夜ちゃん、それって一体どういうコトなのよ？　詳しく話してくれない？」
「……あたしも良くは分からないんだけど、きっと錦魂の力が偶然あなたに反応しちゃったんだと思うの。錦魂はね、天界からの命令で『浄化が必要な特定の魂を強制的に回収する』時にだけ使ってるの。それ以外の時は厳重に保管されていて、うかつに触れることもできないくらい大切な物だし、万一使い方を間違うと大変なコトになりかねないの。それなのに、あたしが何の関係も無いぁなたにぶつけちゃった時に、その『肉体と魂を引き離す力』が発動しちゃったとしか思えないの。あぁ、どうしよう!?」
　小夜は何かに怯(おび)えたようにオロオロしている。
　それは千里にしても同様だった。ただ、持ち前の気丈さだけで、懸命に持ちこたえているにすぎなかった。
「んー、難しいけど、何となく分かったような気

がするわ。じゃさ、その錦魂の力を使って元に戻すことはできないの？」
「……ごめんなさい。それができるかどうか分かんないの。けど、やってみる。とにかくあなたの拾った錦魂を貸してくんない？」
「……あたしそんなモノ、持ってないよ？」
「きっと、あなたのカラダの中に入っちゃったんだね。大丈夫、心配しないで。この三支杖が取り出してくれるから。それじゃ、とりあえず裸になってくれる？」
「!! ちょっと、どーして裸になんなきゃいけないの！ 他の人達だって大勢いるんだから、そんなコトできっこないじゃないの！」
千里がムキになると、一瞬だが小夜の顔に妖しい笑みが浮かんだ。
「ふふっ♡ 大丈夫だよ、他の人には見えないんだから。それに抵抗したってムダだよ。ほら、これを見て。」
小夜は手に持った棒を千里の目の前にかざした。近くで良く見ると、それは干物というよりも生物の腕のミイラのようだった。しかも、血管のように見えるシワがドクッ…ドクッと脈打っている。
すると、指差していた先端が急にパッと開き、その指の付け根から血走った目玉が見開いて千里を見つめている。その瞬間から、千里は身体の自由を失ってしまった。
「ちょっと小夜ちゃん、一体何をしたの？」
「大丈夫♡ 三支杖がちゃんと上手くやってくれるから、千里さんは気を楽にして、自然にしてればいいの♡」
小夜は口元に笑みを浮かべて千里を上目使いで見ながら、足元に三支杖を置いた。すると、千里の頭の中に突然聞いたこともない声が響き始め、



ちさと with YOU

その言葉を聞いているうちに意思とは関係無く服を脱ぎ始めていた。

「えっ？　ちょっと、ヤだよぉ！　ね、小夜ちゃん何とかしてよぉ！」

けれど小夜は、前にちょこんと座ったままニコニコしてこちらを見つめている。

千里は猛烈な恥ずかしさの中、何とか抵抗しようと努力するが、両手は意思に関係無く動いてしまう。スカート、シャツ、ストッキング、ブラと次々に脱ぎ、遂にはショーツ1枚だけの姿に……。

「ね、小夜ちゃんお願い！　お願いだからもうやめて！」

けれど小夜は、相変わらずニコニコしながら見つめているだけだった。

「お願い、ね、小夜……あっ！　きゃぁっ！」

突然、膝の力がガクッ！っと抜け、千里は思いっきりシリモチをついた格好で両足を投げ出し、両手を後ろ手に床に付いてへたりこんでしまった。

すると、さっきまで足元に置いてあった三支杖がズルッ…ズルッ…っと不気味な音をたてながら自分の方に躙り寄ってくる！

千里は懸命に逃げようとした。けれども身体が自由にならない。そればかりか、投げ出した両足が勝手に膝を立てて大きく開きはじめてしまった。

「いやっ！　こんな格好なんてひどすぎるわよぉ！　もうやめてぇ!!」

千里は、羞恥と恐怖に耐えられなくなって、ついに大声で泣き叫んでしまった。けれど三支杖はさらに近づいていきて、その3本の指で右の足首を摑んできた！

「キャ――――ッ！　いやぁ、放してぇ！」

その悲鳴も虚しく、三支杖は3本の指を器用に使って千里の足を次第に上の方へと這い上がってくる。

じりっ…じりっ…。それが肌の上を動くたびに千里の全身は鳥肌がたち、身震いしてしまう。

しかもその指は単に這っているだけでなく、時折ランダムなバイブレーションを繰り返してくる。

その動きは、膝下、膝、内腿と上がるにつれて徐々に激しく、しかも微妙になってくる。

千里は、この得体の知れない物が何をしようとしているのかを悟った。この棒は自分を犯そうとしているのだ！　そう思った瞬間から、千里の恐怖心は別のものになった。

「い…いやぁ…お願い、やめてぇ！」

その叫びが無駄な事は千里自身が一番良く分かっているが、やはり叫ばずにはいられない。そうでもしないと、身体だけでなく意識まで支配されてしまいそうだからだ。

すると、さっきまで内腿に感じていた動きが急に止まった。が、すぐにもっと激しい別の感覚が千里の身体を突き抜ける。

「やぁっ！　だめぇ～っ！」

内腿を這い上がってきた指は、今度は足の付け根とショーツのゴムのきわの部分をゆっくりと微妙な感触でなぞり始めている。

「あぁぁ～っ！　い、いやあぁ～っ！」

3本の指のうちの2本が、ちょうどVサインのような形になって股間を挟むようにあてがわれている。そして指は、足の付け根の一番肌の滑らかな部分を狙って的確に愛撫を加えてくる。

時には指の腹のザラッとした感触、時には爪を立てて軽くなぞっているような感触が千里の意識を朦朧とさせる。

「やぁっ！　あっ……んっ！　だ、だめぇ！」

千里は、自分の身体が意に反して火照って熱くなってくるのを感じていた。恐怖心と羞恥心に苛まれながらも、むしろ身体はより敏感に反応してしまう。

（……催眠術？……そうだ、きっとさっきの目玉を見た時に何かの術にかかってしまったんだ。だから身体の自由もきかないんだ！）

千里がそれに気付いた時には、もう遅かった。

息も荒く、動悸も早くなっている。それをさらに高ぶらせるように、指は執拗にその部分をなぞり続けている。

「んっ！　やっ、やめ…あぁっ、だめよぉ！」

千里は懸命に抵抗の意思を言葉にするが、既に彼女の肌は熱く火照り、顔は上気しはじめている。

全身にはうっすらと汗が浮き、ショーツには興奮を示すシミができていた。

「お願い！　もう、もうやめてぇ！　あうっ、そ、それ以上はダメよぉ！」

けれどその指の動きは、一層微妙になって愛撫に激しさを増してくる。そして別の指が、既に濡れてシミになっているショーツの上から一番敏感な部分を探り始めた。

「はあぁぁっ！　そんなとこ……あぁぁっ！　だめぇっ……そ、そんなにしないでぇ！」

おそらく充血して膨らんでいるはずの敏感な突



起の周囲をこね回されるたび、千里は押し寄せてくる快感に身体をひくつかせながら喘いでしまう。

　しかもその指は、あえて突起に触れようとはせず、そのまわりだけを執拗に愛撫してくる。それが逆に千里の感覚を高めていく。

「あぁぁん、そこ、そこは…くっ…はぁぁぁっ！　もっ……あぁぁぁぁっ！」

　いつしか、千里の口からは抵抗の言葉も消え、代わって熱い吐息が漏れ始めていた。焦らされればされるほど、千里の喘ぎは一層激しさを増していく。ピンク色をした両方の乳首も痛いくらいに堅くなって尖り、形のいい乳房は熱い息を漏らすたびに小刻みに揺れる。

「はぁぁっ……お、お願い…じらさないでぇっ！　んっ！　んあっ！　してぇぇっ！　あっ……あぁぁぁぁっ！」

　ついに千里が我慢しきれず叫んだ瞬間、熱い滴を溢れさせている秘所から、もっと熱いものが少し迸しってしまった。腰のあたりにじ～んと痺れたような感覚が広がっていく。全身がガクガク震えて止まらない。

「あぁ、いっ、いやぁ～！　もう、もう、ほんとにだめよぉ！　おかしくなっちゃいそう！」

「へぇ～、千里さんって感度イイんだ♡　それじゃあんまりイジメたら可哀相だね。いいよ、そろそろイかせてあげる♡」

　黙って見ていた小夜がそう言ったが、今の千里には何も聞こえていない。彼女の一番敏感な部分は、もっと激しい愛撫が加えられるのをひたすら待っている。

　すると、不意に自分の腰のあたりに別の手の感触を感じて虚ろになった目を向けると、小夜がショーツを脱がせてくれている。

「ふふふっ♡　やぁね、千里さん。あなたの下着、ほら、愛液でこんなにぐっしょりになってるよ。それに、さっき漏らしちゃったでしょ？　キレイにして欲しい？　それとも別のモノが欲しいのかしら？」

　小夜は、千里の目の前で彼女から脱がしたショーツについた愛液を指にからめながら、耳元で息を吹きかけるようにささやいた。

「千里さんのココ、ピンク色で奇麗♡　それにいっぱい蜜が溢れてるよ。ほら、大事な花びらもこんなに厚く腫れてめくれちゃってるし、クリちゃんもこんなに堅くなっててかわいそう♡」

　小夜は、そんなささやきを続けながら千里の胸を愛撫し始める。親指と人差し指の間で乳首を摘まみながら、手のひらでゆっくりと乳房全体を揉み始める。

「はぁ…はぁ…いいよぉ！　こんなに感じたのは初めてなのぉ！　あぁん、もっと激しくしてぇ！　いいっ！　いいのぉ！」

　千里は同性に愛撫されているというのに、今は何の抵抗も感じなかった。まだ自分でしか愛撫したことのない身体は、こんな強烈な刺激を受けながらも悦んで受け入れ始めている。

「ね、ねぇ……お願い……小夜ちゃん…んんっ、あぁぁっ！　もう、もう我慢でき……早くぅ、んんっ…お願い…いっ……いかせてぇぇっ！」

「そんなに欲しいの？　ふふっ♡　いいわ、入れてあげるね♡」

　小夜がそういうと、さっきまで敏感な突起の周りと花びらを愛撫していた指が急に動きを変え始めた。

　1本の指は既に充血して包皮から頭をのぞかせている突起に直接添えられ、1本の指は蜜が溢れている入り口に、そしてもう1本は後ろの窄まりにあてがわれ、より微妙な動きをし始めた。

「あひいっ！　くぅっ…ん、んっ…いいっ！　いいのぉ！　あぁぁぁぁっ、もっとぉ！」

　千里は耐え切れないほどの快感に思いきり声を上げた。指が動くたびに、中から熱い蜜が湧き出して滴り落ちていくのを感じる。

「はぁぁぁっ…あぁ…あっ、んっ、いいっ！　だめぇ…早くぅ！　このままじゃ…んっ、あうっ！　くうっ……あぁぁぁぁっ！」

　もう限界！　千里がそう思った途端、指の愛撫がピタッと止まった。そして3本の指は再び閉じられると、そのまま千里の中にゆっくりと入って

ちさと with YOU

来はじめた。

「痛っ！　いっ、いやぁ〜っ、入ってきちゃだめよぉ！　ああぁぁっ！」

身体が引き裂かれるような鋭い痛みに、千里は身体を震わせて叫んだ。

「あやや。千里さんって、ま〜だ処女だったんだ、あはっ♡　大丈夫だよ、心配しないで。あなたの肉体は処女のままなんだし、それに身体の方は拒んでないみたいだよ。さあ、気を楽にして♡」

小夜がそういうと、一旦動きを止めた三支杖は再び侵入を開始した。まるで入り口の緊張を解すように、指を1本ずつ交互に動かしながら、ゆっくり、ゆっくりと、まだ何者も受け入れていないピンク色をした肉壺の中に順番に沈められていく。

「あっ、あはぁ…んんっ！　いい……あんっ、いいよぉ、あっ、あふぅ〜！　し、痺れる、あそこが痺れるぅ〜！」

くちょっ…くちゅっ…ぴちゅっ…。中に挿入された指がゆっくりと動くたび、千里は無意識のうちに腰を浮かせて大きく喘ぐ。その度に、彼女から溢れ出した蜜がお尻の割れ目を伝って床に滴り落ちる。

「ふふっ。もうそろそろいいみたいね。それじゃ千里さん、ちょっとだけガマンするんだよ。すぐによくなるからね♡」

そういうと、小夜は千里の足の間に割って入り先程から蠢いている三支杖を握った。

するとと三支杖もそれに応えるように動きを変え、3本の指が一ヵ所に集中しはじめた。

「あっ、あっ！　くっ、ひぃ〜っ！　痛い、痛いよぉ！　お、お願い、抜いてぇ〜！」

「大丈夫だよ、まだ先っちょが入っただけだもん。じきによくなるから♡」

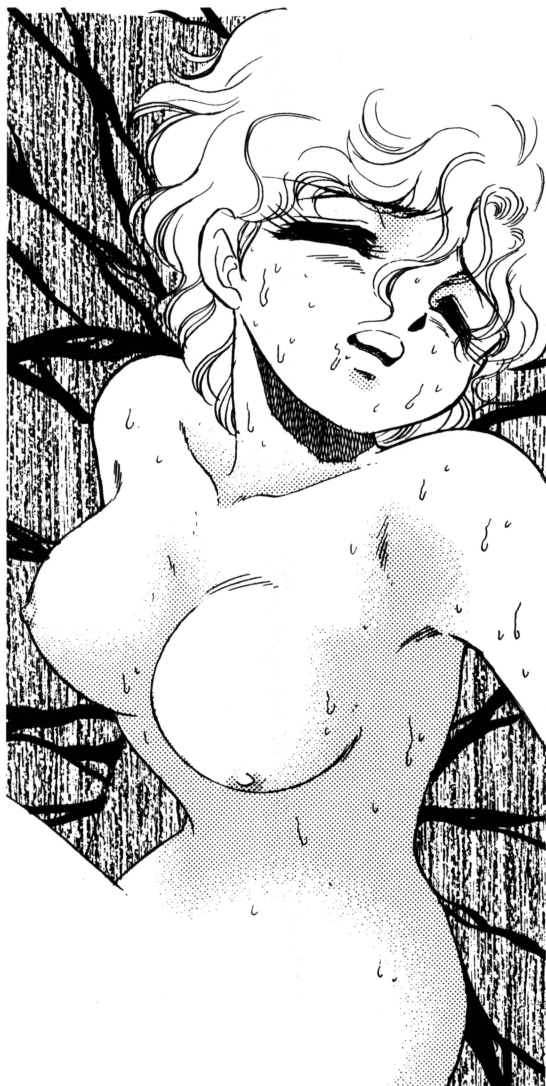
小夜は手にした三支杖をさらに奥の方へと進め始める。三支杖もそれに合わせ、指を1本ずつ交互に動かしながら奥へ奥へと挿入されていく。

「あっ…あっ、ああ――――っ!!」

三支杖の先端の縊れた部分が完全に中に沈んだ時、千里は全身をのけ反らせて悲鳴を上げた。

「うふっ♡　千里さん、オメデト！　これであなたもオンナよ♪　今度はオンナの悦びを教えてあげるね♡」

全身を硬直させ、震えながら痛みに耐えている千里にそうささやくと、小夜は千里の股間に顔を



近づけ、充血して包皮から顔を覗かせている敏感な突起を舌でチロチロと転がし始めた。身体の中では、三支杖が3本の指を使って肉壁のヒダをなぞるように蠢いている。

「あひぃっ！　やあぁ〜っ、だめ、だめよぉ！あはぁ…はぁ…はぁ…あっ！　くぅぅ〜っ！」

千里の身体からは既に痛みは消え、強烈な快感に全身を打ち震わせている。小夜の愛撫をねだるように、いつしか腰を浮かせて突き出し、中の指が粘膜の襞を擦る度に下半身はヒクヒクと痙攣してしまう。

「あっ、そ、そこぉ！　そこなのぉ！　いっ、あぁぁっ！　あたるぅ、あたってるのぉ！」

千里の喘ぎが高まるにつれ、中の蠢きも一層激

しさを増してくる。それは時に回転し、時にバイブレーションを送り、時に強く突き上げてくる！

「あぁぁぁっ！　こんな…こんなの初めて……んんんっ！　いいっ！　よすぎるぅっ！」

　身体の自由がきかないことも忘れ、千里は思わず全身をのけ反らせてしまう。足のつま先に力が入り、身体の中もあまりの快感に時々ピクピクと震えてしまう。そのたびに強烈な快感と猛烈な尿意に襲われ、千里の思考を麻痺させていく。

「あっ…あ…いっ、いやっ！　あぁっ、あたし……あぁぁっ！　もう、もう！」

　全身に直前の硬直の感覚が走った途端、中で動いていた指が急に広がって一気に、そして今までにも増して激しく動き始めた。それだけではない。

　何か別のものがもっと奥の方まで入って来る！

「あっ、もうだめぇ～！　あたし、あたし、弾けちゃうよぉ～！」

「いいわ。これでオシマイ♡」

　小夜は上気した顔を一旦千里の秘所から離すと、今度は千里のクリトリスに軽く歯を立てた。

「きゃうっ！　ひっ！　ひぃぃっ！　も、もっと噛ん…もっと苛めてぇっ！　あっ！　あっ、あっ、そのまま……あ、あたし、あたしぃっ！　あうっ、いっ、いっちゃう…いっちゃうぅっ！　もうだめよぉ、あ、あああぁぁぁ～っ！」

　ぷしゃぁ～☆　千里はひときわ甲高い声を上げ、全身を震わせながら遂に絶頂に達した。それと同時に彼女の股間からは黄金色の液体がシャワーのように勢いよく迸しった……。



　その時だった。

向こうで倒れている自分の身体を囲んでいた人垣が急にざわめき始め、クラスメイト達が歓声を上げはじめた。



「動いた！　今、動いたわ！」

「俺も見たよ！　まだ助かるかもしれない！」

「おい、かすかだけど心臓が！」

「救急車はまだかよ！」

　……その声に、あたしはまだ朦朧とした意識の中で目を開けると、小夜が今にも泣きそうな顔で覗き込んでいる。

「…はぁ…はぁ…どうしたの…小夜ちゃん、そんな顔して…」

「……入っちゃったの。」

「はぁ…はぁ…えっ、何…が？」

「……三支杖があなたの中に入ったまま無くなっちゃったのぉ！」

（……何だって？　あの得体の知れない棒があたしの中に入ったまま無くなっただとぉ？）

「☆☆☆！　ちょ、ちょっと！　それってどーゆーコトなの？」

　あたしは今にも小夜に飛びかからんとばかりに飛び起きた、のだけれど……

「あっ！　痛ぁ～っ!!」

　あたしの下半身に突然鋭い痛みが走って、思わずその場にしゃがみこんでしまった。

「あ、ダメだよ急に起きたら。まだ血だって止まってないんだから。」

　小夜にそう言われて下半身を見ると、処女を失った証が愛液に混ざってアソコと床を赤く染めている。

（あぁ、そうだ！　あろうことか、あたしは奇妙な棒に処女を奪われてしまったんだ。こんなコトになるんなら、高校の時に付き合っていた先輩にあげるんだった。そうすれば振られずに済んだかもしんないのに……。）

「心配しなくても大丈夫だよ。あなたの肉体はまだ処女のままなんだし、ちゃんと元気に……え？





「えぇ～っ、うっそぉ～!?」
小夜は倒れているあたしの肉体を見た途端、目を丸くして大声をあげた。
そう。何とあたしの肉体は、魂が抜けているにもかかわらず蘇生しているじゃない！
「さ～よちゃ～ん♡　コレは一体どーゆーコトなのかしらん？」
あたしはピクピクと顔を引きつらせながら小夜を問い詰める。小夜はびっしょりと冷や汗をかいて、ただオロオロしながら口ごもっていたが、やがて意を決したように言った。
「……こうなったのも全部あたしの責任だから、いいわ。とりあえず霊界へ行きましょう。それで上司に説明して、どういう事態になったのか聞いてみる！」
そういうと小夜は、懐からエンマ帳に仕込まれた携帯電話を取り出した。
「……あ、もしもし、小夜ですけど課長は…はい……お願いします……あ、課長ですか？　実は非常事態が発生しまして……ええ、こちらでは対処不能なんですぅ……はい、それで今からそちらに向かいますので……できれば、そのぉ、史麻呂様には内緒に……はい、それでは」
（……こうして事務的な会話をしているトコロを見ると、とても死神とは思えないわ。おまけにエンマ帳は電子手帳だし、携帯電話までもってるし、俗に言う『死後の世界』ってイメージとは程遠いわねー。）
「千里さん、それじゃ行きますよ！」
「ちょっとぉ、簡単に行くってゆーけど、どうやって行くの？　何か乗り物でもあるワケ？　それとも、もしかして飛べるのかな？」
「そーですよ。ただひたすら上に向かって飛べば

ちさとwithYOU

霊界に行けるんです。大丈夫ですよ、じきに慣れますから♡」

（……おいおい。なんちゅ～安直な……。）

「それじゃ、あたしの後についてきてくださ……あ、その前に服を着といたほうがいいかもしれませんねぇ。」

「えっ？　あ――っ、忘れてたぁ！」

あたしは急いで服を着ると、小夜のいうコトを信じ、目をつむって飛んでみようと意識した。

まるでエレベーターが上り始めた時のような感じがしたかな～と思っていると、今度は全身を心地よい微風がくすぐっていく。

「……千里さん、千里さんってばぁ。もう目を開けても大丈夫だよ♡」

小夜の声に、あたしは恐る恐る目を開けた。

目の前には小夜がニコニコしながら立って……もとい！　浮いている。しかも小夜の後ろにあるビルって、もしかしてサンシャインじゃないの？

あたしは思わず生唾を呑み込んで足元を見た。

「キャーッ！　落ちちゃう、落ちちゃうぅ！」

あたしの足の下には当然何も無く、はるか下にミニチュアのような町並みが見える。

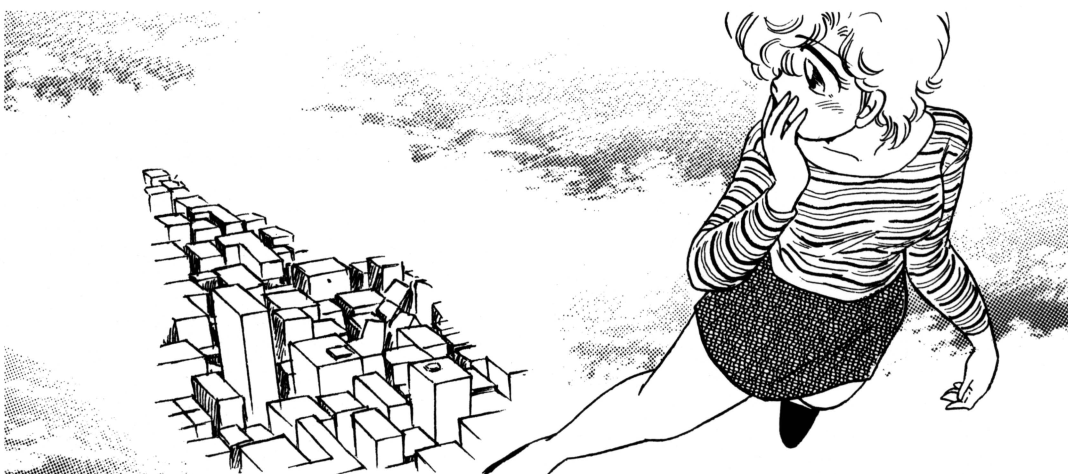
と、ゆーコトは……あたし本当に空を飛んでるんだ。

「ね♡　ホントに飛べるでしょ？　それじゃ行くからついてきてね！」

「あ、小夜ちゃん、その前に……」

「な～に？」

「あの…そのぉ…替えの下着なんて…持ってないよね？」



そう。あたしの下着はさっきのHでグッショリと濡れていて冷たいし、なんとなくヌルヌルしているようで気持ち悪かった。それにまだ止まってないから汚してるかも……。

「え～っ、下着ですかぁ？　困ったなぁ。あたしこんな格好でしょ。それに御主人様の好みで下着は『Tバック』なの。これじゃ逆効果よねぇ。」

「じゃ、あの…ナップ…なんて持ってる？　あたし、終わったばっかだから持ってきてないんだ。」

「☆☆☆！　そっか、まだ『やった』ばっかですもんね。ん～っと、ポケットティッシュならありますから、代わりに使ってください。」

「あは、助かるぅ♡　ありがとね！」

あたしはティッシュを受け取るとすぐに後ろを向き、そそくさと支度した。が、これはヒジョ～にハズい！　けれど背に腹は替えられぬってワケで、いたしかたがない。

「お待たせ♡　それじゃ行こ！」

「はい♡　じゃ、しっかりついてきてくださいね！」

あたしと小夜はグングン高く空に上って行く。

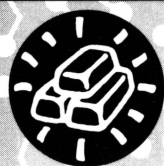
……そういえば、さっきのHがあたしの初体験だったんだけど、そのわりには気持ちよかったなぁ。アソコがまだちょっと痛いけど、奥の方がまだ疼いてるみたい♡　あんなにイイんなら、生き返ったら早速彼氏を見つけて……うふっ、うふふっ♡

そんなコトを考えながら飛んでいくあたしの耳に、下の方からかすかに救急車のサイレンの音が聞こえたような気がした……。

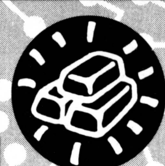
〈つづく〉



読者の読者による読者のための帝国植民地



パソパラ自由帝国



植　民　地

▲植民地祭典に皇帝の名代で出席された三皇女 後ろには何やらあやしげな人物の姿もチラホラ…

あけましておめでとう！

まだ、場所によっては12月のところがあるようですが、当パソパラ自由帝国植民地では、ただいま新年の祭りの真最中です。ちょっと臣民の皆さんの生の声をリポートしてみましょう。

「おめでとうございます」

「あぁ、めでてーなー。帝国初めての海外領土だそうじゃないか。ただ酒は飲めるし、いうことなしってってんだー！　うぃ〜ヒック」

「ところで、植民さん。あなた江戸っ子のようですね」

「おう。一獲千金を夢に見た漢でぃ！　ところでねーちゃん、脚きれいだねぇ。ちょっとオイラといいことしない？」

「手を放してくださいません？」ニコッ

「つれねえなぁ。おいらこうみえても、さる組織では幹部とか言われてるんだぜ。なあ、悪いことせえへんよって、めかけさんになって左うちわであんじょうしようやないか……」（言葉が……）

サワサワ、ぺろ〜ん

バシッ！　ズゴン！

ガズズゴン！　しーん

ハアハア……。あ、新年祭にわく植民地からのリポートでした。担当はお忍びのパラです。またね〜

帝国の重鎮様より

風雅うつら（愛知県）

▼今回の一番乗り！　こういうことができるのも創刊号だから。２回目からは連結ハガキはキツクなると思う



今回は創刊号ということで一足お先に帝国の重鎮様方からおめでとうハガキをもらったよ。担当としてはとってっもうれしいなあ。

今回は白黒イラストに関しては掲載率一〇〇パーセント。複数送ってきてくれた人もぜ〜んぶ載っています。まあ、次回からはこうもいかないと思うけど、今ならまだ穴場だと思うよ。

気になる投稿掲載ポイント制なんだけど、植民地は本土と別計算の別システムになると思います。詳しくは次号で発表するので期待しててね。

なお、植民地という名称は差別的意図に基づいたものではなく、アメリカ合衆国がイギリスの植民地から出発したように、新しく未来のある自由天地をイメージしてのことです。よろしくご了解ください。

詩神（神奈川県）



▲なんと広大な荒野。今なら買い占めたい放題だよ〜。夢があっていいよね

Ａ・Ｐ（東京都）



▲Ａ・Ｐさんはカラーイラストを送ってきたんだ。カラー領土に期待！

■求む！　植民者

パソパラ自由帝国植民地では意欲のある植民者を大歓迎します。宗教上の理由や祖国に見切りをつけた人、迫害された組織の人も歓迎します。ここでは、例のマークも旗や一部のマークにしか使われていませんから大安心です。なんたって自由の天地なんですから。

■求む！　領土名

植民地の名前をつけてください。やっぱりカッコイイ名前をつけると愛着がわくでしょ。というわけで、あまり長くない名前を募集しま〜す。

都築綾乃（大阪府）



▲ランス様の下僕っていうペンネームはやめてしまったのですか？　仕事？

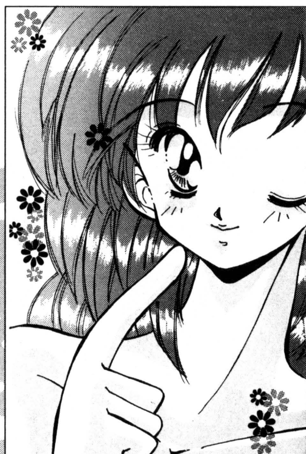
■求む！　総督府職員

パソパラ自由帝国植民地では植民地統治にあたっての企画立案ができる人を募集します。「読者の読者による読者のための……」はシャレじゃありません。こんな企画がほしい、という内容を書いて送ってください。十分に検討してできるかぎりやります。ただし、企画内容は多くの読者にとって楽しいものに限ります。読んでて不快になったり、特定のものに対する攻撃などが採用されることはまずありません。

さあ、読者のみなさん。新天地はあなたの活躍を待っています。ドンドンお便り送ってね。



▲おおっ！ 担当はメガネっ娘が大好き！
左側の娘の着てるＣＨＡＴパーカーも欲
しいぞ。それにしても可愛いな



▲ダイスちゃんの成長後？ あの脳みそ
ブーがこんなにかわいくなるんですかね
しかもまぁ、体つきもえっちになって…



▲あの娘の胸に光るのは銀のロザリオ！
あぁ、判天連の娘だったのね。やっぱり
神様に代わっておしおきよっ！ かな



▲そこのお嬢さん肩ヒモがはずれかけてますよぉ〜ってな
雰囲気じゃなさそうね。こんな風に迫られたことナイの…

ぱらいそ（神奈川県）



▲なんて豊かな胸でしょ。別にケバケバ
ねーちゃんには見えないよ。女海賊って
ところですかね。カッコイイ〜



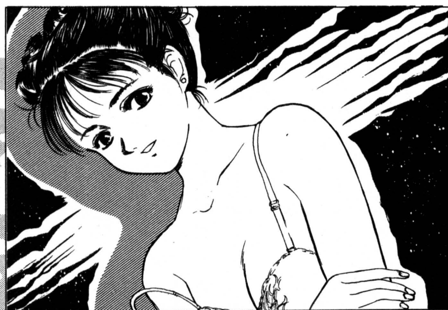
▲タイムリーな話題でとてもうれしいぞ
別に１月号で１２月の話題をしてもいい
じゃない？ たとえば真珠湾とか（ヤバ）



▲ちょっと亜子ちゃんに似てるぞって、
それは同級生のやりすぎでんがな
組んだ手の下にはオコタとミカン？



▲おぉ〜！ バーンナックルはテリーの
技ですってば、この娘は…。オッケェ!!



▲背景が何なのか謎である、とのコメントで女の子の後ろ
に影男がついているように見えてきてしまったぞ。ウ〜ン

素人四郎（長野県）

しらとりれいこ♡の
バードボイス!

初めましてって事で
自己紹介しまーす!!

P.N しらとりれいこ ♀
7月14日生まれ かに座
職業 プータロー
外注で カクテルソフト
フェアリーテール等の
エロソフトの原画やってます.
他は 雑誌の
イラストや カット
まんがも 描くよ.

ペット ハムスター
5匹も居るの
好きな食べ物
水炊き ほうとう.
しゅみ カラオケ. ファミコン
今は 真・女神転生やってます.

今後 このコーナーでは
しらとりへの 苦情. 質問等
何でも お答えしちゃいます
ので どしどし
お手紙下さいネ!!

じゃあ またね。



ゴールドラッシュ!

パソパラ自由帝国植民地にはまだ人跡未踏の広大な空間が存在するという。

さて、それで伝説の黄金郷を目指してパーティーを組みませんか? 参加は簡単（かな?）カラーのイラストを投稿するだけ。掲載に価する美しいカラーイラストが、ある一定枚数以上たまると黄金郷（カラーページ）へのルートが開けるということです。

黄金郷の規模や、ルートが開けるための条件などの詳細はまだよくわかりません。とにかく、冒険心にあふれるアナタ、腕にはちょっと自信のあるキミ、いっしょに黄金郷を目指そう! 歴戦の勇者も大歓迎! ちょっと自信がないという方も、自分を鍛えるために参加されてはいかがですか?

GO! FRONTIER!

結城 学の
胸ちっちゃい娘大好き♡

結城学です、こんにちわ。今号は企画物と1ページコラムに加えて、こんなコーナーまでいただいてしまいました。ゆくゆくは植民地全部…という野望をもっています。

今、アリスソフトのユーザークラブでは『PTTP』というプロジェクトの入会募集をしています。これはなにかというと、プロジェクト・ツル・ツル・ペッタンの略なのだそうです。

結城もさっそく入会。



ところでこのコーナーは以前からお話がありました『ちょこちゃんファンクラブ』に関する情報です。

会則は次のとおりです。



1：ちょこちゃんをこよなく愛す
2：ちょこちゃんに食料の差し入れ（腐るものはダメ）をする

の二点だけ。入会希望者はハガキに住所・氏名・生年月日を書いて本誌編集部までお送りください。抽選でK先生の描いた色紙を各一名に。会員全部にコピーバージョン&会員証を。差し入れは編集部かアリスソフトまで。

ミュロミュローコーナー

インフォーメーションのページ



■コミック評

電脳あいどる探検隊　ホビージャパン刊　九八〇円

パソコンゲームを題材にしたコミックで、アミューズメント・アンソロジーシリーズ4。取り上げられたゲームは、同級生、ワーズワース、ランス、電撃ナース、ヴァリアブル・ジオ、メタモルミーナ、大打撃、魔道物語、キャラメルクエスト、デーモンシティー、電撃ディビジョン、超・爆、韋駄天いかせ男、MSXトレイン。全体にほのぼのとしてるが、HJにしてはちょっとエッチで、ゲームを知らない人でも十分に楽しめる。知ってる人はなおさら楽しめることでしょう。特にランスファンにはITOYOKO先生のランス番外編コミックだけでも十分に「買い」！

■新作コミック情報

今号でも「僕の彼女は小妖精」のイラストを描いていただいたカズマGバージョン先生の初単行本『エルフの若奥様ー』が来年一月十二日発売（予定）になります。これは『コミック花いちもんめ』の大人気連載作品で今回は最初のエピソードと番外編で構成されるということです。エルフの若奥様ミルファはかわいいし、エッチなシーンもかなり多いのでお薦めの一冊。メディアックス刊



■冬コミ情報

今号のエンジェルクエストでプレイヤー兼イラストレーターを務めてくれた青井竜さんと森村みずきさんが冬コミに出店します。

12月30日：東館N-64　エアクアースカ（青井竜）今回の新刊はサムライスピリッツ本&ファイアーエンブレム本で、ブースには必ず本人がいるとのこと。

12月30日：東館K-36　瑠璃色の夜明け（森村みずき）本人はいないかも……。



自由帝国常連さんで、今号のあだると若大将の成年コミックランドにカットを描いてくれた風雅うつらさんは今回冬コミに自分のサークル天使館で落ちましたが、12月30日の創作男子にてレディーコマンドという本を出すそうです。興味のある人は頑張って探してみては……。



■この猫さんに名前をつけて！

各文章の最後についてるエンドマークの猫さんに名前をつけてください。オリジナルは荻窪南さんの画です。



投稿のおきて

パソパラ自由帝国植民地では投稿を募集しています。というより投稿がなければ、領土がドンドン削られてしまいます。ぜひ、楽しい投稿をお待ちしています。

投稿のレギュレーションは次のとおり

イラスト：イラストはハガキまたはハガキサイズ。大きいものや小さいものも受け付けますが、できればハガキで。黒いインクでしっかり描いてください。カラーイラストは画財を問いません。ただしカラーインクやマーカーなど蛍光色の入ったものは印刷で変色しますので注意してください。文字を入れる場合は大きめの文字で読みやすく。

文章：かならずハガキで。封書は不可。まとめ入れも不可。文章は最大でも200字程度。誤字脱字は編集部で勝手に変更します。また文章の一部使用もする場合がありますのでご了承ください。

投稿は自信をもって。いたずらに自己卑下しないように。他人に対する誹謗中傷は絶対にしないでください。ちょっとHなものは大歓迎。

締切りは発売前の一か月前到着のもの。次回は一月8日。

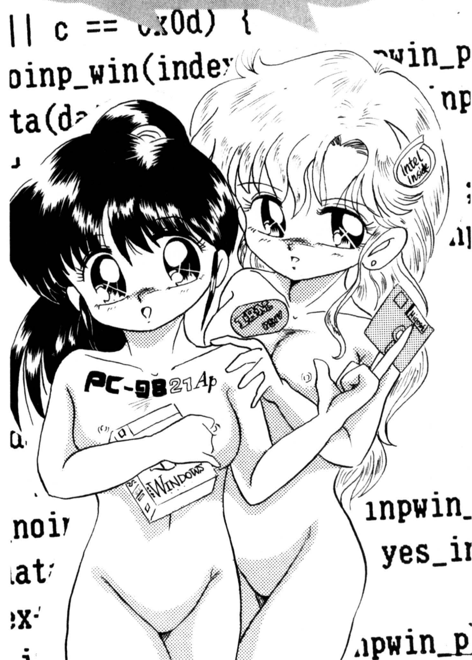
送り先は
〒162　東京都新宿区早稲田鶴巻町543-7　NSビル2階
パソパラチャット編集部
パソパラ自由帝国植民地〇〇係



私も推薦します



わたしたち
すごく恥ずかしい
ことしてるの



「こんなにたくさん同人のソフトがあるなんて知らなかったですわ。しかも、女の子の私の目から見てもキレイでおもしろそうなのばっかり。Ver. 2 が楽しみですわ」
パラさん（16歳：宗教法人職員）

好評発売中
定価880円

売り出しすぐから反響続出の同人ソフトカタログ。1993年の夏コミまでの同人ソフトを中心にＰＰ本誌ライターが熱筆紹介！

★これでバッチリ！　ソフト100本
★ついに買える！　同人ソフト入手法
★初心者OK！　冬休みが楽しくなる
★美少女厳選！　中身の濃いレビュー

同人WINDOW拡張版

パソコンパラダイスの本



私も推薦します



わたしの４コマ
も載ってるの
買ってネ



「11号って月刊化第１号で、今の人気ライター達のデビュー号なのね。もう一度読み返して、自分で死刑判決を下すなんてのも面白いわね。いまからワクワク♡　えへへ／」
ダイスさん（15歳:家事手伝い）

全国発売中
定価1200円

『同級生』や『メタルアイ』『ぷろすちゅーでんとＧ』、『ＧＲ』など今年前半の話題をさらった超おもしろソフトが目白押しの第４号。

★ＰＰ本誌11号から13号までを掲載
★浦田たひろ先生の元気200%表紙
★小林ひよこ先生の描き下ろしマンガ
★爆笑４コマ・ソフパロカフェ第３弾

パソコンパラダイス 総集編4

カット／荻窪 南

PPCHAT 創刊号だよ♡ 大プレゼント!!

もらって,もらって…



1 パソコンゲームソフト「ヴァーストニス」
［提供］HOLY WOOD
※ PC 98 5・3・5
各2名様
◀小説ヴァーストニスより

2 パソコンゲームソフト「あゆみちゃん物語」
［提供］アリスソフト



大人気ソフト「あゆみちゃん物語」これは愛を育むソフトだね。あまり鬼畜にならないようにしようね
▶あゆみちゃん物語・外伝より

※ PC 98 5・3・5
FM TOWNS 各1名様

3 パソコンゲームソフト「天仙娘々」
［提供］ポニーテールソフト



娘々八国志より▶

4 パソコンゲームソフト「エンゲージエランズ」
［提供］ポニーテールソフト



※ PC 98 5・3・5 各1名様

10 美少女戦士セーラームーン人形セット（6体1組）
［提供］松井淳先生 1名様

女子プロレス大好きの松井先生はクレーンゲームも得意。なぜセラムン？
▲レディーサンダーより



6 「シャングリラ2」テレカ
［提供］エルフ 5名様

人気タクティカルコンバットシミュレーション「シャングリラ2」のテレホンカード
▲舞ちゃん絵日記より

5 コミック「あいどる探検隊」3名様



［提供］ホビージャパン

7 OVA「ランス」サイン入りシナリオ 1名様
［提供］あかほりさとる先生

貴重品、OVAのシナリオだけでもめずらしいのに、あかほり先生のサイン本とは！
▲ポリリンのHゲーム大好き!より

11 パソパラCHAT オリジナルテレフォンカード

美樹本先生の描く表紙のテレホンカード。完全限定品だけどドーンとプレゼント。これは家宝になるハズ!?



100名様

8 コミック各1名様「お姉さまとお呼び♡」
9 「どっきゅん♡ハート」
［提供］あだると若大将

レビューで紹介したコミックをプレゼント。完全古本。若大将先生の使用後？でもいいという方に（笑）
▲成年コミックランドより

総勢123名＋αに本当に当っちゃう♡



☆はずれても、なんでもいいからという人にもうれしいお知らせが……

締め切り平成6年1月8日（消印有効）必ず巻末添付ハガキで



イラスト／素人四郎

小説家&イラストレーター大募集

小説：短編は四〇〇字詰め原稿用紙一〇〜二〇枚。中篇は五〇枚。長編は一〇〇枚。必ず完成原稿で持ち込み投稿すること。また次回に続く等の連載は不可。必ず読み切りにすること。

イラスト：カラー、白黒どちらでも結構。できれば、B5以上のものを描いてくれ。下書き、未完成作品は不可。ただし持ち込みの場合はより多くの資料を持参のこと。

マンガ：4コマなら一〇本程度。短編なら8ページから。16ページ、24ページがもっとも望ましい。作品は必ず完成させてくること。カラーマンガも大歓迎。

注意：投稿原稿は原則として返却不可なのでコピーして送ろう！

投稿のあて先

〒162 東京都新宿区早稲田鶴巻町
543−7 NSビル2F
パソパラCHAT編集部
TEL.03-5261-9363 担当：広田
※持ち込みは事前に連絡してから

パソパラCHAT

パソパラCHAT 3月号予告

創刊第2号は2月8日（火）発売

次号は連載小説や連載企画に加え、さらにパワーアップした特別企画も用意。ソフトノベライズやソフトコミックもコミカル&エッチなものを企画。期待にお応えします！

■編集後記

▼パソコンパラダイスがデビューしてから二年半、あの時同様、業界のパイオニアとしてデビューしたパソパラCHATはいかがでしたか。美少女パソコンソフトユーザーのためのノベル専門誌（当然エッチオンリー）として、読者の皆さんの期待にそえる様、編集部一同ガンバリます。ノベライズしてほしいソフトがあったら、編集部宛どんどんお便り下さい。偶数月8日はパソパラCHATの日！ ㋕

▼CHATという単語は英語だと「おしゃべりする」という意味になります。とりとめもない話を友人とするのは、もしかしたらもっとも幸せな瞬間かもしれません。そんな期待を込めて誌名とさせていただきました。とにかく聞いてるだけ（読んでるだけ）でも楽しいけど参加すればもっと楽しい、そんな雑誌にしていきたいと思います。でも、この誌名にはもうひとつ隠された意味があるのです。CHATはフランス語で読むとシャと発音し「猫」という意味になっているのです。本文の末にちょこんといる猫に気づいていましたか？彼女の愛称を募集してます。 Ⓗ



カット／片桐荘三

巻末添付ハガキについて
■プレゼントが当たるアンケートハガキは両面の必要事項を記入し、41円切手を貼って投函してください。プレゼントの詳細は128ページを参照してください。締切りは1月8日（消印有効）
■娘々八国志用ハガキは86ページから掲載されている読者参加シミュレーションゲーム「娘々八国志」に武将として参加するためのもの。必要事項を記入したら41円切手を貼って投函してください。詳細は96ページを参照のこと。締切りは12月24日（必着）ですので遅れないように。なお、軍師として応募するには官製ハガキを使用してください。

パソパラチャット創刊号
コミック花いちもんめ1月号増刊

第1巻第1号　定価680円
発行1994年1月20日

発行人――小林直樹
編集人――福島一馬
発行所――株式会社メディアックス
住所・〒160 東京都新宿区愛住町13-10 曙ビル1F
電話・(03)3356-0151（代表）
編集所――株式会社ピーズサイテック
住所・〒162東京都新宿区早稲田鶴巻町543-7 NSビル2F
電話・(03)5261-9363（代表）
デザイン――テン・グラフィス株式会社
編集協力――またたびスタジオ
印刷／製本――凸版印刷株式会社
写植／版下-三和塩塚アート株式会社

雑誌13886-01

T1013886010680

娘々八国志　将軍登録ハガキ

1.陣営　仕える君主の名前をひとつ書いてください

2.将軍の名前　自分の将軍の名前（１２文字以内）

3.将軍の性別　男　女

4.能力値　１０ポイントを武力・勇猛・人徳・魅力に振り分けてください
（ひとつの能力値に最低１ポイント振り分けてください）

武力
勇猛　×５＝　兵力
人徳
魅力

合計　１０

戦力　＝武力＋兵力

5.国名　あなたの考えた国名を書いてください

君主　の国を
と命名すべし

6.自由記入欄

注意：このハガキには軍師のことは書かないでください

パソパラＣＨＡＴ　１月号　読者アンケートハガキ

☆各記事を５段階で評価してください（５：最良－３：まあまあ－１：最悪）

（　）表紙
（　）イラストギャラリー
（　）特集　美少女の下着
（　）小説ＶＡＳＴＮＥＳＳ
（　）レディーサンダー
（　）放課後クラクラ通信
（　）あゆみちゃん物語外伝
（　）ファッションスクランブル
（　）僕の彼女は小妖精
（　）ゲームガーデン扉
（　）ＡＮＧＥＬ☆ＱＵＥＳＴ
（　）娘々八国志
（　）舞ちゃん絵日記
（　）Ｈゲーム大好き！
（　）成年コミックランド
（　）らんだむ行動隊
（　）ちさと with YOU
（　）パソパラ自由帝国植民地

☆一番良かったイラストは誰のでした？
（　）

☆一番良くなかったイラストは誰のでした？
（　）

☆今後起用してほしいイラストレーター名
（　）

☆今後どのような企画を望みますか？
（　）

☆パソパラ自由帝国植民地の投稿イラストでもっともよかった人の名前を書いてください
（　）

☆御意見、御希望等お好きなことをお書きください

郵便はがき

162

おそれいりますが
41円切手を
貼って下さい

東京都新宿区早稲田鶴巻町543−7
NSビル2F

パソパラCHAT編集部
プレゼント係　行

JANUARY 1994

住所	〒					
TEL	（　　）					
名前		ペンネーム				
欲しいプレゼント	番号	(5　3.5 TOWNS)	年齢	歳	性別	男　女

締め切り1994年1月8日（消印有効）

郵便はがき

162

おそれいりますが
41円切手を
貼って下さい

東京都新宿区早稲田鶴巻町543−7
NSビル2F

パソパラCHAT編集部
娘々八国志係　行

睦月　1994

住所	〒		
TEL	（　　）		
名前		ペンネーム	
年齢	歳	性別	男　女

締め切りは1993年12月24日（必着）

アドベンチャーが帰って来た!!

11月発売予定

メリル=シェフィールド
物理的攻撃 動の中 核を 超常
能力は ていないが 卓
武器の扱いによって 発揮

POSSESSIONER.

ポゼッショナー

ホンホアーロイド
香港出身の召喚師。 むクリー
チャーを操り、ポゼッシ を撃退す
る。またこのチーム 最 でもあ

アリサ=グルーズ
魔道師としての力を持つ。魔法の
誰にも話してはいけない…… 私
品師などではないのだから。と母親にい
い聞かされて育ったのだが、ある日どこか
ら聞いたのか、政府から魔道の力を人々
のために使って欲しいとの依頼が来た
事態が事態なだけに、本来なら秘めて
おくべきその力を使い、ポゼッショナーと
戦う。

このソフトは18禁です。

通信販売のご案内
住所、氏名、年齢、商品名、機種名とディスクサイズ(5、3.5)を明記して、現金書留か郵便為替にてお申し込みください。なお、送料は無料です

DOTT

発売元
ドット企画 TEL.3835-4959
FAX.3835-8929
〒110 東京都台東区台東4-16-8 偕楽ビル1F

QUEEN・SOFT

価格7,800円(税別)

PC-9801VM/UV以降

パソパラチャット 創刊号
コミック花いちもんめ 1月号増刊
株式会社メディアックス
〒160 東京都新宿区愛住町13-10 曙橋K-1ビル1F 発行人 小林直樹
TEL03-3356-0151(代表)
定価680円

雑誌コード13886-01 T1013886010680

